



わ-6-3



はたらく魔王さま！ 3

和ヶ原聡司



9784048708159



1920193005905

ISBN978-4-04-870815-9  
C0193 ¥590E



ASCII  
MEDIA  
WORKS

発行● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 590 円

※消費材料費に加重される経費



電撃文庫心臓部マガジン  
メテオ  
ジャック  
フェア

魔王“パパ”で  
勇者“ママ”?

ついに  
コミック化  
決定!  
『詳細は後編で!』

電撃文庫

フリーター魔王さまの魔民過 fantasia!

特製グッズ大プレゼント実施中! 詳しくはオビ折り返しをご覧ください

電擊文庫

¥590

『魔王さま』がコミック界を侵略!?  
2誌にてコミカライズ進行中!!

その1  
原作のストーリーを  
コミック化!



その2  
ゆる〜い日常を描く  
スピンオフコミック!



電撃魔王にて  
3月27日発売  
作画は三嶋くろねさん



はたらく魔王さま! 3

和ヶ原聡司

電撃文庫 ③ 590

はたらく魔王さま! 3

魔王城（築60年の六畳一間）の庭に、異世界からのゲートが開く。そこから現れた小さな少女は、魔王を“パパ”、勇者を“ママ”と呼んだ！ まさか二人がそんな関係だったなんて……とショックを受ける芦屋や千穂。だが、一番混乱していたのは魔王と勇者だった。

少女は魔王城で預かれることになり、真の意味で大黒柱となった魔王は、子育てに挑戦！ さらに、親子(?)三人でのおでかけもあったりで、恋する女子高生・千穂は、やっぱりヤキモキしてしまうワケで——？

フリーター魔王さまが繰り広げる庶民派ファンタジー、波乱必至の第3弾！

イラスト ■ ON26  
和ヶ原聡司

3

Satoshi Waghara  
Illustration ■ Oniku



9784048708159



1920193005905

ISBN978-4-04-870815-9  
C0193 ¥590E



ASCII  
MEDIA  
WORKS

発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 590 円

※消費税が別に加算されます



わ が は ら さ と し  
和ヶ原聡司

『締切直前の和ヶ原をカンヅメにする相棒』

和 「夜の空気読むためにコンビニ……  
行きたいなあ……なんつって……」  
相 「時計と空気読んで仕事しなさい」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま!  
はたらく魔王さま! 2  
はたらく魔王さま! 3

イラスト:029

おかげさまで魔王様ちようやく大きくカバーに高出です。ひ  
っそりと機会をうかがってありました。ニヤリ。

ブログ移転しました。http://029-onku.com/

はたらく魔王さま! 3

和ヶ原聡司

電撃文庫

2711



はたらく魔王さま! 3

和ヶ原聡司

電撃文庫27113



DENGEKI BUNKO



Sasoriki Wajuhara  
Illustration ■ Chikku

イラスト ■ 029

和ヶ原駿司

3



## CONTENTS

### 序章

P010

### 魔王と勇者、身に覚えなく親になる

P017

### 魔王、その生活が一変する

P089

### 魔王と勇者、勤めに従い遊園地に行く

P149

### 魔王、大切なものを失う苦しみを知る

P241



Chiho Sasaki

Suzuno Kamazuki

Alas=Ramus

Emi Yusa

# Is Life Beautiful?

His name is "Satan" who is a prisoner  
of the hourly-wage system.....!

Manzo = Urushihara

Sadao = Maou

Shiro = Ashiya





Satoshi Wagahara.  
Illustration ■ Oniku

イラスト ■ 029

和ヶ原聡司

3

## 序章

「西陽が後線の彼方に沈み、薄紫色の夕闇が一気に色濃くなろうとする頃合い。かつて街道であつた場所から少し外れた人の腰ほどまでの高さがある草地で、小柄な影が動いた。」

「まったく、飛んでいければすぐなのになあ」

姿の见えない人影の独り言は、女のものだった。

「飛べば見つかる、歩いても見つかる。全く世の中面倒になったものね」

周囲に気取られないように、行く先の気配を探りながら、慎重に歩を進める。

やがて見えてきたのは、どこまでも延々と繋がる板の壁だった。

「手早い仕事ねー。まだ一年ちょいしか経ってないはずなのに」

彼女はその壁面のいたる所に、五つのパーツを組み合わせた十字架が掲げられていることに気づく。

東西南北四つの大陸に、中央大陸を合わせた世界地図を象った、五大大陸連合騎士団の紋章だ。かつて世界を蹂躪した魔王軍に対抗するべく、勇者エミリアの下に集まった人間世界の戦

力全てが連合した五大陸連合騎士団。

現在は、魔王軍に完全に滅ばされた中央大陸の復興政府の支援に当たっている組織である。その連合騎士団の紋章が掲げられた、延々どこまでも連なるこの壁は、ある場所への立ち入りを制限するために設けられたものだった。

空の闇が急激に濃くなる中、その場所。は、まだ視界に入らないうちから、黒い息吹の名残を中央大陸の隅々まで行きわたらせている。

### 魔王城。

エンテ・イスラを侵攻した魔界の王サタンの居城にして侵略の橋頭堡。かつてその城の姿を見た者の中で、生きて帰ってきたのは勇者の仲間であるエメラダ・エトウーヴァ、アルバート・エンデ、オルバ・メイヤーの三人だけであると言われている。

エミリアとサタンの消滅後、中央大陸では連合騎士団による魔王軍残党の掃討作戦が大々的に行われた。

サタンと、四天王最後の生き残りアルシエルが消滅した後の魔王軍は、あれだけ人類が苦戦を強いられたのが嘘のように鳥合の衆と化し、一年と少しで主だった残党の討滅は完了した。しかし、未だ中央大陸では、生き残った悪魔が引き起こす事件が散発している。

連合騎士団は残党の掃討作戦の最終目標を、「魔王城の解体」に設定していた。

エンテ・イスラに覇を唱えるべく、かつて世界の中心に位置した中央大陸最大の交易都市だ

ったイスラ・ケントウラムに築かれた魔王城。

侵略で崩壊した都市に一夜で出現したその城は、西大陸の聖地サントイグノレッドの大神殿や、東大陸の大帝都にそびえる古城ソウテンガイを遥かに凌駕する規模を誇る。

内部は広大にして複雑怪奇。今も地下の牢には悪魔の贄に供された中央大陸人達の骨が山積みになっているとか、夜な夜な死霊が彷徨っているとか、残党悪魔が住処にしているなどといった噂が絶えない。

世界の中心にそんな不吉な城が建ったまま、というのは復興の士気にも関わるし非常に縁起が悪いと、かなり早い段階で魔王城の解体工事のために大勢の騎士団が城に入っていた。

だが、立て続けに起こる原因不明の怪奇現象や疫病の流行、残党による抵抗などの影響で工事は遅々として進まなかった。また、魔王軍の影響が完全に排除された後、中央大陸の復興のイニシアチブを東西南北のどの大陸が握るか折り合いがつかず、結局こうして壁で囲むことで民間人の出入りを禁じ、政治的決着を見るまで騎士団を配置して解体工事を期限なしで行うことになった。

「ま、その点助かったのかな。いきなりブツ壊されたらどうにもならなかったしね」  
彼女は壁の前に立つ。

周辺に警戒中の警備隊がいないことを確認すると、なんの手がかりもなく、十メートルはありそうな壁を、一足飛びでふわりと飛び越えた。

その一瞬だけ、彼女の全身が淡く輝き、暗くなった周囲を照らし出す。

壁を越えると、その先は今まで歩いてきた道が整備された街道に見えるほど、更に荒れ果てた草地と荒れ果てた森の連続。夜の鳥や虫の気配すらしない、完全なる死の世界だった。

彼女は死の大地を、ひたすら走った。世界の中心に向かって。

それほどしないうちに、彼方の空に黒い影が見えてきた。

まるで天に挑まんとするような尖塔が世界のどの城よりも高くそびえ、夕闇の中なお黒き威容を湛える、かつての魔と、闇の果嗣。

「なんかなあ、かぶれてるなあ。オリジナリティに欠けるよ」

だが彼女はその威容を見上げながら、つまらなそうに呟いた。

やがて魔王城の東側の門にたどり着いた彼女は、巨人ですら直立したまま入れそうな巨大な門に行き当たる。その門に彫られた、鷲のような巨大な鳥の彫刻を見上げ、ためらいもなく門から魔王城へと入ってゆく。

なんの気配も無い大回廊からは、魔王城のいたる所へ通じる道が、アリの巣のように分岐している。彼女はそこから迷わず一本の道を選んで突き進む。

彼女の左手には、紫色の宝石が嵌め込まれた指輪が光っていた。

かつて勇者エミリア達が、聖剣の導きに従い目指したその場所こそ、魔王城の最上階。

魔王サタンの玉座であった。

途中何度も回廊やテラスを通り、まともな人間なら上下左右の感覚が失われるほど長い時間走るうち、夜空にはいつしか満月が昇っていた。

月光が魔王城を照らし、彼女は光の中に建つ闇をひた走る。

どれほどの時間が過ぎただろう。

やがて到達した、主のいない玉座の間。

勇者との戦いの爪痕も生々しく残る、思いのほか飾り気の無い空間で、彼女は誰もが恐れる魔王の座っていた玉座の真裏めがけて突進した。

重い戦帳がかけられたその先には。

「ああ……」

そこにあったのは、部屋だった。

当たり前の部屋があった。

在りし日の魔王の威容を彷彿とさせる衣裳用と思われる巨大な長持。人間の背丈では考えられないほど背の高い書棚。彼女の背丈を遥か凌駕する執務机のようなものの上には、巨鳥の羽が一枚だけ突き立っていた。

「なんにも、無いね」

だがこの部屋の書棚には、一冊の書物も無い。長持は蓋が開け放たれたまま中に埃が溜まり、巨鳥の羽をペンたらしめるインクも無い。

決して、誰かに持ち去られたわけではない。初めから、この部屋には何も無いのだ。

「……君は、どこで間違えちやつたんだろうね」

さびしそうに呟くと、彼女は何も無い部屋を横切つて、更に奥の月光差し込む大窓に向かいそれを開け放った。

ガラスの一枚も嵌められていない窓の向こうは、南向きのテラスだった。

「見つけ！」

家庭菜園、と言うには少々規模が大きい、そこに並んだいくつもの鉢の中で、その木は月光を浴びて凛と立っていた。

二本の別々の木が絡まりあつて一つの形を成しているかのような、不思議な形状の木だった。「でも、もうちょつと用心してはしかなかったなあ。目立つよこれじゃあ」

彼女は苦笑して、世話する者がいなくなつて久しいであろうその木に左手をかざした。

すると、左手の指輪の宝石が月光に照らされて輝きを放ち、それに応えるように、木もまた光を放つ。

やがて手と木の間に、球状の光が出現すると、指輪の輝きは消え、たった今まであれほど生命力に溢れていた木は、灰のようにぼろぼろと崩れ落ちる。

「元気に育ってくれたね、偉い偉い」

彼女は崩れた木には一顧だにせず、出現した光の球に向かって微笑んだが、

「!!」

ふと、テラスの東側の空に向かって鋭い視線を飛ばす。

月光に照らされた夜空に、規則正しく並んだ五つの星が浮かぶ。

いや、それは星などではなく、光りながらこちらに近づいてくる飛行体だ。

「やっぱ気づくか」。早いな。必死だな。当たり前か」

彼女は光の球を抱えると、さっと部屋の中へと戻ってゆく。

「ま、いざとなったら大体の居場所を知ってるから、最後まで責任持って育ててもらおうか」

そんな独り言に答えるように、光の球が温かく脈打った。

「さてそれじゃ、久しぶりの追いかけていただきますか。この何百年かで、どれくらい腕を上

げたかな? ガブリエル君?」

どこか楽しそうにしながら、彼女は魔王城の闇の中に姿を消す。

魔王城のテラスから遠く彼方に見える五つの星の更に向こうの東の空から、エンテ・イスラ

の夜空に君臨する二つ目の月が、ちょうど顔を出すところだった。

五つの流星が魔王城に到達する頃、青い月と赤い月は丁度夜空に並び立つ。

そして、魔王城を照らしていた女の纏う仄かな光は、その頃には影も形も消え失せていた。



魔王と勇者、身に覚えなく親になる



機械油と金属の臭いに満ちた空間で、磨き上げられた歯車が唸りを上げて回転を始めた。連鎖する駆動系の機構はわずかな力で恐ろしく速い初速とパワーを得、最新の駆動ギアコントロール機能により、柔軟な駆動制御が可能となっている。

その性能を助けるのはボディを構成しているビカビカに磨き上げられた骨格。軽量、だが、頑丈。

安全性も折り紙つき。光学センサーによって前方へのセーフティフラッシュがオートで作動し、警告サウンドデバイスもワンタッチで自機位置を知らせることができ、全方位に向けた対光リフレクタープレートも標準装備され、不慮の接触への対応もバッチリだ。

これだけ実践向けの機能を満載しながら、輸送積載性能並びに操縦席の居住性能はわずかも損なわれていない。

シートは革張り。前方の大容量コンテナに加え、オプションで各所に多様な貨物積載ユニットを追加搭載できる。

「どうだ、お前さんの要求を全部叶えてやったぜ」

機械油の臭いを纏った作業服姿の男は、自信に満ち溢れた口調で言ってそれを指し示す。

「……まだ、実際に、動かしてみなければ」

だが、もう一人の若い男は難しい顔で首を振る。すると、機械油の男は、

「そう言うと思ったぜ。とっくに整備は終わっている。俺が腕によりをかけた調整だ。ダメエ

「如きの操縦、百年だって耐えてみせるぜ」

挑発するように腕を組む。

「そいつは楽しみだな」

若い男はにやりと笑うと、自ら操縦席へと乗り込む。

「おっ……こいつぁ……」

思わず上げた声に、機械油の男がにやりと口の端を上げる。

傍らで、そんな男二人の様子を見ていた小柄な影が、鬱々とした様子で呟いた。

「……なんの茶番だこれは」

若い男はそんな声など気にせず、両腕をハンドルにかけ、二本あるペダルの右側をぐつと踏み込んだ。

その瞬間、男は驚愕の声を上げる。

「おおおお！ すごい！ 軽っ！ ギアチェンあるとこんな軽いのか！」

整備倉庫から飛び出しシャコシャコとそれを滑ぐ若い男は、満面の笑みで叫んだ。

「これに決めた！」

「毎度、真奥ちゃんと俺の仲だ、負けてやるよ。二万九千八百円でどうだ」

「最高だぜ広瀬さん！ あ、払いはそっちがするから。鈴乃、頼んだ」

真奥と呼ばれた若い男は、倉庫の脇で仏頂面したままパイプ椅子に腰かけていた、浴衣姿

の少女に顔をしゃくった。

機械油まみれの男は、眉を上げて少女を見る。

真奥に鈴乃と呼ばれた少女は、心底うんざりした表情で、手にした金魚柄のトートバッグの中から縮緬生地のがまぐちを取り出した。

「店主殿、先ほどのやり取りは、何か意味があつたのか？」

東京都渋谷区笹塚の、京王線笹塚駅から徒歩五分。菩薩通り商店街の中にある、ヒロセ・サイクルショップの店長である広瀬は、頭に巻いたタオルを取って、顔の汗を拭いながらははと笑う。

「気分ってやつだ気分。でも本当にお嬢さんが払うのかい？ 真奥ちゃんの彼女さん？」

その間に、少女はあからさまに顔の筋肉をひきつらせた。

「そういう冗談はやめていただきたい。行きがかり上、仕方なく私が払うだけだ。貞夫殿、いつまではしゃいでいる。防犯登録とやらもするのだろう。戻ってこい」

「へいへい」

真新しいぴかぴかの高級シティサイクルに乗った真奥貞夫は満面の笑みで戻ってきた。

アルミフレームに全方位に向けて反射板が付き、暗くなると自動で点灯するライトに加えて、真奥全願の六段階変速機搭載のブリジストン製シティサイクルだ。

「自転車が二万九千八百、防犯登録料が三百円………端数がヤボったいからもう百円負けて、三

万円ちよつきりでいいよ」

「お心遣い感謝する」

鈴乃は綺麗に折りたたんだ一万円札を三枚、広げて差し出した。

「はい毎度。どうだい、せつかくだからお嬢さんも一台」

広瀬が勧めるが、鈴乃は首を横に振る。

「必要な訓練を受けていないので、今は遠慮しておく」

「必要な訓練？」

首を傾げる広瀬に、鈴乃は真面目くきつて言った。

「免許が不要な代わりに、『ほじょりん』という補助器具を使った訓練が必要と聞いている」

その言葉に、真奥は浴衣姿で小柄な鈴乃が、補助輪付き子供用自転車在必死で練習している姿を思い浮かべて吹き出しそうになる。

「意外と可愛いかもしれないねえな」

「何かくだらないことを考えていないだろうか」

真奥の反応を見て、鈴乃は軽く彼を睨む。

「全く……店主殿、領収書を頂きたい」

「お？ お、おう、手書きのしかないけどいいかい？ 三万だから証紙いるな」

「宛て名は、『株式会社サント・イグノレッド』で頼む」

それを聞いて驚いたのは真奥だ。

「お、おい、それは……」

だが広瀬は、何事も無かったかのようにさらさらと宛て名を書いて領収書を切った。

「はいありがとうございます。真奥ちゃん、せっかく買ってもらったんだから、大事に乗れよ」

「あ、ああ……」

広瀬に見送られて自転車屋を出た二人は、商店街を並んで歩き、住処のアパートへと向かう。真新しい自転車を引いてウキウキ顔の真奥と、日傘の下で、夏の暑さに顔をしかめる鈴乃。

「しかしお前、領収書なんか切ってどうすんだよ」

「きちんと資金の出納を記録しておけば、将来的に貴様を討伐してから。向こうに帰って相應の額で精算してもらえるかもしれないだろう」

「『討伐する予定の魔王に自転車せびられました』ってか？」

鈴乃は日傘の下から睨み上げる。

「魔王サタンは教会の聖職者に自転車をせびるケチくさい悪魔だったと宣教して回ろうか？」

「今は上に立つ者こそ節度が求められる時代だ。庶民派とエコをアピールすんのは悪いことじゃないらしいぜ？ 特に俺の場合は、実態が伴ってるからな」

エコで庶民派の実態が伴っていることを自薦自賛する小市民の。魔王は、ふと、通り過ぎかけた店を振り返った。

「鈴乃ちよい待ち。文房具屋寄ってく」

真奥は新しい自転車道を脇の脇に停めきちんと鍵をかけて、小さな店に入っていく。文房具よりも子供向けの玩具や駄菓子の方がメインの商品ではないかと思わせる店だったが、出てきた真奥が買った物の用途が分からず鈴乃は首を傾げる。

「瞬間接着剤など何に使うんだ」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれた、見ろこれを」

真奥はにやりと笑うと、ポケットから小さな赤いプラスチックプレートを取り出した。

「お前が潰したデュラハン号の反射板だ。警察に呼ばれて処分したときに、これだけもらってきたんだ。言わば形見分けってやつだな」

真奥はそう言うと、新しい金属製のカゴの前面に接着剤で反射板を取りつける。

「これでこいつは、主の命を守り気高く散っていったデュラハン号の魂を受け継いだ！ 今からお前の名は、デュラハン式号だ！」

「……それは良かったな」

道具に愛着を持つのは結構だが、今日び自分の乗り物、しかも自転車に名前をつけるいい歳をした男というのは、傍から見ていて色々と悲しいものがある。

「気は済んだか。行くぞ、魔王」

ましてその相手が、人類の宿敵にして悪魔の王、魔王サタンなのだ。

日本では鎌月鈴乃と名乗っている少女は深く嘆息すると、真奥の返事も聞かずに歩を進める。憂鬱そうに歩く鈴乃が髪に挿したガラス製の涼やかな簪に、日傘越しにも強い夏の昼の太陽が、真つ白な輝きを落とした。

※

魔王サタン。それは遙か遠き異世界エンテ・イスラで、世界を征服せんとした悪魔の王の名。真奥貞夫。それは東京都心から少し離れた住宅街で、アルバイトで生計を立てる青年の名。どんな人間であろうと、あるいは神でさえ、まさか世界征服の野望を抱く魔王が、巡り巡って東京渋谷の笹塚で、アルバイトで糊口を凌ぐ日が来ようとは思ひもしまい。

勇者エミリア・ユステイーナとの戦いに敗れ、異世界・日本に漂着して一年と少し。

笹塚の築六十年の木造アパート、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室の六畳一間を飯の魔王城として、フリーターとなつて立派に自立の道を歩む魔王サタンこと真奥貞夫の近辺は、この数か月でにわかには憶ただしくなってきた。

最初の一年は、貧乏で辛いこともたくさんあったが、それでも毎日勤勉に労働に励んできた。そして九ヶ月ほど前に、笹塚の一駅隣の幡ヶ谷駅前にあるマグロナルド幡ヶ谷駅前店に長期アルバイトとして採用される。目標とする上司にも恵まれ、真奥の日本での生活はどうかこ



うにか軌道に乗りはじめた。

しかし、逃げた魔王を追ってきたという勇者エミリアが、**避佐恵美**と名乗って現れた瞬間、それまでの平穏な日常が崩れはじめた。

アルバイトで食い繋ぐ違法精神旺盛な暮らしが、魔王にとっての平穏な日常であるかどうかは議論の余地があるが。

それでもかつての部下に裏切られて殺されかけたり、実は勇者も人間社会に裏切られていたというのは、十分日常が崩れた部類の出来事に入るだろう。

それらの事件を解決して戻ってきた日常が、またアルバイトに精を出し、毎日三食食べて過ごす毎日なのだが、その生活を守るために魔王は全力を尽くすのだ。

勇者が電車で三駅の所からいちやもんつけに来たり、そんな勇者を連れ戻すために現れた**大法神教会の聖職者**が、魔王城の隣に住まって悪魔の心身の健康を害する聖別食材を差し入れに来たりしても、魔王は世界征服の野望再興のために今日も小市民的生活を堅持する。

一日一日の堅実な生活と、マダロナルドでの出世を目指した勤勉な労働が、明日の世界征服の道へと続いていると信じて……。

## ※

毎日悪魔の心身の健康を害する食事を差し入れてくる魔王城の隣人、大法神教会訂教審議会筆頭審問官クレスティア・ベルこと鎌月鈴乃に壊された自転車をも、真奥はかなり色をつけて弁償させた。

それが気に食わないのだろうか、鈴乃はずっと不機嫌そうな顔をしている。

「……ちよつと、高かったか？」

命を狙われ、自転車を壊された側なのに、鈴乃の機嫌を窺うように尋ねる真奥。鈴乃は真奥の顔を見ず、日傘の下で覆れたようにため息をついた。

「エミリアが貴様を放置したまま安穩としている理由が、なんとなく分かった」

「あ？」

「先ほどの自転車屋の店主殿とは、懸念なのか」

「ああ。元は地区の清掃と一緒にやってるってだけでそれほど親しくなかったんだけど、何回か奥さんが子供連れてうちの店に来てたんだよ。その縁で最近仲良くなってるさ」

至極平和な人間関係を話す真奥。鈴乃は道の角を曲がって日陰に入ると、ほんのわずかに暑さが和らいだ安堵と、若干の虚脱感を同時にため息として吐き出した。

「私は、今日自転車屋に行くと言われたとき、相当の覚悟をしてきたのだぞ」

「どういうことだよ」

鈴乃はトートバッグの中から、薄い冊子を取り出して真奥に手渡した。

「魔王たる貴様が要求してくる弁償だ。どんな高級規格を要求されるか、正直肝が冷えていた。これでも借りが大きいのは自覚していたからな」

真奥は片手でなんとか冊子をめくる。それは自転車専門のカタログだった。

「もうなんてんばいく？ とか、ろーどさい……労働サイクル？ とか、荒れ地を駆けるびーえむなんとかとかー そんなのが来ると思うだろう普通は！」

「……無理に知らない横文字を言わんでも」

「語学とは挑戦だ！ と、とにかく、防犯登録込みで三万とは拍子抜けもいいところだ。私は今日、二十万円おろしてきたのに」

「お前なあ、あんな生活してる俺が、そんな高級モデル要求するとも思ったのか。お前が叩き潰したデュラハン号、方南町のドッキ・リ・ホーテで六千九百八十円だったんだぞ」

カタログを突っ返しながら安物買いを自慢をする真奥に、鈴乃はますますやるせなさ募る。「血に飢えた魔王が人の金で物を買った。何が起こってもおかしくないと思うだろう！」

「信用ねえなあ。あ？ 魔王の立場から見れば悪人として信用されてるのか？ どっちにしたって、言っちゃ悪いが広瀬さんとこにそんな高いのきつと無いぞ」

そんなことを言つてあつからんと笑う真奥を、鈴乃は忌々しそうに見上げる。

だが、何かに気づいて見下ろしてきた真奥と目が合いそうになつて、さつと目をそらす。

「でも二十万おろしてきたつて、お前来たばっかで働いてもいないのに、なんでそんな金持つてるんだよ。俺こんなに働いても、預金残高が二十万円越えたこと無いのに」

「私はお前やエミリアと違い、準備をする余裕があつたからな」

鈴乃は肩を練めてそれだけ言う。

勇者エミリアこと遠佐恵美とともに新宿に初めて出た日のこと。質屋大手のムギ兵に持ち込んだ宝飾品の類いには、真奥なら目の玉飛び出るような値段がついていた。

もちろんその正確な値段を、悪の権化である魔王に教える気はさらさらないが、鈴乃には慎ましく生活していれば向こう数か月は働く必要が無いほどの余裕があつた。

「へえへえ、お金持ちでようござんすね」

少し不貞腐れたように言いながらも、真奥は新しい玩具を与えられた子供のような笑顔で、新しい自転車のベルを鳴らした。

「ま、とにかくサンキュな。大事に乗るわ」

「……」

思いがけない一言に、鈴乃は思わず真奥を見上げる。その瞬間先ほどよりもはつきり目が合つてしまい、慌てて日傘で無理やり視線を遮る。

悪の権化のくせに、全く邪気も街いも無い笑顔で礼を言うなど、言語道断だ。誰かにここま  
で素直な感謝の言葉を述べられたことなど、一体いつ以来のことだろう。

「わ、私は弁償をしただけだ。もう貴様の物なんだから、好きに使えばいい」  
「おう」

そのまましばらく無言の歩みが続く。

「ま、魔王」

「あ？」

正体不明の動揺で沈黙に耐えられなくなった鈴乃が、足を止めて横を指差した。

「あ、あれはなんだ？　ここ数日、花を扱う店やスーパーで突然見るようになったが」

鈴乃が指し示すのは、花屋の店先だった。

そっけない白い木の棒が束ねられたものが、色とりどりの美しい花を押しのけて店先の中央  
に沢山並べられていた。

「ああ、おがらだろ」

なんの気なしに答えた真奥だが、鈴乃はほうと驚いたように頷いた。

「なるほど、豆腐屋におろされる前は、乾燥してあんな形状をしていたのか」

「……豆腐？」

真奥は鈴乃が何に感心しているか一瞬分りかねたが、ふと、通り過ぎてきた所にある豆

腐屋を振り返って得心する。

「あー、おい、鈴乃。おからじやねえから。お・が・ら。おがらだから」

大法神教会の外交・宣教部に轄を置いていただけあつて、鈴乃はエンテ・イスラの人間の割にかなり日本の文化風俗に精通している。

だが逆にそれが仇となり、調査漏れを既知の単語や知識の中で補おうとして、先ほどの補助輪の話のように、時折妙なことを口走ることがある。

「そうだ、今日の夕食はおからのコロツケにしよう」

「人の話聞け。主婦かお前は」

「コロツケも素晴らしい料理だが、本来捨てていたおからを代用して、オリジナルと全く遜色のないローコスト、ローカロリー料理を実現したこの国の料理人の知恵には恐れ入る」

鈴乃が首を傾げながら夕食の献立の起源に思いを馳せていると、ちょうど貴い物に來たらしい主婦が、そのおからを手にとって一束、購入していった。

「もうすぐお盆だろ。あれはお盆の迎え火と送り火を焚くのに使うんだよ」

真裏はおからの束を示しながら言う。

「お盆……各家庭の祖霊を祭る行事のことか。だが、あれは八月のことではないのか？」

さすがに、宗教観が混じる行事のことだけはきちんと調べているようだ。

「ああ。旧暦の七月は今の八月に当たるからな。でも、東京に限っては新暦の七月にお盆の

迎え火を焚くんだよ。あれはそのための燃料だな」

「ほう。宗教観の薄い国だと思っていたが、意外にそういう行事は浸透しているのだな」

「でも、なんで東京だけ早いんでしょね？」

「ああ、色々説はあるらしいが、日本が旧暦から新暦に移り変わって太政官令で全ての行事を新暦準拠にしようってなったとき、対応できたのが東京だけだったらしいぜ？ 地方は何百年も旧暦でやってきたのに命令一つで変えられるもんじゃないしな」

「なるほど」

「へー」

「今でもお盆休みみて言ったら八月半ばのことだろ？ でも当時の政府の意思が強く影響した東京と神奈川の一部だけは新暦の七月、それ以外は旧暦で七月に当たる八月でお盆をやることになったらしい」

「……よく調べているな」

「真奥さん、魔王なのに物知りですね！」

「去年は調べものするんで随分駆け回ったからなあ、色々役に立たん知識は……あ？」

「んっ？」

「はい？」

真奥と鈴乃は、何かに気づいて揃ってゆっくりと後ろを向いた。

「うわっ!! ち、ちーちゃんいつの間につ!!」

「千穂殿っ! いつからそこにっ!」

一体どのタイミングでそこに立っていたのか。真奥のアルバイトの後輩であり、真奥や鈴乃の正体、そして異世界エンテ・イスラの存在を知る唯一の日本人、女子高生の佐々木千穂が高校の制服姿で立っていたのだ。

学校指定の靴ではなく、銀色の携帯型クラーボックスのようなものを担いでいる。

「驚きました?」

してやったりの笑顔の千穂。

「前に鈴乃さんにやられたことやりかえしてみました……って言っても、今日の鈴乃さんの晩ご飯がおからのコロッケになった、つてところからしか聞こえませんでしたけど」

「お、おう、そうか。もう学校終わったの? 随分早いじゃん」

「もう期末テスト終わって短縮授業ばかりですから」

明るく答える千穂。そう言えば、七夕前後にテストがどうこう言っていた気がするが、その頃千穂が成績の行く末をボヤいていた、特別バイトのシフトを削っていたようなことは無かった。それどころかエンテ・イスラに関わる騒動に巻き込まれていたりするのに成績に影響が無いというのも、それはそれで肝が太すぎるような気もする。

真奥がそんなことをぼんやり考えていると、千穂は、真奥の新しい自転車に目をやった。



「あれ、新しい自転車だ」

「ああ。この前、鈴乃に自転車叩き潰されたからさ」

真奥はデュラハン式号のサドルをばんばんと叩く。

「魔王が欲しい自転車を見つけたと言うから、先ほど弁償してきたところだ」

鈴乃は驚いてしまったことを取り繕うように、殊更に忌々しそうに吐き捨ててみせた。

「ところで、千穂殿はどうしてここに？」

「今、真奥さんたちが話してたものを買いに来たんです」

千穂は二人の間から、件の花屋を指差した。

「おがら？」

「はい。お母さんのお使いで。そのあと、真奥さんちにも行くつもりでした」

千穂は体を揺らして、肩から提げたクーラーボックスを強調する。

「お父さんの親戚からアイスクリームもらったんですけど、うちのお父さんもお母さんも甘いもの食べないんです。いっぱいあるから、良かったら真奥さんたちにどうかなって」

「アイス!? マジで!? いいの!？」

降ってわいた冷たい食べ物に、真奥の目が輝く。

「やー、超嬉しいー! もらうもらう! ありがとなー!」

「良かった。じゃ、ちょっと待っててください。おがら買ってきます」

喜んで飛び上がる真奥を嬉しそうに見てからそう言って、千穂は一旦花屋に向かう。

鈴乃はそんな魔王と女子高生の姿を横目に見ながら、

「……もうこのまま放っておいてもいいんじゃないのか？」

最近感じはじめている疑問が、思わず口を突いて出たのだった。

真夏の暑気に浸食され、唸りを上げる扇風機が温い空気を必死でかき混ぜているだけの魔王城に、快哉が響き渡った。

「アイスっ!」

「アイス!!」

魔王城の住人であり、魔王サタン配下の四天王にして悪魔大元帥アルシエルとルシフェルは、千穂を伴って帰宅した真奥の言葉に目の色を変える。

「し、しかも、ハーゲン・デッセのぶ、ぶ、プレミアムギフトボックスではありませんか!? は、本当によろしいのですか?」

「気にしないでください芦屋さん。これでもまだうちに結構残ってるんです」

千穂はクーラーボックスを差し出して、芦屋に向かってそう言った。

芦屋四郎と名乗り、魔王城の家計と家事を一手にまかっているアルシエルは、千穂の背後



から後光が差しているかのような錯覚を覚え床にひれ伏す。

「本当に……佐々木さんと佐々木さんのご両親にはどうお礼を申し上げればよいか……」  
「そんな、大げさですよ」

長身の芦屋が土下座しかねない勢いで頭を下げるので、千穂としても慌ててしまう。

「うっわ、凄いな味がある！ 早く食べようよ芦屋！ スプーン出してスプーン！」

「漆原……その前にちーちゃんになんか言うことあんたろがよ」

もはやアイスしか見えていない漆原に、真奥は苦々しくそう言った。

漆原半蔵と名乗り、魔王城で無為徒食の生活を送っているルシフェルは、もちろんそんな小言に耳を貸さない。

「いいんですよ真奥さん。漆原さんがそういう人だってこと、私よく知ってますから」

千穂も笑顔で毒を吐く。

千穂は、真奥達の正体を知ることになった一件で、当時敵であった漆原に数々な目に合わされてる。

なし崩し的に真奥の軍門に下った後も目がな一日パソコンの前から離れず、かと言って家事を手伝うでもないニート同然の生活を送る漆原に対し、千穂は何かと冷たい。

真奥は苦笑して、千穂を宥める意味も込めて肩を柔らかく叩く。

「まあ、その、ほんとありがとな」

「……っ……あ、あ、はい、どういたしました」

その瞬間、千穂は暑氣によらない理由で頬を朱に染める。

千穂は、既に自分の口から真奥へ好意を抱いていることを伝えているが、真奥からの返答を必要とする伝え方ではなかったために、その告白は事実上宙ぶらりんになっている。

もちろん真奥が軽々に返答ができる存在ではないことは理解しているので、宙ぶらりんなりに気持ちの整理はできていた。

それでも真奥のこういった無意識の行動に意表を突かれ、心臓が跳ね上がるのが度々ある。

「あ、あ、そうだ、鈴乃さん、鈴乃さんも一緒に……あれ？」

赤面をごまかそうと、一緒に帰ってきた鈴乃に声をかけようとした千穂だが、ドアから顔をだして外をきよろきよろと見回しても、鈴乃の姿はどこにも発見できなかった。

「あいつなら、なんか帰ってきた後すぐに出てったぞ？」

「そ、そうだったんですか？」

「イチゴに抹茶にミント……何これ、カボチャ？ すっげえ！」

「あ、漆原さん！ 鈴乃さんの分ちゃんを取っておいてくださいいよ！」

漆原のはしゃぎ声を聞き、外を見ていた千穂は慌てて室内に取って返す。

「えー、ベルの分もー？」

あからさまに不満そうな漆原。千穂は頬を膨らませて、一人で何個も抱えていた漆原からア

イスのカップを奪う。

「そうじゃなきゃあげません！ 一人でいくつ食べる気ですか！ お腹壊しますよ！」

「僕を子ども扱いすんなよ！ こう見えてもお前より何百倍も年上なんだぞ！」

「長く生きてたつて、漆原さんは子供です！ 小学生の方がよっぽど聞き分けいいですよ！」

「おーい、暑いからケンカはほどほどにしとけー」

真奥はやんわりと仲裁に入ると、クーラーボックスを手に取り戸屋に手渡す。

「とりあえず一個だけにして、あとはしまっとけ。鈴乃にはバニラでもとつときやいいだろ」

「御意に」

戸屋は恭しくそれを受け取り、もう一度千穂に頭を下げてからアイスのカップを一つ一つ丁

寧に冷凍庫にしまつてゆく。

「えー、一個だけよ？」

イチゴ味を手握ったまま、片づけられていくアイスをいじましく眺める漆原。

「いいじゃんベルの分とかさー。あいつ敵だよー？」

「う、る、し、は、ら、さん!？」

「な、なんだよ佐々木千穂！ お前にとつてもあいつは敵だろ！ 色々な意味でさ！」

漆原の言葉に、収まりかけていた頬の熱が復活する千穂。

「て、敵ですよ!? でも、敵でもお友達なんです！」

毅然としてそう言い切る。

「はあ？　なんだよそれ」

「それはそれ、これはこれなんです！　そんなことも分からないからお子様なんですよ漆原さんは」

「ムカ。そうだなー、僕子供だから分かんないな！。敵相手にヤキモチ妬く女のことなんか全然分かんないあでっ！」

千穂に大人げなく言い返そうとした漆原は、突然脳天に落ちてきた衝撃にうめき声を上げた。「そこまでだ漆原。貴様、大恩ある佐々木さんにこれ以上暴言を吐くようなら、そのイチゴ味を没収してネット回線を解約するぞ！」

涙目の漆原が見上げると、芦屋が悪鬼の表情で彼を見下ろしていた。

「無駄飯を食らい家計を使い込み、家事も手伝わない貴様など、ハツキリ言っ聖法氣料理を作ってくるクレスティア以下だ！　まして公私の別なく魔王様を助け、何かと魔王城の行く末に気を使ってくださる佐々木さんに暴言を吐くなど、天が許してもこの私が許さん！」

魔王城の主夫が、千穂を背後にかばって巨大な雷を落とす。

最初こそ、千穂が真奥に近づくことを快く思っていなかった芦屋だが、今となっては完全に千穂と千穂の母の料理に餌付けされ、佐々木一家を家計の救い主として疑わない。

そんな芦屋の形相を見て、漆原は顔をひきつらせて一歩身を引き、

「わ、分かったよ……まったく、真奥も芦屋も揃って女子高生なんかに手懐けられちゃってさ」  
ぶつくり言いながら殴られた頭をさすり、それでもしつかりイチゴアイスは抱えたまま、定位置のパソコンデスクの前へとすこすこと引き下がる。

「さあ、佐々木さん、こちらへどうぞ。風が通ります。今麦茶をお入れしましょう」

芦屋はカジュアルコタツの上座に千穂を座らせ、アイスと麦茶を差し出して、後ろから扇風の風が柔らかく当たるように場所を調整する。

魔王城が入居するヴィラ・ローザ笹塚には、レギュラーオブションとしてのエアコンが無い。このような場合、店子は貸主である大家の志波美輝の許可があればエアコン設置工事が可能なのだが、肝心の大家が海外に旅立ったまま、いつまで経っても帰らないのだ。

昨年とは違い、定期収入も見込めるようになった真奥は、大家が管理を委託しているという不動産管理会社に問い合わせてみたが、なんと不動産そのものに直接手を加える管理の契約は結んでいないのだという。

だから、共用廊下の蛍光灯は取り替えてくれても、個別の契約管理までは扱っておらず、あくまで大家に仲介するだけ。

実際に、二か月前に耐震補強工事が入るときは大家の志波が直接説明に訪れていた。

エアコンの取り付けは、室外機と屋内の本体とを結ぶために壁に穴を空けねばならず、「建物の現状を損なう工事」に該当する。



大家は海外に行っているとはいえ行方をくらましているわけではなく、定期的に自分の居所と現状を知らせる手紙を寄越す。

しかし大抵投函が何週間か前のことであり、次の手紙が来る頃には居場所が変わっているため、コンタクトの取りようがない。

そしてそれ以前の問題として、真奥も芦屋も漆原も、その手紙を開封もしないままカラーボックスの奥底に封印している。漆原が来てすぐの頃の『大家の水着グラビア事件』は三人の大悪魔の心に未だ深い爪痕を残しているのだ。

その後、鈴乃が入居するまでの手紙を全て無視していた真奥達だが、大家の正体を知らない鈴乃から、何か重要な連絡事項が記されていたらどうすると諭され、仕方なくつい先日、最新の手紙を一通開封した。

金糸を織り込んだ、肌触りが明らかに高級品の便箋はいつも通り。万年筆か、羽ペンでも書いたかのような優雅な筆致もある意味見慣れた文字だ。

どうやら今、大家はインドネシアにいらしい。グラビア事件のときがハワイなので、また俗っぽくバリ島にでも行っているのかと思いきや、ボルネオ島に住む先住民族の精霊を祭る儀式に参加しているという、動機も意味も不明な現状報告が記されていた。

同封されていた写真を意を決して見ると、その先住民族と思われる人々の色鮮やかな民族衣装の集団の中で、一際異彩を放つ金と銀のスパンコール入りドレスを羽織り、罽毯帽子に

孔雀の広げた尾羽のような極彩色の羽を何十本も突き立て、相変わらずの分厚い化粧で笑う大家が写し出されていた。

その瞬間、真奥は能動的に大家にコンタクトを取ることを諦め、全てを流れに任せることに決める。

昨年の夏の猛暑もエアコン無しで耐えきったし、何より今年は漆原という不良債権が重く家計にのしかかっているのだ。

これは、余裕が出てきたからといって贅沢をしてはいけないという神の啓示だと、真奥は思うことにした。魔王の身の上で神の啓示で物事を判断していいのかどうかはこの際問わない。

「でも、もっと暑いかと思ってましたけど、結構このアパート風が通るんですね」

「まあな、それだけが救いっちゃ救いだ。角部屋だから窓も多いしな」

直射日光を避けるため、初代デュラハン号の出身地である方南町のドッキ・リ・ホーテで購入したすだれをかけ、全ての窓を全開にし、扇風機で空気の流れを促進すると、温いなりに風が通る。ヴィラ・ローザ笹塚の建物の周りに、土が剥き出しのわずかな庭があつて隣近所の建物から離れているおかげだろう。

「なー真奥ー。本当にエアコン買わないの？」

夏の風を楽しむ千穂とは対照的に、どこまでも墮落した漆原。

「言つたろ。大家とは連絡取れないし、そもそも工事費用なんか捻出できねえ。なまじ安いエ

エアコン買って翌月の電気代で死にたくねえしな」

「うまー……」

「私も、エアコンってちょっと苦手なんです」

千穂がラムレーズンアイスを舐めながら言う。

「学校の教室にエアコンあるんですけど、体育の後とか必ず誰かが最低温度に設定してるんですよ。もう寒くて」

「文明の利器も、使い方次第では身を滅ぼす、というわけですね。学校の電気代を思うと、私も寒気がしてきます」

抹茶アイスを食べつつ、書屋がよくわからない部分で共感している。

「大体そういうことやる奴って、騒がしいヤンチャ野郎だったりすんだよねー。それでちよつと温度上げようとする、暑い暑い騒ぎ出してまた戻すんだろ？」

クッキークランチのアイスを食べる真奥がしかめ面でスプーンをビコビコさせる。

「そうなんですよー！」

千穂は力強く頷いて同意する。

「考え方が短絡的って言うか、自分が即座に満たされたいから後先考えないんだよねーそういう奴。しかもそういうのに限って声がでかいんだ」

「そうそうー！……って、あれ？」

「ん？」

「真奥さん、なんでそんなこと分かるんです？」

苦笑しながら同意しかけた千穂が、ふと気づいて尋ねる。

「真奥さん、日本の学校とか通ってたわけじゃないですよね？」

「おお」

「真奥さんの話聞いてると、あるあるって思うこと多いんですけど、よく考えるとそれって不思議だなあって思ってた」

「ああ、まあ、そうなあ」

クッキークランチの最後の一口を思い切りよく飲み込んだ真奥。立ち上がってプラスチック製の蓋とビニールの中蓋はきちんと可燃プラスチックゴミに。紙のカップはすすいで紙ゴミに捨てると、シンクによりかかってため息をついた。

「悪魔の方が不満の解消の仕方がもちっと過激だが、悪魔も人間も、そういうところはあんま変わらないんだよ」

「……」

「……ああ……一個じゃ足りない……」

真奥の言葉を芦屋はただ黙って聞き、漆原は聞いているのかいないのか、食べ終わったイチゴアイスのカップをパソコンデスクに置いて、物欲しげな視線を冷凍庫に飛ばす。

と、そのとき、

「お？ 鈴乃、どこ行つてたんだよ。ちーちゃんがお前にもアイスってさ」

真奥は、開け放していた台所の窓の外を、何やら大きな荷物を抱えた鈴乃が通るのを見た。

「ああ、それはかたじけない。やることを終えたら、是非頂戴したい」

窓に嵌まった格子越しの会話。鈴乃は何やら、小さな角材のようなものを担いでいた。

「……おい、それは一体なんだ」

「ん？ 角材だが？」

「いや、それは分かる。お前はそれを一体何に使うつもりかと聞きたい」

真奥が隣人の持ち物に対してしつこく聞いたのは、角材を担いでいるのとは反対側の手にある、明らかに多すぎる量のおがらが見えたからだ。

「宣教部として、お盆という行事について関心がある。ひとまず体験してみようと思つてな」

「……それで？」

「迎え火、というものを焚くのだろうか？ 迎え火の煙をたどって祖霊が帰るのだと聞いたが」

嫌な予感が的中した真奥は、がつくりと項垂れると、格子越しにちよいちよいと鈴乃を手招きする。

鈴乃は眉根を寄せながらも素直に魔王城のドアを開けた。

「なんだ。陽のあるうちにやる方がいいというから、早いうちに済ませたい痛っ！」

鈴乃の口上を速るように、真奥は鈴乃の頭に手刀を叩き落とす。

「な、何をするっ!?」

「お前はアパートを全焼させる気か!! 明らかに燃料が多すぎるだろうが!」

「き、貴様っ! 私をエンテ・イスラ者と思ってバカにしているな!?」

手刀で涙目になった鈴乃は、斬新な自虐語を創造しながら牙を削いて反論する。

「これを全部燃やすはずがなろう! 角材はアパートの裏庭で井桁を組むためのものだ! 燃すのはおがらの束だけ……痛い! こ、こっちの手が塞がっているのをいいことにっ!」

真奥の二の太刀が飛ぶ。

「尚悪いわっ! ちーちゃんが一束しか買ってねえの見てただろ! 大体裏庭で井桁って、どれだけの規模で迎え火焚く気だっ! キャンプファイアーじゃねえんだぞ!」

ヴィラ・ローザ監獄の建物の敷地はブロック塀で覆われ、裏庭と呼べるだけの土が剥き出しのスペースがある。

大きな広葉樹の木が一本植わっており、都会のアスファルトを避けて昨年も今年も、信じられない数の蟬がその木に宿って一夏の大合唱をするのだ。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。鈴乃さん、バニラアイスありますよ」

「いたたくっ!」

魔土城にもエアコンが無いので、当然鈴乃の部屋にもエアコンは無い。そのせいでもないだ

ろうが鈴乃はアイスの仲裁に食いつき、自分の部屋から黒蜜と黄粉を持ってきてアイスに付ける。それをゆっくり味わった後、改めて納得いかない点について真奥に食ってかかった。

「なら一体迎え火とはどう焚くのだー 私が調べた限りでは、大々的に僧侶が火を焚いたり、マコモと呼ばれる薬を井桁に組んだお焚き上げで盛大に燃やしていたぞー」

自転車を買って戻ってきてからの短い間に、何をどうやって調べたのか知らないが、それは本格的な寺社仏閣やお祭りの場合だ。

「芦屋」

「はっ、これに」

真奥が指をはじくと、芦屋がきつと動いて、真奥に陶器の皿、着火用ライター、そしてこよった新聞紙を差し出した。

「ちなみにこれらの道具は、全て百均で買えるぞ。食器売つてるところなら、古新聞はタダだ。この皿は焙烙<sup>ほうらく</sup>って名前だ」

そう言うとき真奥は、鈴乃が大量に用意したおがらを一束掴んで部屋の外に出る。

「そしてこのおがらは、ちーちゃんが買ったところなら一束九十円。高くても二百円ってところだ」千穂と仏頂面<sup>ぶつてうめん</sup>の鈴乃は、真奥について表へ出る。真奥は共用階段を下りて道に面したアパートの門の所で、焙烙を地面に置いた。

そしておがらを束ねていたビニールをはがすと、長いおがらを適度な長さに折ってゆく。

一東の三分の二ほどのおがらで焙烙はいっぱいになってしまったので、残りを鈴乃に渡して真奥はこよった新聞紙に着火ライターで火をつけた。

火種のこよりを盛ったおがらの下に突っ込むと、すぐにおがらに燃え移り、ゆっくりと煙が立ちはじめた。

「以上！ 最も簡単な迎え火の焚き方だ！」

「……なんだと？」

「ちなみに集合住宅の場合は、火災報知器にひっかかるから必ず屋外でやること。何か質問は」鈴乃は明らかに疑わしげな目で、焙烙の上の小さな焚火と真奥を交互に見る。

「……バカを言うな。迎え火は祖霊を導くための、一族にとって年に一度の大切な儀式だろう。こんな単純で適当な儀式があるか」

「シなこと言っただって、これで終わりなんだから仕方ないだろう。なあ？」

真奥は鈴乃ではなく、千穂に同意を求める。鈴乃は違う答えを期待して千穂を振り向くが、「ちよっと適当かもしれないですけど、間違っただけです。火種は盆提灯から移したり、菩提寺からもらってくるのがいいんですけど都内じゃなかなか難しくくて。あと、こうやって千穂は焙烙のそばにかがみ込んで、

「手を合わせて、ご先祖様が迷わず帰ってこられますようにってお祈りします」

「……そ、それだけなのか？」



「あとは、仏壇ぶつだんあるうちなんかはきゅうりの馬とか作ったりするらしいな」

「あ、はい、うちも毎年作ってます」

「きゅ、きゅうりの馬？ な、なんなんだそれは？」

鈴乃は混乱して目を回しはじめ。真奥は千穂と顔を見合わせると、少し笑って続ける。

「お盆が終わると今度は先祖をあの世に返すために送り火つつてまた火を焚くんだが、迎え火で来るときにはきゅうりを馬に見立てて遠く来てくれるよう折って、燗りの送り火では、牛に見立てたナスに乗って、ゆっくり帰ってもらうんだ」

至極大真面目しごくだいしんめいに解説する真奥と、素直に頷うなずいている千穂。二人を交互に見て鈴乃は、こめかみに手を当てて唖うろった。

「……今まで様々な宗教に出会ったが、これほど単純なのか複雑なのか分からん儀式も珍しい」  
「ま、本格的な所は道にずらっとろうそく並べたり、お前がやろうとしたお焚き上げをするとかなんかもあるが、都心の住宅街じゃこんなもんさ。同じ仏教でもやらない宗派もあるし、火を焚く場所も限られるしな。本格的なのが見たいなら、八月にどっか地方の祭りにでも行ってみたらどうだ？」

「真奥さん、本当に詳しいですね」

千穂が驚いたように目を丸くする。

「去年は、魔力回復に関係ありそうなことはなんでもやってみたからな。迎え火に乗って誰

か悪魔が迎えに来ないかなーとか」

祖霊そりやうを導く神聖な儀式をつかまえて、真奥まおくは物騒ものさわなことを言う。

「でも、先祖せんぞが地球にいるわけじゃねえから、迎え火のカラ焚できもいいところだよな」

「まるで燐りんれば先祖せんぞがいるかのような言い方だな」

鈴乃すずのの一言に、真奥は顔をしかめる。

「お前まへな、悪魔だつて木の股またから生まれてくるわけじゃねえぞ。先祖せんぞもいりゃ親おやだつているさ」

「真奥さんの……親……？」

真奥の真実の姿を知る千穂ちほだが、「魔王の両親」なる存在など、概念からして想像できない。

「まあ先祖にしろ親にしろもうこの世にはいねえし、迎え火焚でいて燐りんってきてほしいかって言われたら別にどうでもいいけどな」

だが、そんな投げやりな言葉を聞くと、千穂としては悲しくなってしまう。

「そんな……悲しいこと言わないでくださいよ」

「んなこと言われたつて、先祖を悼いたむような殊勝しゆきやうな心がけの悪魔なんかそうそういねえから先祖のことなんか知りようがねえし、親おやだつてほとんど記憶にねえんだから」

「そ、そうですね……すいません、何か、悪いこと聞いちゃつて」

「いやいや、俺が勝手に話しただけだから。ま、とにかくだ」

しゅんとなつてしまった千穂にばたばたと手を振り、真奥は徐々に火が弱よわまってきた迎え火

の焙烙<sup>ほうらく</sup>にかがみ込む。

「燃えきったら火の始末を忘れんなよ。本来の様式では蓮の葉を濡らした滴<sup>しずく</sup>で後始末することになってるが、万が一のためにバケツに水を張っておくこと。灰は草木にやるか、可燃ゴミだからな」

「……情緒<sup>じゆうじョ</sup>も何もあったものではないな。現代日本の精神的矛盾を見た気がしたぞ」

「郷<sup>きょう</sup>に入<sup>い</sup>っては郷に従<sup>したが</sup>えた。懐<sup>なつこ</sup>が広いと思え。おい鈴乃、バケツに水汲<sup>くみ</sup>んでこい」

真奥がそう指示したとき、

「おーい、真奥ー！」

魔王城の玄關<sup>げんかん</sup>から漆原<sup>しつげん</sup>が顔を出して、真奥に呼びかけた。

「面倒なの<sup>めんどうなの</sup>が近づいてくるよー！」

「面倒なの？」

真奥は二階を見上げて首を傾<sup>かし</sup>げるが、

「誰<sup>たれ</sup>が面倒なのですって？」

すぐ背後から聞こえた声に、真奥は身を練<sup>ね</sup>ませる。

凜<sup>りん</sup>と張<sup>ひ</sup>った声を背に受け、真奥はゆっくりと後ろを振り向く。

そこには、

「あ、こんにちは遊佐<sup>あそ</sup>さん」

「おお、エミリア、そうか、もうそんな時間か」

エンテ・イスラを救った勇者エミリア・ユステイーナこと遊佐恵美の、しかつめらしい顔があった。

右手に日傘を差し、左手には何やら重そうな荷物が入った紙袋を提げている。

顔を引きつらせる真奥を日傘の柄を突きつけて脇に退かせると、恵美は階段下から漆原を見上げる。

「ルシフェルっ！ どうして私に来るのが分かったのよ！ まさかまた変な発信機仕込んだんじゃないでしょうねー」

「そ、そんなことしてないよ。部屋の外のカメラにお前が映っただけだって。ほ、ほら頭冷やせよ。アイスあるぞアイスー」

「私は徹頭徹尾冷静にあなた達を討伐する心構えでいるけど？」

「だ、だから本当だってー！ ほらほらー」

漆原は一度屋内に引っ込むと、アイスと窓の柵に設置してある改造ウェブカメラを持ってきて、ぴこぴここと振って見せる。

「……」

恵美はカメラよりもハーゲン・デッセのミントアイスに一時視線をやったが、すぐに吹っ切って千穂と鈴乃を振り返る。

「こんにちは千穂ちゃん。あのアイス、あなたが？」

「あ、はい。うちにギフトで来たんですけど、お父さんもお母さんも甘いのが食べないんで」

「……そうでしょうね。こいつらにハーゲン・デッセを買うような甲斐性（かいせい）があるわけないし」

「お前なあ、物の金額で男の甲斐性を測るんなら、人間が小さいにもほどがあるぞ」

邪険（よこしま）に扱われた真央（まおう）は横合いから文句を言うが、惠美はハンカチを取り出してパタパタと顔を仰いで取り合わない。

「ハーゲン・デッセのカップのミントはギフトボックスにしか入ってないわ。バラ売りじゃまず見かけない。千穂ちゃんにアイスをもらった瞬間（しゅんかん）のあなたたちの喜びようが目に見えちゃうわ。魔界の悪魔達が見たら、さぞ悲しむことでしょうね。人としても魔王としても、甲斐性なしと言わざるを得ないわね」

「……すいません真央さん、かばいきれないです」

千穂が申し訳なさそうに真央に頭を下げる。

「……お前はまた俺たちの貧乏ぶりを嘲笑（あざわら）いに来たのか。戦場でも自宅でも毎日エアコンに当たりやがってこのアンチ・エコ勇者ー」

「ごめんなさいね。でもエアコンは最初からマンションに付属してたんだから使わなきゃ損でしょ。そこそこの新しい省エネモデルだし、どんなに暑くても室温設定は二十八度よ。文句言われる筋合いはないわ」

「くそっ！ 露骨に生活レベルの違いをアピールしやがってっ！」

悔しげに地団太を踏む真奥を相手にせず、惠美は鈴乃を見る。

「待ち合わせの時間よりちよっと早く来ちゃったけど、もう大丈夫？」

「ああ、すまない。すぐに準備をするから待っていてほしい」

そう言うとき鈴乃は、ばたばたと階段を駆け上がろうとして、

「ちよっと待って。その前にこれ」

惠美に呼び止められ、先ほどの重そうな紙袋が差し出される。

紙袋の端からは、鷹のマークの大将製薬の栄養ドリンクの箱がちらりと見えた。真奥や千穂は知る由もないが、もちろん中身は惠美がエンテ・イスラの仲間から送ってもらった聖法氣補充ドリンク、ホーリービタミンβである。

「あ、ああ……これが、例の？」

「そうよ。一日二瓶ね。貴重な物だから、大切に扱ってね」

「……なんだその秘密の裏取りは」

紙袋を返してばやけた会話をを行う二人に突っ込む真奥。すると二人揃って真奥に顔を向ける。

「特に、コイツには気をつけなさいよ」

「言われるまでもない」

「おいっ！」

真奥は歯を刺<sup>さ</sup>いて突っ込む。

「俺は人様の物を物色するような、そんな道に外れたマネをしたことはないぞ！」

「外道働き<sup>げだうかき</sup>の急先鋒<sup>きゅうせんぽう</sup>みたいなあなたが何を言い出すの」

惠美の反応は冷たい。

「一年たたずに店長代理に昇進した俺の仕事ぶりをつかまえて外道働きとは何事だ！」

ますますつかさする真奥だが、

「真奥さん、多分そういうこと言われてるんじゃないです」

千穂は冷静に真奥に突っ込む。

「遊佐さん、鈴乃さんどこかお出かけですか？」

「うん。彼女の部屋の白物家電とか、携帯電話とかを見にね」

「家電と携帯ですか」

「うむ。私も長逗留<sup>ながとゆう</sup>になりそうだから、自分の生活基盤を整えねばならないのだが、この前のことで私の調査はかなり時代遅れなことが分かってな。いざというとき混乱しないよう、エミリアについてきてもらおうと思ったのだ」

「ああ、そういうことですか」

千穂としては、新しい友人との付き合いが長くなりそうなのが嬉しい反面、真奥の家の隣に女性、しかも真奥に敵対する人物が長期滞在する、ということになるので、手放しで喜ぶべき

かどうかは微妙なところだ。

「まあ、私がその貧乏魔王を叩き斬れば、そんなことしなくても済むんだけどねー」  
すると、そんな千穂の心を讀んだわけでもないだろうが、惠美がそう言いながら悪戯っぽく笑って真奥を見た。

真奥は反応に困って冷や汗を流し、それを見た千穂も冗談なのか本気なのか一瞬悩むが、  
「……まあ、この前、少なくともすぐにそういうことはしないって言っちゃったし、となれば、  
なんとかかうまい解決方法が見つかるまでは彼女にこっちにいてもらう方がいいでしょう？」  
「そ、そうですね」

どうやら本気だったと分かり、つい返事が棒読みになる。

「あはは、ごめんごめん。大丈夫よ。千穂ちゃんの前でそんなことしないから」

「……私の前以外のことか若干気になりますけど……」

千穂はここのでようやく苦笑する。

「それは魔王の心がけ次第ってところかしらね」

「けっ、俺ほどエコで庶民派で勤勉な魔王はいないんだぞー それこそお前らの秘密取引の中身だってぜんぜん気にならないもんねー だから安心してとっとと失せやがれ！」

まるで子供のような不貞腐れ方をする真奥はしつと手を払って惠美を遠ざけようとする。

「あなたは、宿敵たる私にエコで庶民派で勤勉な魔王って認定されて恥ずかしいの？」



「どこに出しても恥ずかしくない魔王を目指してるからな！」

「そうね、むしろ今のあなたを見ると、魔王軍に苦戦していたエンテ・イスラが恥じ入るかもしれないわね」

処置なし、と肩を練めた恵美は、

「……それにしても何？ この暑い中、みんなで焚火？」

足元でもうほとんど燃え尽きている熔烙の上のおがらを見て首を傾げる。

「こつちに歩いてくる途中煙が見えて、何が燃えてるのかと思ったわよ」

「あー」

「えつと……」

「エミリアは、それを知らないのか？」

今度は、真奥と千穂と鈴乃が思わず顔を見合わせて、

「お前さあ……お前はそれじゃダメだろ。そんなんだから今時の若者はとか言われるんだぞ？」

「……すいません遊佐さん……かばいきれません」

「仕方ない。これは私が後で教えよう」

「えっ？ ……ええっ？」

真奥はともかく、千穂や鈴乃まで微妙な反応をするので、一体どこで形勢が逆転する地雷を踏んでしまったのか分からない恵美は思わず慌てた。

「まあとにかくエミリア、これはありがたく頂戴する。少し待っていてくれ、すぐ準備するから」  
鈴乃は紙袋を掲げて恵美に礼をすると、それを持って階段を駆け上がろうとする。

恵美はまだ自分が何を間違ったのか分からず鈴乃と燃え尽きかけたおがらを交互に見て、千穂が微妙な空気を曖昧な笑みを浮かべることでやりすごし、最後のおがらが燃え尽き、煙が消えた。

その瞬間だった。

「おっ？」

「えっ？」

「何っ？」

「きゃあっ！」

「うわわわわっ」

真奥に千穂に鈴乃に恵美、それに玄関から顔を出しっぱなしの漆原までがその光を見て叫び声を上げた。

上空でかんかん照りつける太陽の鋭い刃のような光ではなく、量感のある光の爆発が、燃え尽きたおがらの上で突如発生したのだ。

「やべえっ！」

素早く動いたのは真奥だった。

「ひゃっ！」

焙烙ばうろくに一番近い場所に立っていた千穂をかばうように抱きすくめると、そのまま光源から逃げないようにアバートの庭の木に張りついた。

目を開けていられないほどの光の奔流ほんりゅうに、真奥はうめきながら叫ぶ。

「何かに撞つまれ！ ゲートだー」

「!!」

「なんだとっ!?」

恵美と鈴乃の反応は速く、持っていた物ををほとんど足元あしもとに落とすようにして共用階段の手すりに両手でしがみつく。

鈴乃の手から落とされたあの紙袋しふくろが階段から落ち、がちやんと重い音を立てた。

異世界への門、ゲートの性格は、術者の目的や用いた力の性質によって変わってくる。

だが全てのゲートに共通するのは、輸送可能な質量であれば、触れた途端に問答無用で取り込まれてしまう、ということだ。

そしてこの不測の事態においては、魔力や聖法氣せいぽうきといった超常的質量を持たない千穂が、一番危険に晒さらされることになる。

「おい、どっちだー インか、アウトか!?」

千穂をかばうので手一杯の真奥は叫ぶ。

「何か出てきてるぞっ」

姿は確認できないが、鈴乃すずのの声が返事を寄越す。

アウトのゲート。即ち何者かがどこからゲートを通って日本に渡ってきたことになる。

とりあえず無差別に周囲を巻き込む吸引力を持ったゲートではないと分かり、真奥まおくは千穂ちほを解放して背にかばい、まばゆい光に顔をしかめながら振り向いた。

「……なんだ？」

大きな球状の影が光の中に見える。

「ひ、人や悪魔ではないみたいねっ」

恵美けいみも球状の影を視認したようだ。

その影の出現と同時に、光の量が急激に衰えおとろはじめる。

と言っても真夏の日差しの下なので十分明るすぎるほどののだが、最初の奔流ほんりゅうはなりを潜め、徐々に球状の影に色と詳細な形状が浮かび上がってくる。

「木の実……いや、それにしては」

「大きいわね……」

真奥よりもゲートに近い場所にいた鈴乃と恵美が、じりじりと光ににじり寄る。

やがて水道の蛇口へちまぐちが締められるように、ゲートの光は一気に収束した。

その瞬間、世界は正常な色を取り戻し、夏の日差しがヴィラ・ローザ笹塚ささづかの庭に帰ってくる。

なんの脈絡もなく現れたそれは、真奥達の見守る前でごとりと燃え尽きたおがらの灰の上に落下した。

「おいおいおいおい」

「ちよつとちよつとちよつと」

「あー……あーあー……」

その物体が正体不明である、ということよりも、燃えた灰の上に落ちた、という事態が三人の小市民を緊張から解き放ち動かした。

真奥がそれを救い上げ、惠美が灰の載った焙烙を蹴飛ばさないよう隅に退かし、鈴乃が素早くハンカチを取り出して灰で汚れてしまった部分を拭いた。

幸いにしておがらは完全に燃え尽きていたらしく、高温に晒された跡は残っていなかった。ふう、と三人が息をついたとき、

「目があー！ 目があー！」

どうやら膨大な光量を直視してしまったらしく、階段の上でうめいている漆原の声が耳に入り、真奥と惠美と鈴乃はハッと我に返った。

三人は思わず目を見合わせ、そして真奥が抱え、鈴乃が汚れを拭いたそれを見る。

「何を騒いでいるんだ漆原！」

「目があー！ うざやっ」

「おいつ、そんな所で暴れるな、蹴キつてしまうだろう」

「け、蹴キつてから言うなよっ！」

「玄關で寝転んでいるお前が悪い！……魔王様、どうされたのですか、その巨大な果物は」  
だが、階段の上で芦屋あしやが呑気のんきにそう問いかけてくるまで、庭に降りていた三人は、冷静に状況が分析できなかった。

それは、標準的な成人男性の体型である真奥まおくが両手で抱え込むほど巨大な果実だった。  
ずっしり重く、リングゴのような形をした黄色い実である。

提出すればその瞬間しゅんかんギネス記録に認定されそうなサイズを見てとても食べようという気は起おこらない。

「やっぱり……リングゴなの？ それ？」

「そうでなければ梨のようにも見えるが……しかし……」

「……魔界にだってこんなドでかいリングゴはねえよ。まさか、リング型の悪魔とか、そんなこと言わないよな」

魔界には植物に擬態する悪魔も存在する。が、大抵は樹木に擬態する人型で、こんな巨大な真ん丸の果実に変身する悪魔など聞いたこともない。

「せめて佐助さすけ使つかみたいのに、送り主の名前か住所くらい書いておいてもらわねえと……」  
処置に困った真奥まおくがそんなどうでもいいボヤキを発する。

ゲートが自然に発生するはずがないから、必ずこのリングを送った術者がいるはずである。その正体は現状知りようもないが、果たして狙ってここに送り込まれたのか、偶然ここに来てしまったのかで、状況は十分変わる。

「ちよつと勘弁してよね」

最初に思考が切り替わったのは恵美だった。

「『魔王と勇者のいる所に同時に異変』って、この短い間にこれで何回目よ！ サリエルの件が済んでまだ一週間ちよつとよ!? 本当あなたの周りってロクなこと起きないわね!」

「その言葉、そっくり俺が復唱してやろうか」

まるで真奥をトラブルメーカーだと言わんばかりの恵美の言葉に、真奥も黙ってはいない。

「あのなあ、最近の騒ぎの主犯は、どっちかつつとお前ら人間の身内だろ!」

「うっ……」

「いや、まあ、面目ない」

詰まる恵美と同時に、鈴乃もどこか申し訳なさそうに明後日の方向を見て呟く。

「今回だって、あんな光溢れるゲートを悪魔が開けるわけねえだろが! どうせまた天界から面倒がやってきたんだろ! ほら、お前にやるよ! 冷蔵庫で冷やして食ったらどうだ!」

そう言つて真奥は、リングを恵美に押しつけようとし、恵美は面食らつて一歩下がった。

「冗談言わないで! 私たちこれから都心に買い物行くのよ!? そんな大きな物持っていける

わけないでしょー」

「そっちの都合なんか知るか！ いつもこっちの都合なんぞお構いなしにストーリーキングしてくるくせにー！ このストーリーカー勇者ー」

「だっ……誰がストーリーカーよっ！ あなたが魔王なんかじゃなければ誰が好き好んで付きまとうもんですか！ この貧乏魔王ー」

「う、うっせえ、このクソ暑いのにチャラチャラした格好しやがってこのOL勇者が！」

「ふんっ、着古した洗いざらしのユニシロよりはマシよこのよれよれTシャツ魔王！」

売り言葉に買い言葉が重なり、悪口なのか互いの生活環境を無意味に罵り合っているのか分からない中、ついに真実（まこと）は言ってはならない一言を発してしまう。

「お前なんかユニシロのスポーツブラで十分だこのまな板勇者！」

口喧嘩（くちや）と暑さで疲れてきていた恵美の両の瞳（ひとみ）に、突然邪悪（じあく）な闘志（どうし）の炎（え）が燃え上がった。

「決めた！ 今この場で叩き斬るわ！」

「え、あ、お、ま、待て恵美っ！ 人目につくっ！ ほら、聖剣（せいけん）は無し！ 話せば分かる！」

「問答無用！ 我が力、ヨコシマなる魔を滅せんがため!!」

黄金（おうごん）の陽炎（やうえん）とでも言うべき聖法（せいぽう）気が、恵美の右手よりほとばしり、その手に「進化（へい）聖剣（せいけん）・片翼（ひとつば）」を顕現（けんげん）させる。

大法輪（だいふろん）教会（きやうかい）に古より保管（ほくあん）されていた「進化（へい）の天劍（てんけん）」を体内（たい）に取り込んだ勇者（ゆうしゃ）にのみ扱い得



る、魔を滅する聖剣だ。

「わわわわわっ！　ほ、本気が惠美っ！」

「魔王様っ！」

惠美が本気で聖剣を出したので、いつもの小競り合いと呑気に眺めていられなくなった芦屋が、階段を駆け下りようとして、

「ずおおおおおおおっ！」

スリッパのまま表に出てしまったため、共用階段で思いつきり足を滑らせ、悲鳴と轟音を上げながら滑落してしまう。

「うっわ、芦屋間抜け」

一方、ようやく閃光で潰された視界が回復した漆原は、相変わらず玄關に寝そべったままその様子をぼんやりと眺めていたが、

「あれ？　佐々木千穂は？」

先ほどから、千穂が全く騒ぎに参加していないことに気づききよろきよろと周囲を見回す。すると、蟬が騒ぐ木の下で何やらぼんやりとしている千穂を発見し、漆原は寝転がったまま首を傾げた。

「うむ、私が許す。斬れ」

何故か鈴乃も、妙に怒気をはらんだ顔で真奥を睨みつけている。

「お前も物騒なこと言っていないで止めろよ！　　ってか無理か、お前恵美個か！　くそっ！」

「魔王！　覚悟っ！」

まさかユニシロのスポーツブラを悪口に使ったせいで世界征服の野望がとん挫することになつてしまうとは。

人生の走馬灯よりも、真奥の脳裏を占めていたのはそんなどうでもいい後悔だった。

恵美の神速の斬撃を避ける術もなく、進退窮まった真奥は、大上段から振りかぶられた聖剣相手に、無意味と分かりながらも抱えたリングで身をかばうしかない。

「えっ？」

だが、天を割り地を砕く聖剣の刃は、いつまで経っても真奥の体を両断しなかった。

真奥が恐る恐るそむけた顔を上げると、

「……………」

目を丸くして、聖剣と真奥の間にあるリングを見ている恵美の顔が見えた。

「……………」

一体何が起きているのか分からず、かといって動けない真奥に変わり、

「ま、魔王様っ…………ぐぐぐ……………」

ようやく滑落の衝撃から立ち直った芦屋が、代わりにそれを見た。

リングで頭をかばっている魔王様。顔に手を当てて何かに驚いているクレスティア・ベル。

聖剣を振り下ろしているエミリア。そして、

「……手？」

芦屋が見たのは、リングから生えている人間の手だった。

大きな丸いリングから、人間の赤ん坊の両腕と手が、によつきり生えているのだ。

「な」

「な」

「何よこれっ!?」

芦屋と鈴乃がうめき、最後に恵美が叫ぶ。

ただリングから手が生えたのなら、それ自体は驚くべきことだがやはり植物の形の悪魔だったかと思うこともできる。

一番問題なのは、どう見ても赤ん坊ほどしかないその手が、恵美の聖剣の刃をしっかりと受け止めているからだ。

恵美は決して、斬撃を躊躇ったわけではない。

本当にリングもろとも真奥を頭から一刀両断にしようと思っていたかは、激昂した末の行動なので自分でも分からないが、少なくともリングを真つ二つにする勢いで刃を振り下ろしたはずだったのだ。

恵美は慌てて後ろに退き、それに合わせて鈴乃も髪を留めた簪を引き抜く。

「武身鉄光！」

鈴乃の声とともに、十字架をあしらったガラスの簪は、一瞬で聖法氣を纏う巨大な鎧へと姿を変える。

鈴乃も恵美と同様、得体の知れない相手の出現に警戒感を強めているのだ。

芦屋もよろよろと立ち上がり、一体どう行動すべきか思考を巡らせる。

しかし、エンテ・イスラ東大陸攻略軍司令官にして魔王軍一の知将と謳われた芦屋の戦歴をもつてしても、聖剣の勇者と手が生えたリングが対峙して、そのリングの下に魔王がいる、という状況に即応できる行動を、経験から引き出すことはできなかった。

鈴乃も武器を出したはいいものの、どう行動したら良いかは決めあぐねているようで、大鎧を構えたまま微動だにしない。

「……な、なんだよ、何があつたんだよう？」

リングの上部が見えていない真奥だけが、わけがわからずリングを掲げたまま周りを恐る恐る見回していた。

「ま、真奥？」

ようやく声を出したのは、立ち上がって共用廊下の上から状況を見下ろしている漆原だった。

「と、とりあえずそのリング、頭の上から下ろした方がいいんじゃない？」

「リングを……？ わっ？ なんじゃこりや？」

漆原に言われてようやくリングを下ろした真奥は、リングから赤ん坊の両手が生えて何かを求めるようにびこびこ動いているのを見て、思わず地面に放り出してしまふ。

「あっ！」

得体の知れない物に衝撃を与えろということに対する本能的な危機感から、誰ともなく警戒の声を上げ、地面にころころと転がった巨大なリングの行く末を見守る。

「わ、わっ」

真奥の放り出した方向に恵美がいて、恵美は思わず足を大仰に上げて飛び退いてしまふ。

だがリングは、真奥に放り出された慣性では有り得ない勢いで、恵美に向かって猛然と転がりはじめたではないか。

「いやあああ!? ちょっと何よ何よこれっ!?」

小さな手を推進器のようにぶんぶか振り回し、アパートの庭で恵美を追い回すリング。

真奥も鈴乃も、どうすることもできず、どうしたらいいのかも分からずただその有様を眺めていた。

やがて推進力が落ちたのか、庭の真ん中に落ち着いたリング。恵美は猶に追い詰められたネズミのように、庭を開くブロック塀に背を預けて息を切らせている。

だが諦めの悪いリングの手は、停止した場所から尚も恵美を求めるかのように真っ直ぐその両手を差し出し、びこびここと振りはじめるではないか。

「お、おい、どう見ても、これ、惠美、お前、お前ご指名たぞ、おい」

「ぜーっ……はーっ……な、何がよ、イヤよそんな」

真奥に對する殺氣は消えたものの、予想外にもほどがある事態に狼狽えることしかできない惠美は、右手の聖劍と、自分に向けられた手とを意味なく何度も交互に見た。

このリングの手に、そこそこ本気で放った聖劍の刃を受け止められた。

いや、受け止められたというよりも、平手で水面を叩くように、何か緩衝する力で止められた、と言った方が正しい。

最近聖劍が通用しない相手がやたらと増えている気がする惠美だが、このリングもその対象なのだとすると、やはり聖劍を奪いに來たサリエルや、天界と関わりがあるのかもしれない。

そう考えた惠美は、一応の用心のために聖劍を一旦体内に戻した。

次の変化は、そのとき起こった。

惠美が聖劍をしまった途端、びこびこと動いていた手が、脱力したようにだらりと落ちた。糸が切れた操り人形のようなその動きに惠美は喉の奥で悲鳴を上げて身を引いてしまう。

「やあっ！ もう何よ何よ今度は！」

それこそ、リングの皮を剥くような変化だった。

黄色い外皮がするすると帯状に解けてゆくではないか。

内部を保護するための硬質のシェルターであつたかのように外皮の下は空洞で、手錠を除く

その場の全員が見ている前で、腕が生えた巨大なリングは、

「……ぶひっ」

小さな女の子になって、ヴィラ・ローザ笹塚に間の抜けたくしゃみの音を響き渡らせた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

誰もがあまりの成り行きに茫然とするしかない。

お互い顔を見合わせることにすらできず、ただただリングの中から現れた赤ん坊に釘付けになっていた。

「……ぶひっ」

二度目のくしゃみに応えるように、ほどけた黄色い外皮が再び女の子の周囲に浮遊し、形状をゆったりと変えながら、まるで初めからあつらえたかのような黄色いワンピースに変化する。

「ん？」

ワンピースが形成されたその一瞬、少女の額に紋様が浮かび上がったのを、真奥だけが気づいた。紫色に光る、三日月のような紋様だった。

「うー」

だがそれもほんの一瞬で消えてしまう。

女の子は、紋様の消えた額をしばらくさすっていた。そして聖剣を静止させた小さなもみじの手をきゅつと握り、周囲を見回すと、気だるげに眉をしかめて目をこすった。

そしてしばらくぼんやりしていたかと思うと、そのまま地面に横たわる。

「……すひゅー……」

そして、寝た。

魔界を統べる魔王。天使の血を引く勇者。悪魔大元帥。大神教會の聖職者。そして堕天使。冗談のような出自を持つ異世界の者達が雁首揃えて、誰一人として目の前で起きている現象に即応できなかった。

「つて、おいつけ」

さすがと言うべきか、一番最初に我に返ったのは、真奥だった。

「な、な、な、な、なん、これは、なん……」

だが、混乱が収まっているわけではないらしく、口が全く回っていない。

「わか、わかるわけ、わからない、ないでしょっ」

それは恵美も同様であつた。

「ま、まおっうっー」





上ずった声を出したのは、一人高い場所から状況を見ている漆原だった。

それが突然の雷鳴であつたかのように、鈴乃と芦屋がびくりと身を震わせて漆原を見上げる。漆原が見ていたのは、ずっと遠くの、笹塚駅方面に至る道路。

「マズい、人が来るよー」

その一言が、急速に全員にその場しのぎの冷静さを取り戻させた。

すなわち、リングの少女の正体がなんであれ、先ほどのダートの光もどれだけの人の目についているか分からず、これ以上目立つ事態は避けなければならない。

「お、おい恵美っ！」

「な、何よー」

「この、これ、この子？　子なのか？　とにかく、上に運べっ」

「な、なんで私がっ!?」

「お、女の子なんだから女が運べよ！　ってか、人間の赤ん坊なんて運んだことねえもん！」

「私だってないわよ！　や、だっことはしたことあるけど、こんな地べたに寝てる子なんか」

「ええい、情けない魔王と勇者め！」

動いたのは鈴乃だった。

存在が超常現象のような連中を驚かせておいて自分は安らかに眠るリングの少女を、鈴乃は慣れた手つきで起こさないようにゆっくりと抱え上げる。

「お、やるな」

「聖戦者は洗礼の儀式を執り行うために赤ん坊の扱いを学んだ！　おい、アルシエル！　とりあえず魔王城に運ぶ！　布団を出せ布団を！」

「わ、私に命令するなクレスティアー！　い、いたたたた」

反抗しながらも、芦屋は階段から落ちて痛む体をよたよたと持ち上げて、真っ先に階段を上がつてゆく。

鈴乃もそのあとを追ひ、階段の所で、躊躇わずに草履を脱いで、砂埃がたまる階段を白い足袋で上がっていった。

「おい恵美、お前もとりあえず上がれ！　鈴乃はなんで草履脱いだ！　それ持つてけ！」

「きつと、滑らないようによ！　っていうかベルっ！　これっ！　紙袋！」

ゲートが開いた瞬間に取り落とした自分と鈴乃の荷物を両腕に抱え、恵美も窮屈そうに階段を駆け上がった。

「それからおい、ちーちゃん、ちーちゃんどうした、きつきから姿が……ああ？」

真奥もこの段になってようやく、この超常現象を前にして千穂の姿も声も全く見当たらないことに気がついた。

だが、ふと見ると先ほど真奥が千穂をかばった木の前で、何やらぼーっと虚空を眺めている。「お、おい、ちーちゃん？」

今さら超常現象を見たくらいで自失してしまふような千穂ではないはずだ。

まさかゲートの光の奔流が、魔力にも聖法氣にも守られていない千穂に悪い影響を及ぼすものだったのか。そんな嫌な予感が頭をかすめる真奥。

だがよく見ると、頬を朱に染めて、口元には幸せそうな笑みが浮かび、夢見心地の表情だ。

「お、おーい、ちーちゃん？」

「……………ちゃった」

「ん？」

小さな眩きが聞こえなかったので耳を寄せると、

「…………ぎゅって、真奥さんに、ぎゅって、されちゃった、えへへ、ぎゅって…………」

眩きながら千穂は、心底幸せそうに笑顔を浮かべて口元に手を当てている。

「……………あ……………」

真奥は、思わず困った顔でうめき声を上げ、そして、

「ほいっ！」

「きやつ！」

かけ声とともに千穂の目の前で思い切り拍手を打った。

その音で千穂は我に返ったらしく、周囲を慌ただしく見渡してから、

「帰ってこいちーちゃん！」

「ひやっ！ ま、真奥さんっ！ あ、わ、わたっ、私そのっ！」

「いーから、悪いけど今それどころじゃねーから、とりあえず魔王城戻ろぞ魔王城！」

「え？ わわわー ま、真奥さん手、手っ！」

我に返った千穂の混乱冷めやらぬうちに、真奥は千穂の手を引いて階段を駆け上がる。

どうにかこうにか、リンゴの少女を含めた全員が魔王城に戻ったときには、全員がそれぞれの理由でぐったりと疲れ切っていたのだった。

※

芦屋が敷いたタオルケットの上で太平楽な寝息を立てるリンゴの少女の傍らで、異世界の間と悪魔と女子高生が、アイスクリームを黙々と食べている。

いや、正確に言うとか千穂だけが遅々として匙が進まないのだが、他の五人はささやかな現実逃避のためにひたすらアイスを食べた。

そして最初に食べ終わった恵美が、

「……それじゃ私たちはこれで……」

「待てやコラー！」

立ち上がって逃げ出そうとしたのを、真奥が足を掴んで止める。

「ちよ、足を掴むなっ！」

それを振り払おうとするのを、

「しっ！ 起きるぞエミリアー！」

鈴乃が人差し指を立てて宥める。

恵美は仏頂面しつつも大人しく足を下ろすが、

「……私とベルは関係ないわよ！ そっちでなんとかして！」

「……関係ないで済むか！ どう見たって、お前が目当てで来たとは思えないだろが！」

結局ウイスパーで言い争う。

少女になる前のリングゴは、間違ひなく恵美に向かって突撃し、手を伸ばした。大きな聖法氣に反応したのか、単純に転がって手を伸ばした方向に恵美がいたのかは分からないが、聖劍の出現と恵美への指名がほぼ同時だったことを考えると、理由は前者だろう。

「お前が連れ帰るか、最低でも事態が分かるまではここにいろよ！」

「嫌よ！ 私絡みだしたら、どう考えたってトラブルにしかなりやうがないじゃない！ なら少しでも早くここを離れたいのよ！」

「手……ぎゅって……」

言い争う真奥と恵美の傍らで、千穂はまだまだばんやりと虚空を見つめている。

「だとしたら尚更たるが、お前の面倒にへタな巻き込まれ方すんのはもうこりこりなんだよ！」

「何よ！　じゃあ積極的に私のトラブルを解決してくれるとでも言うの？」

「んなワケねえだろ！　テメエのケツはテメエで拭いきれって言っただよー」

「下品ね！　言われなくなつて、できるものならそうしたいわよ！　相手が勝手に手と広げるんだもの、私の責任じゃないわ！」

「お前なっ！」

「二人とも静かに！　起きてしましますよ！」

芦屋が小さな声でいさめるが、責任の押しつけ合いをしている間にどんどんと二人の声は高くなる。

「ぎゅって、真奥さん、手大きかった……」

「……千穂殿は一体どうしてしまったんだ……」

「さっきからずっとそんな調子だよ」

「黙れルシフェル、貴様には何も聞いていない」

鈴乃は二人を仲裁する芦屋以外、誰も頼りにならないのを見てこめかみに手を当てて唸る。

「大体あなたが変な焚火してたから来たんじゃないの!?　また七夕のときみたいに呼んだんでしょ！」

「知るかよー！　七夕のときってなんだよー！　大体迎え火も知らないお前にイチヤモンつけられたかねーなー！　あれは日本の儀式だから、俺たちとはカンケーねえもん！」

「ほらやつぱり！ あなたが呼んだんじゃない！ どうせ姑息こそくに温存おんそんしてる魔力がまた日本の儀式と反応したんでしょ！ 自分で呼んだんなら責任取りなさいよ！」

「姑息たあなんだ姑息とは！ 戦略的と言え戦略的と！ ごちやごちや言つてねえでたまにはお前からトラブル解決に協力してみろつてんだ！」

「何よ！ まるで、私が今まで何もしてこなかったみたいじゃない！」

「ほとんど流されるまんまで何もしてねえだろうが！」

「なんですつて！」

「やるかコラー！」

「二人ともうるさいと言つてるだろうがっ！」

大変に低い次元で傍若無人ぼうじやくぶじんにヒートアップしてゆく魔王と勇者の脳天めがけて、鈴乃すずのは容赦なく顕現けんげんした武身鉄光ぶしんてつこうを打ち下ろした。

戸屋とやと漆原うるはらも、こればかりは止めようがない。

「ちよ、あ、ごめんっ！」

「ちよっと待てそれは洒落しやれにならんぐげっ!!」

恵美けいみより上背のある真奥まおくだけに、槌つちの打面が命中する。

威力をセーブし、力を込めたわけでもないが、普通の金槌かづちだって頭に当たればヘタすれば怪我けがをする。真奥は痛みに涙目になりながら鈴乃を睨にらみ上げるが、



「うー……あふっ」

小さなあくびと、もぞもぞと動く音で、全員の時間が止まった。

リンゴの少女が身を起こし、あくびをしながら目をこすっている。しばらく目をこすってから、少女はぐると周囲を見回し、そして真奥と目を合わせた。

「よ……よう」

しょぼしょぼさせた目に向かって、とりあえず声をかけてみる真奥。

「うー？」

言葉が通じるかどうかは分からないが、呼びかけのニュアンスは通じるはずだ。

「……おあよ」

だが、そんな心配とは裏腹に、少女の口からは拙いながらも真奥や恵美が日本に来た当初に行っていた概念送受の応用ではない、純粋な日本語が飛び出したではないか。

「に、日本語喋れるのか？」

ダートから出てきた謎のリンゴの少女が、どういう理由で日本語を話せるのか分からない真奥は、畳の上を驚かさないようににじりよって尋ねる。

「んと、すこし」

「すこし、か、うん、そうか」

真奥はあいまいに頷いてから、助けを求めるように振り返ると、そこには恵美と鈴乃と倉屋

と漆原の、先を促せ、という無言の圧力が。

釈然としないものを感じつつ真奥は、勇気を振り絞ってリンゴの少女に尋ねる。

「その、お前は、なんだ？」

「ふ？」

質問の意図が理解されなかったのか、リンゴの少女はきょとんとしたまま大きな目で真奥を見返してくる。それにひるみそうになりながら、

「ああいや、その、名前、そうだ、お、お名前は？」

真奥はアルバイトを思い出し、お客さんが連れてくる子供に應對する気持ちで尋ねた。

今度は少女の瞳に理解の色がともり、もう一度小さくあくびをしてから、答えが返ってきた。

「アラス・ラムス」

「アラス・ラムス？」

「う、アラス・ラムス。……ふひっ」

今度は小さくくしやみ。そのくしやみが目覚ましになったのか、今まで半開きだった目が急に見開いて、突然活発に周囲を見回しはじめた。

「わっ」

漆原など、その急激な変化に驚いて思わず身をのけぞらせてしまうが、子供の突拍子のない行動にある程度慣れている真奥は、なんとか平静を保つことに成功する。

そのおかげで、ようやくアラス・ラムスと名乗った少女の外見をじっくり観察する余裕が生まれる。

人間の年齢ならば一歳か二歳。陽光を反射するほどの稀に見る銀髪だが、染めたように一房だけ紫色の部分がある。更に、瞳の色も紫色だった。

何かが引つかかる真奥は一瞬少女の額に目をやるが、今はそこには何も無い。自分の疑問はとりあえず後回しにして更に質問を続ける。

「アラス・ラムスは、どこから来たんだ？」

「ん、いえ……はどう？」

ちよつと悩んだ挙句に、単語になりきっていなさそうな返事が疑問形で返ってきた。

「いえは……？ あ、家？ まあそりや家から来たんだろうが……家……あ、おうちはどこだ？」

「おうち……おうち？ おうちしらないよ」

「そ、そうか……」

真奥は、慎重に頭の中で質問を吟味する。

「……お父さんやお母さんは、いるのか？」

「おと、おか？」

単語が長すぎたか、はたまた知らないのか、アラス・ラムスは困ったように首を横に振った。

「つまりその、アラス・ラムスの、パパとママのことを教えてほしいんだ」

身元不明の、一応は人間の姿をした子供だ。両親について質問するのはそれほど突飛な発想ではないだろう。その答えが、

「ばばは……サタン」

そんな内容でさえなければ。

真奥の背中に、その場の全員の視線が集中した。

「そうか……パパはサタン……は？」

その驚愕の内容に運れて気づいた真奥は、ゆっくりと皆を振り返る。

「……え、俺？」

「今……」

「確かに……」

「パパはサタンって……」

「言ったよね……」

「ま、真奥さんっっ？」

それまで夢見心地でぼんやりしていた千穂が、急に我に返ったように突然真奥に食ってかかった。

「ま、ま、真奥さん、子供がいたんですか？」

「ちよ、ちよ、ちよっと待てちーちゃん！」

「あれですか、魔王だった頃に、実は奥さんと子供とかいたんですか？」

「いねえー いねえからちよっと落ち着けー！ そんなものはいたことねえ！」

「そ、それは真（まこと）でしようね魔王様！」

「おいつー 芦屋（やしろや）までなんだっ！」

「魔王様に隠し子がいたとなれば魔界の一大事！ 未来の王として最高の英才教育を施（ほどこ）さねばならないというのに、こんなに大きくなるまで、私にも内緒（うちそと）とは一体どういうことですか！」

「待てっー なぜもうこいつが俺の子だと確定してるんだっ!!」

「そ、そうです、お相手は一体どこの馬骨（うしほね）悪魔（あくま）ですか！ 魔王軍はほとんど男の悪魔ばかりでしたが、もしやエンテ・イスラに攻め入る前のことですか！」

「だから違うってのにっ!! ……って」

千穂と芦屋からステレオで詰問（きつもん）される真奥の手に、アラス・ラムスと名乗った少女が、タオルケットから出ると、

「んしょ、しょ」

短い両手でぎゅっと畳（たたみ）を掴（つか）み、おぼつかない足取りながら、あどけない顔を勇ましく引き締め、てゆっくりと立ち上がった。

とりあえず、一人で立ち上げられる程の年齢である、というどうでもいい事実（じじつ）は判明（はんめい）した。

一生懸命両手両足を振りながら、畳半畳分の距離を踏破して真奥の元にたどり着いたアラス・ラムス。

その健気な姿に、全員の顔が一時和らぐが、アラス・ラムスはそんな空気の中、真奥の手を取り、その匂いをかぐようにすんすんと鼻を鳴らす。

「……ばば」

そして満面の笑みで真奥に抱きついた。

その瞬間の空気の緊張を、一体どのように語ればよいのだろう。

千穂と芦屋は顔をひきつらせて空気を失った金魚のように口をばくばくさせ、漆原はとばかりを食わぬように部屋の隅に逃げ出し、恵美と鈴乃は一体何をどう処理してよいか分からず立ち尽くす。

そしてもちろん一番大混乱に陥っているのは、父親認定されてしまった真奥本人だ。

「ま、待てっ！ 一体何を以ってお前は俺を親父だと断定したんだ？」

「ばばー」

「頼むから火山にダイナマイト放り込むような返事はやめてくれっ!!」

蒼白になっている千穂と芦屋をなんとか宥める方法はないものか、真奥は思考を大車輪で回転させ、そして、事態を打開する一つの質問を思いついた。

それが、彼を更なる奈落へと引きずり落とす破滅の序曲になるとも知らずに。

「そ、そうだつー ママは誰だママはー」

アラス・ラムスは大きな瞳をきよとんとさせて、真奥を見返す。

真奥としては、自分が会ったこともない母親の存在によって、逆説的に潔白を証明しようと思いついたのだ。

アラス・ラムスの外見は、人間に換算すれば一〜二歳。一〜二年前と言えば、丁度勇者エミリアとの死闘の前後である。その頃の真奥に女悪魔にうつつを抜かすような暇など無かったことは、芦屋も恵美もよく分かっているはずだ。

「まま」

だがアラス・ラムスは、真奥の質問を復唱することなく、一回で返事した。

まま、という単語とともに、もみじの手が迷いなく、ある一点に向かってずっと人差し指を向ける。

もう手や指の形を自由に動かせるのか、というこれまたどうでもいい感想を抱きながら、全員がアラス・ラムスの指差す先を追って視線を巡らせた。

「……えっ？」

指を差されたその場所には、恵美が立っていた。

「……わ……わわわ……私っ？」

一瞬でその場の誰よりも血の気が失せ真っ白になる恵美。

真夏だというのに完全に空気が氷結した魔王城。そこにとどめを刺すように、

「ばば。まま」

アラス・ラムスは真奥と恵美を、はつきりと、順繰りに指差した。

真奥と恵美は何が起ったか分からず茫然自失。そして、

「……………ふうっ」

「わー……！ 芦屋！ しっかりしろ！ 大丈夫かつ！」

その瞬間芦屋が落下するように気絶し、慌てふためいて漆原がそれを助け起こし、

「ゆ、ゆ、ゆ、ゆき、ゆききき、遊佐さん？」

千穂の手の中で、中身が入ったままのアイスカップが一瞬で握り潰される。

「父親が魔王で、母親が勇者だと？ 異変どころの、騒ぎではないぞ……」

鈴乃のその一言が、これから始まる阿鼻叫喚の事態の全てを象徴していた。

そしてそんな大人たちの混乱などどこ吹く風、リンゴの少女アラス・ラムスは、「ばば」と  
「まま」の間を、楽しそうに八の字を描きながら往復するのだった。



THE NEW  
SINGLES  
COLLECTION



魔王城の天地をひっくり返す事態が発生した翌日の午後。

千穂は一瞬中の様子を窺ってから、ささやかな音でヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室のドアをノックした。

すると、中で誰かがごそごそと動く音が聞こえて、ゆっくりとドアに近づいてくる気配。

「芦屋さん？」

外から声をかけると、鍵の開く音がして目の下にびっしりとクマを張りつけた芦屋が顔を出した。

「……どうも、佐々木さん……」

声には疲労が色濃く出ており、いつもの生活感溢れる朝気は全く見られない。

「今、平気ですか？」

「……ついさっき、ようやく寝ついたところでして……とりあえず、どうぞ中へ」

「はい、お邪魔しますね」

二人とも声をひそめて、大きな音を立てないよう細心の注意を払って玄関のドアを閉める。千穂は靴を脱いで中に上がると、奥には行かずにその場にかがみ、手に持った荷物をそつと床に下ろした。

ビニールの買物袋がこすれる音がまるで爆音のように聞こえる。その袋を挟んで芦屋もかがみ込んだとき、外の道路をけたたましい音を立ててバイクが通り過ぎた。

芦屋と千穂は一瞬息を呑んで固まり、描ってすだれの日陰の下でお昼寝をするアラス・ラムスの姿を見る。

微動だにせず一生懸命眠っているその姿に二人は安堵のため息を漏らす、すぐに真剣な顔つきに戻った。

「これ……とりあえず、考えられそうなもの、なんでも買ってきてみました」

千穂は袋の中から、大きな音を立てないよう細心の注意を払ってゆつくりと品物を取り出す。「粉ミルクに無糖ヨーグルト、あとはお試しの意味でレンジでチンする離乳食を何種類か……」

昨日の晩ご飯は、どうしたんですか？」

「……昨夜はクレスティアから譲り受けたうどんを刻んで卵やはんぺんと一緒に柔らかくなるまで煮て与えたところ、素直に食べました。咀嚼にも問題はありません。水も飲みましたし、

食事は人間の物を摂取させて大丈夫そうです」

千穂は小さく頷くと、更に色々と取り出す。

「これはばちくしたときのための滅菌ウェットティッシュ、こっちが子供用の歯ブラシ。歯磨き粉とか、まだ上手にベツてできないといけないんで使わないでくださいね。それからミネラルウォーターのペットボトル」

「歯ブラシ……そうか、夕べ、歯を磨かなかった……この、小さい水のボトルは？ 他のミネラルウォーターと何か違うのですか？」

「それ、小児用の経口補水液です」

声屋は聞いたことのない単語に、疲れた目を瞬かせる。

「今、暑いじゃないですか。万が一脱水症状起こしたときに、これで水分と一緒に塩分と糖分を補給できるんです。赤ちゃん用のスポーツドリンクだと思ってください」

「大人用とは何か違うのですか？」

「子供の体にも負担が無いよう作られてるんです。普通のお水から作ることもできるんですけど、ここ、浄水器ついてませんよね」

千穂は銀色の蛇口が割き出しのままの魔王城のシンクに目をやる。

「東京の水は昔に比べて綺麗になったらしいですけど、家やアパートの水道管が古いと意味ないですから……もとがリングだったんなら、お水関係は極力綺麗なものの方がいいんじゃないかと思つて。ただあくまで緊急用なんで、こればかり飲ませちゃだめですよ」

「……なるほど」

声屋は感心したように頷いた。

「それと、何かを飲ませるならこれで飲ませてあげてください」

続いて出てきたのが、プラスチックのコップに蓋がついて、蓋の真ん中からストローが飛び出しているものだった。

「これ、ストローの中に弁がついてて、倒しても中身が零れないように出来てるんです。あん

なに喋れるならもう吸う力は結構強いはずだから、これで大丈夫だと思います。……あ、エンテ・イスラにストローってあるんですか？」

「ある……と思いますが、何せ人間の世界のことなので……エミリアがクレスティアなら知っているかと……」

「もしアラス・ラムスちゃんがストローの使い方が分からなかったら、これ使ってください」千穂が続けて取り出したのは、『子供用麦茶』と書かれた紙パック飲料だった。

「麦茶に子供だ大人だと関係あるのですか？」

「ありますよ。市販の水出しや煮出しの麦茶だと、うまく作らないと味に渋みが出て嫌がっちゃうことがあるんです。それに、これは中身よりもストロー付きの紙パックだってことの方が重要で、ストローの練習をするのに丁度いいんです」

「ストローの練習ですか」

「はい。吸うと飲み物が出てくる、ってことを赤ちゃんに分からせるために、大人が紙パックの真ん中持って、ちよつとずつ押し出してあげるんです。そうすると赤ちゃんが、ストローに對して抵抗が無くなっていって、自分で吸って飲んでくれるようになるんです」

「……」

言葉はもはや、感動の眼差しで千穂の顔を見ている。

「あと、こっちは全部おむつですー」

千穂が差し出したのは、色々な形をしたおむつだった。

パンツのように穿けるタイプ、昔ながらのテープ式に加え、様々な形状の色々な素材で出来た紙おむつがずいといと差し出された。

「かわりばんこに試してみて、一番合いそうなのを使ってください」

差し出されたおむつを抱えた芦屋は、感謝まって顔を伏せた。

「本当に……本当に佐々木さんにはお世話になりっぱなしで、この芦屋、感謝の気持ちを伝える言葉が思いつきません……っ」

「そんな、大げさですよ」

「いいえ……佐々木さんさえ良ければ、魔王様が日本で力をつけた晩に編成される新生魔王軍の筆頭大元帥になって頂きたいくらいです！」

「それは、遠慮します」

世界征服を目指しているのに、ベビー用品の提供とアドバイスをしただけで大元帥に取り立ててもらえる魔王軍でいいのだろうか。

千穂は他人事ながら心配になる。

「それに真奥さんから必要な物買うだけのお金は預かってますし、私はちょっと買い物してきただけですよ。あ、これお釣りとレシート、真奥さんに渡しておいてください」

「……確かに、確かにお預かりいたしました、この芦屋、一命を賭して……っ」

命がけでお釣りを預かれても困る。千穂は苦笑しながら、

「それに、ちよつと楽しかったですし」

先ほどから機動だにせずに寝息を立てているアラス・ラムスを見る。

「父方の従兄が結婚してて、もう子供がいるんです。従兄の家に遊びに行くと、面倒見て一緒に遊んでたんで、従兄の奥さんに世間話ついでに色々教えてもらったんです」

「……そのようなことが……」

「それに、それに、あの」

ちよつとの昔を懐かしむような顔をしていた千穂だが、ふと、自分の左手をぎゅっと握んで、心なし頬を赤らめて、口の中ではそぼそ言い出す。

「真奥さんと……いつか……私………つたらしいなあつて」

「あの、佐々木さん？」

「え？ あ、あ、あ、なななんなんでもないですなんでもっ！」

顔を赤らめてばたばたと手と首を一齐に振る千穂。そのときふと気づいて、戸屋に尋ねる。

「漆原さん、どこ行っちゃったんですか？」

魔王城の不良債権、黒字掘削士、天使資格と一緒にデリカシーもどこかに墮としてきたウルトラニート漆原の姿がどこにも見当たらない。

ついでに、彼がいつも座っているデスクからはノートパソコンも無くなっている。

「まさか、逃げました？」

漆原を知る人間から、彼が働きに出たとか、買物に行っているとか、そういったポジティブな想像は生まれない。そもそも彼は、天下の往来を堂々と歩ける立場ではないはずだ。

「ふっ……むしろ奴にそれほど根性があるなら、私もここまで疲れておりません」

芦屋はこめかみと口の端をヒクつかせて、沈痛な面持ちで深いため息を漏らした。

「……佐々木さんのご想像通り、昨夜、アラス・ラムスの夜泣きと活発さは想像を絶してなお余りあるものでした」

本当に生まれただの赤ん坊の夜泣きと違い、言葉を話し周囲の状況への理解がある程度深まってくると、夜泣きには具体的な要求が伴うことがある。

千穂は、家庭の都合もあり夕方には帰宅してしまつて、そのあとのことを知らない。

芦屋の疲労の度合いを見ても、状況は樂觀できるものではないのかもしれない。

千穂は自分が帰るまでの事態を思い起こしてみた。

## ※

アラス・ラムスは、見た目の年齢よりも言葉の発達が大分早い。

「ばばはサタン」と言い、恵美を指差し「まま」と言い出したアラス・ラムス。



だが真真が全力で否定したのも同様に、恵美もしばしの自失から立ち直った後、激しく自分が母親であることを否定する。

もちろん他の四人とて、最初こそ混乱したものの実際に真真と恵美の間に何かの間違いがあったなどとは思わない。何せ魔王と勇者と言えば、交わらないという意味では水と油、反発すること磁石の同極同士よりも全力である。アラス・ラムスの外見年齢から言ってもそれは証明できるし、何より当たり前のことながら、双方身に覚えなど無いし、あつてはたまらない。だが、当然のように、両親認定した大人二人から拒否されたアラス・ラムスは火のついたように泣き出してしまふ。

真真は心底困惑しながらも、必死でアラス・ラムスを宥めようと言葉をかけていた。

「なっ？ 落ち着けアラス・ラムス。お前のばばとままはちゃんといふんだ。俺もこのお姉ちゃんもお前の両親じや」

「ひいーやなあー…… サタンばばなうおー……！！！！」

小さい口で泣きながら叫ぶので、めちやくちやな音で発せられる。

「参ったなあ……おい、どうすりやいいんだよ」

「……………」

「おい恵美……………」

「……………」





「聖剣を受け止めた」という事実が頭から吹き飛び、おっかなびっくりアラス・ラムスを抱き上げる。すると、恵美のお腹に顔をひつつけていたアラス・ラムスが顔を上げ、

「……………」

恵美は、諦め顔で俯いた。アラス・ラムスの鼻と恵美のシャツとの間に、鼻水の架け橋が結ばれて銀色に輝いていたからだ。

「ひぐっ……ぐずっ……まあまあー」

全身全霊で泣きながらも大きな瞳はしっかりと恵美の顔を捉え、庇護を求めて幼い信頼を寄せてくる。

「も、もう……しょうがないわね……」

ほとんど横負けた体で、恵美はアラス・ラムスをしっかりと「だっこ」する。

自分の肩に顔を載せて、首と肩にひっしと抱きついてくるアラス・ラムスのふにふとした赤ん坊らしい腕。

「ひっく……まあ……ふええ」

絞り上げるような泣き声から、徐々に落ち着きを取り戻して、恵美の耳元で小さくしゃくり上げるアラス・ラムス。

可愛い、だが困る。でも可愛い。困った。それが恵美の偽らざる本音であった。

恵美は黄色いワンピースの背中を落ち着かせるようにさすりながら、真奥に言う。

「で……どうするのよ、これから」

「どうするのだったって、どうすりゃいいんだ」

「私が聞いているのよ」

「どうでもいいが、だっこの姿が結構サマになってんじやねえか」

「……あなたそれが自分の首絞める言葉だって分かってる？」

「ねえ、一つ気になったんだけどさ、なんでこの子、真奥がサタンだって分かったの？」

漆原がアラス・ラムスと真奥を交互に見て言った。

「僕と違って、真奥って悪魔と人間の外見に結構差があるよね」

「知らねえよ。さっき手の匂い（におい）かがれたけど、なんかこいつにしか分からない共通することが

あったんじやねえのか」

「真奥の手からなんて、マグロナルドの油の匂い（におい）しかないだろ」

「いい匂いだろぅが！」

真奥は見当違いのところで反論してから、

「……どうしようもねえだろ。これは」

漆原に噛みついてから、難しい顔でそう言っただけのアラス・ラムスを見る。

恵美の腕からずり落ちそうになっているアラス・ラムスは、少しもがいてからまたしっかりと恵美の首に抱きついた。恵美もアラス・ラムスのお尻（おしり）をしっかりと支えてやる。

「そうだ、刷り込みじゃありませんか？ 赤ちゃんになって最初に見た真奥さんと遠佐さんを親だと思い込んだじゃったとか」

千穂が挙手して言うが、それにも真奥は首を振る。

「ありそうにも思えるが、それだと『ばばはサタン』ってことにはならないだろう。『真奥』でも『魔王』でもなくアラス・ラムスは『サタン』って言ったからな。こいつに聞こえらとこで、誰か俺のこと『サタン』って呼んだか？」

「あ、そっか……」

「まあ魔界じゃ『サタン』なんざありふれた名前だが、日本の俺の前にわざわざ来て『サタン』だ。こいつの言う『サタン』は俺のことだと思っただけじゃない」

「じゃ、じゃあ真奥さん、アラス・ラムスちゃんのこと認知するんですかっ！」

「ちーちゃんちーちゃん、言葉遣いが生々しいから」

どこか必死な千穂に、真奥はげんなりする。

「サタンがありふれた名だというその話も気になるが、つまり、何が言いたいんだ」  
鈴乃に先を促されて、真奥は頷く。

「一番簡単なのはこうだろ。誰かがアラス・ラムスをリンゴの姿に擬態させて、俺のところに送ってきた。そして」

「……その誰かは敵か味方が分からないけど、近いうちにこっちにやってくる、ってことね」

アラス・ラムスを抱えた恵美が、真剣な顔で後を離れた。

「そういうこったな。言いたかねえが、今回もきつとお前絡みだぞ。どう見たってこいつ、魔界の関係者には見えねえし」

「……うるさいわね……これでも千穂ちゃん限定で、巻き込んでるのは悪いと思ってるのよ」

「限定すんな。対象をきちんと広げろ」

「ど、どういうことですかまた遊佐さん絡みって」

心配そうな千穂の言葉に、恵美はアラス・ラムスを抱きかかえている右手を見る。

「この子は聖剣を受け止めて、聖剣を出した私に反応した。これだけで十分よ。サリエルが私の聖剣を欲しがっていたのは、千穂ちゃんも覚えてるでしょ」

先日起こった大天使サリエルの襲撃で、千穂は恵美と一緒にサリエルに誘拐された。その際サリエルは、彼の特殊能力である「墮天の邪眼光」を用い、恵美から聖剣を引きはがそうと画策していたのだ。

「サリエルは、どうして聖剣を欲しがっていたかは言わなかった。この貧乏魔王を倒してないのに、聖剣を取られたらたまったもんじゃないわ。今でもその理由は宙ぶらりんのままなのよ。そこに聖剣を受け止めたこの子が来た。関係ないと思う方が無理じゃない？」

「真面目に考察するフリして、さらっと俺の悪口を織り交ぜるんじゃないよ」

真奥の突っ込みを無視し、恵美は千穂に尋ねる。

「そう言えば、最近サリエルの様子はどうか？ この数日、あいつ何してるの？」

それに対して千穂の答えは簡潔だった。

「太ってきてます」

「は？」

「だってあの、木崎さんに会いたがために毎日毎食マグロナルドに来て、全部しサイズのセットで頼んでいくんですよ？ 売り上げに貢献する人には木崎さんが愛想いいのが分かっているんです。そのせいで、一週間ちよつとで驚くほど太りました」

真奥の魔王覚醒によって任務に失敗したサリエルだが、彼はそれまで偽装していた身分であるセンタッキーフライドチキン轄々谷駅前店の店長狼江三月としての身分を正式なものとした。そして一日惚れたマグロナルドの店長にして真奥の上司、木崎真弓への想いを成就させるべく、天界も任務も全部忘れて毎日マグロナルドに足繁く通っているのだ。

木崎も常に店にいるわけではなく、ときには店長代理の真奥と顔を合わせることもあるが、何せサリエルは、木崎への愛を貢ぐためなら墮天使に墮ちてもいいとまで言い切っている。

マグロナルド内での行動が全て木崎に簡抜けになると分かっているらしく、あれだけ狼藉を働いたのが嘘のように、千穂や真奥に対してすら気味が悪いほどに愛想がいい。

「……まあ、あの大バカ天使がこれに関わっているかどうかは分からないが、もしトラブルが起こるなら、ついでに巻き込まれていなくなってもらえると助かるな。あいつなんだかんだで



言葉の邪魔なんだよ」

「サリエルは……聖剣云々はともかく、アラス・ラムスと直接の関係は無いと思う」  
 そう言ったのは鈴乃だった。

「奴自身は先の戦いで、聖法氣を使い切ったわけでもない。自分の意思で帰らないだけだ。ならば、アラス・ラムスに奴が関係していれば即座に飛んできそうなものだ」

その言葉に思わず漆原は監視カメラを起動させ、千穂はキッチンの窓から共用廊下を覗き、芦屋は玄関からそつと外を窺ってしまふ。

「それに、『アラス・ラムス』というのは、天界の言葉ではない。れっきとした、エンテ・イスラで使われている、人間の言葉だ」

「え？」

「『アラス』は『翼』。『ラムス』は『枝』。いずれも、かつてイスラ・ケントウルムでのみ使われていた、『中央交易言語』にある単語だ」

中央交易言語とは、エンテ・イスラの東西南北の交易全てを繋いでいたイスラ・ケントウルムに於いて、度量衡や取引の公平を図るために作られた国際補助語だ。

中央交易言語を扱う者は、政に携わる者や高位聖職者、または交易商人に限られたが、理屈の上では、エンテ・イスラ全土で通じるたった一つの言語ということになる。

「つまりエンテ・イスラのどこかには、この子の名に意味を込めた名付け親がいることになる。

それが人間なのか、天使なのかは分からない。まさか悪魔ということはないだろうが……」

一体どんな意図で、誰がその名をつけたか、この期に及んでも見当はつかない。

「つまり、今俺たちは完全に受け身の状態に立たされているわけだ。正体不明のアラス・ラムスを抱えたまま、敵かも味方かも分からない送り主を待たなきゃいけない」

真奥の真剣な顔の総括。恵美も鈴乃も珍しく真奥の言葉を聞いている。

「結局のところ、誰がアラス・ラムスの世話をするかって問題に戻ってくるわけだよねー」  
それを引き継ぐようにして放たれた漆原の一言が、束の間、外の蟬の声以外の音を魔王城の空気が消した。

「さっきから随分大人しいと思ったが、寝ちまったのか」

真奥は恵美の肩に顔を載せたまま寝ているアラス・ラムスを見た。

「……こんな小さな子が、変な陰謀に巻き込まれるようなことにはなってはしくないわね」

恵美は、嘆息してだっこしているアラス・ラムスの背を撫でる。

「リンゴの前段階が無ければ、普通の赤ん坊なんだがなあ。うりうり」

面白がってほったたをつつく真奥。恵美は顔をしかめてたしなめる。

「ちよっとやめなさいよ。折角寝ついたのに」

たしなめられて手を引つ込める真奥。

「む……なんかいいなあ、遵佐さん」

そして、そんな三人のどこかしっくり一まとまりになっている様子を正面で見ていた千穂。微笑ましいものを感じつつも、つつい萩ましきのあまりぶっくり頬を膨らませてしまい、

「千穂殿、千穂殿。顔に本音が」

鈴乃に指摘されて危ういところで我に返った。

アラス・ラムスにちよっかいを出す真裏を引き離してから、恵美は嘆息する。

「私は引き取れないわ。独り暮らしだし、仕事もあるし、面倒見られる時間は限られるわ」

「しかし、魔王城にこれ以上人口が増えるのは家計的に辛い。まして男三人だ。赤ん坊を預かるのに最も不向きだろう」

芦屋もすかさず反論する。ただでさえ無駄飯食いを抱えている上に、エアコンの無い六畳間に男三人だ。赤ん坊の養育環境としては不適切極まりない。

「すいません……協力したいんですけど、両親を納得させられる理由が思い浮かびません」千穂も申し訳なさそうに言う。

「千穂殿が気に病む必要はない。元はと言えば、エンテ・イスラの問題だ」

そんな千穂の肩に手を置きながら鈴乃が慰める。

「身寄りの無い子供が大人の都合でたらいまわしにされているのは、見ていて気分のいいものではない。私は別に仕事があるわけでもないし、引き受けても構わないぞ。これでも大勢の子供の面倒を見た経験はある」

見た目が千穂と同じかそれ以下にも見える鈴乃だが、大法神教会での経歴や役職を考えると、実は女性陣の中で一番年上、ということになる。

それを追及することは命に関わると誰かが本能で悟っているので誰もしないが、年の功と聖戦者という戦の功で、確かに鈴乃ならば適任と思えた。

何より、彼女の家事のユニフォームである浴衣の上に制着と三角巾という姿に、背負い紐をしてアラス・ラムスを背負う姿を想像し、しつくりくるのは確かである。

鈴乃の申し出に恵美と芦屋と千穂と、なんら協力の意思を見せない漆原すら安堵の表情を浮かべる。

「……」

ただ一人、難しい顔を崩さないのは真奥だった。

進化聖剣・片翼に関係あるらしい赤ん坊が、大法神教会の聖戦者に引き取られるという理想的な結末でひとまず落ち着きそうな空気の中、真奥は何度も恵美とアラス・ラムスと、そして自分の手を見返していた。

「……あの、真奥さん？」

その様子に気づいていたのは、当然と言うべきか、千穂だった。

「何か……あるんですか？」

「ああ、一つ、いや、二つだけ胸に落ちないことがあってな」

真奥は千穂の顔は見ずに、惠美の顔を見ながら答えた。

「気にしすぎなのかも知れないが……」

そう言つて真奥は自分の額に手を当てた。千穂は真奥の言わんとしていることが分からず首を傾げる。だが考え込んでいる様子の真奥は千穂から返事が無いことを気にせず、続けて呟いた。

「……どうして『ママはエミリア』じゃないんだろうな……」

「え？」

その内容がこれまでの流れを無視したものであつたために、千穂は目を丸くしてしまふ。

だがそれ以上に、千穂の心にその瞬間、得も言われぬ痛みが走る。

千穂は自分で、その痛みをすぐに打ち消そうとする。

「エミリア」が惠美の本名であることは分かつている。真奥にとって、惠美や鈴乃が敵であることも理解している。

でも、と千穂は思う。

「私……『ちーちゃん』じゃなくなる日って来るのかな……」

自分は彼らの秘密を知っているだけの、なんら特別な力を持たない女子高生だ。

告白の返事が宙ぶらりんであることはいいとして、サリエルに誘拐されたとき、真奥は自分のことを、守るべき部下であると断言していた。

知っているだけ。仕事でも、プライベートでも、何かあっても真裏に守られるだけの存在。己の分を弁えなければならぬという理性的な自分と、対等に名を呼ばれたいという欲張りな自分が、丁度こんなとき、胸を切なく締めつけるのだ。

「ん？　ちーちゃんなんか言った？」

「……すいません、なんでもないです」

千穂は状況を弁えない己を恥じ、アラス・ラムスを囲む輪からわずかに身を引いた。

もちろん真裏はそんな千穂の様子に気づくはずもなく、しばらく遠慮する様子を見せた末、誰もが驚く一言を言い放つ。

「決めた。アラス・ラムスは、魔王城が保護する」

※

「……それで、漆原さんは結局どこに？」

昨日の大騒ぎを思い出しながら千穂が改めて尋ねると、答えは予想外の場所からやってきた。「あー、あつつい、芦屋、ご飯まだ？」

がらっと押入れの襦が開き、中からうつすら汗を浮かべた漆原が出てきたのだ。

「あ、なんだ、佐々木千穂来てたの」

突然の事態に千穂は言葉を失う。

見れば押入れの中には、懐中電灯とパソコンと小型扇風機が持ち込まれており、千穂が見ている前で漆原はそつと床に降りると、何食わぬ顔で冷蔵庫の前まで来て麦茶ポットを抱えて、また押入れへと戻ってゆく。

「ま、ゆっくりしてればいいよ」

そう言いながら、役立たずの猫型ロボットもどきは襖を閉じた。

「……芦屋さん……」

「私は何も見ませんでした」

芦屋は、力ない声で即答する。

「もう奴が視界に入らないだけで私はいいのです。昨夜はアラス・ラムスの夜泣きを宥めようと魔王様と私でかわるがわるあやしたのですが、一向に泣きやむ気配も無く、ママはどこだママはどこだと……ルシフェルは、昨夜からはとんどの時間を押入れの中で過ごしています」

「漆原さんなんか、脱水症状起こして干からびればいいんです」

千穂は心底芦屋に同情する。

真奥がアラス・ラムスを引き取ると言い出したとき、最初に保護者として立候補した鈴乃は反対した。

だが、目覚めたアラス・ラムスが、ばばと一緒にいい、と言うと、鈴乃は思いのほかあつき





り引き下がった。

「子供の意思は尊重するべき。ただし、少しでも赤ん坊の教育に悪そうなことをしでかしたら即座に私が引き取る」

と真奥<sup>まおく</sup>に対して釘<sup>くぎ</sup>を刺すことは忘れなかったが。

現状悪魔三人を束ねたよりも強い聖法<sup>せいほう</sup>気を持ち、魔王城の隣に住んでいるという鈴乃<sup>すずの</sup>ならではの圧力だ。

しかし、問題は「まま」だった。恵美<sup>えみ</sup>は鈴乃と違い、近所に住んでいるわけではない。

真奥と住むことにアラス・ラムスが納得したのを見て、最初の問題が一応の解決を見た後、とりあえず本来の目的を達成するべく鈴乃の買物に出ようとした恵美に向かって、アラス・ラムスは既に不穏<sup>ふおん</sup>な気配を漂わせていた。

「まま、またあたしをおいてくの？」

涙目でそう言われて、恵美は言葉を失う。

「……？」

真奥はアラス・ラムスの言葉に首を傾<sup>かし</sup>げつつも、諭<sup>さと</sup>すように言った。

「おい、いいかアラス・ラムス、ままはな、ちょっとお出かけするだけだ」

「おでかけ？」

「そう、ちゃんと帰ってくるから」

「……ほんと？」

頼るような目で見つめられ、逡巡する恵美に、真奥がアラス・ラムスの後ろから、壁でもいいからそうだと言えと、声なき声を発する。

「ほ、ほんとよ、ちゃんと帰ってくるから」

「いいこでまってるよ」

恵美の言葉を信じ素直に頷くアラス・ラムスに、漆原以外の全員は胸に鍼が刺さる思いであつた。

アラス・ラムスのこともあり、恵美と鈴乃が出かけたのはもう夕方になつた。千穂も帰宅せねばならず、知っているのはそこまでなのだが……。

「蓮佐さん、戻ってこなかったんですか？」

「いえ、クレスティアと一緒に戻ってはきました……ですが、それが良くなかつたのです」

「アラス・ラムスは、エミリアと一緒に寝るつもりだったんだ」

その時魔王城のドアが開いて、鈴乃がこれまた買い物袋を抱えて入ってきた。

「鈴乃さん」

「アルシエル、頼まれていた弁当と栄養ドリンクだ」

鈴乃はぶっきらぼうに買い物袋を声屋に差し出す。声屋はそれをのろのろと受け取り、

「……礼は言わんぞ、いくらだ」

「オリオン弁当の生姜焼き弁当だ。五百円。栄養ドリンクは私の備蓄分だ。負けてやる」

「……」

芦屋はポケットから五百円硬貨を無言で出すと、立ち上がった。弁当の包みをはがす。

「……佐々木さん、すいません、ちよつと昼食を……」

「え？ あ、は、はい、どうぞお構いなく」

「あれっ？ ご飯？」

そのとき生姜焼きの香りをかぎつけた漆原が襖を開けて調子よく顔を出したが、

「黙れ殺しが」

エンテ・イストラ東大陸を一年で制圧した悪魔大元帥アルシエルの名にふさわしい、この世のものとも思えぬ恨みの顔つきと声に、漆原は珍しく何も言わずに襖の向こうに引き下がった。

芦屋は、千穂も鈴乃も放ったまま、力ない様子で弁当を食べはじめた。

「あの芦屋さんが、お金出してオリオン弁当食べるなんて……」

千穂は芦屋の異常を正確に見抜いたコメントとともにそつと涙を拭いた。

「昨夜の夜泣きは想像を絶した。壁一枚隔てた私すら、何度も叩き起こされた」

よく見ると、鈴乃は珍しいことに、うつすらと化粧をしているではないか。

日頃完全なすっぱんでうろうろしている彼女にしては極めて珍しい。目尻が疲れた形で下がっていたので、相当影響を受けたのだらう。

「今朝もとんでもない騒ぎだったぞ。魔王が出動するのを全力で嫌がっていた。一度は戻ってきたエミリアが結局帰ってしまっただから、魔王も帰ってこなくなると思ったのだろうな」

「そうだったんですか……でも、遊佐さんだって簡単に泊まるわけにもいきませんよね」

女性で、しかも勇者の身の上で魔王城に泊まるわけにもいかないだろう、と千穂は思う。

実はすでに一度、恵美は魔王城に泊まったことがあるのだが、知らぬが仏、というもので、ならば鈴乃の部屋に泊まれば良かったか、と言うとそういうわけにもいかない。

鈴乃の部屋には最低限の化粧品しかないし、夏場のことなので着替えは絶対必要になる。

だが、いちいち恵美のマンションのある水稲町まで戻っていると、笹塚にある銭湯は閉まってしまう。翌朝に勤務のある恵美は、入浴せずに出動するわけにはいかないのだ。

「エミリアも気にはなっているが、やはり現実の事情には抗えないようだな」

そう言うのと、鈴乃は浴衣の袖から携帯電話を取り出して、その画面を開いて千穂に見せる。

メールの画面には「エミリア」の名とともに、

「一応明日も寄るから、申し訳ないけれども世話をお願いね」

という文面が表示されていた。

そしてそれを見た千穂は、その内容よりも携帯電話そのものと鈴乃の顔を交互に見てしまう。

「鈴乃さん、携帯買ったんですね」

「ん？ ああ、昨日な。エミリアに頼んで、色々と教えてもらった」

「わあー 番号交換しましょー やっぱりドコデモなんですね」

鈴乃の携帯電話は、流行のスリムフォンではなく、折りたたみ式の普通の携帯電話だった。

「こ、交換か、何やらこそはゆいな。確か番号交換のための赤外線（こうせん）機能があったはず」

巨大怪獣でも倒しそうな機能を探して、鈴乃は難しい顔でしばらくあちこちいじっていたが、やがて降参したように携帯を千穂に差し出した。

「……すまん千穂殿、勝手が分からん。操作を頼みたい」

「いいですけど、勝手にいじっちゃっていいんですか？」

「構わん。買ったばかりだし、電話帳にエミリアの名が入っているだけだ」

千穂も別に特別機械に強いわけではないが、携帯電話なら自分の物と操作方法が違ってもしばらくいじっていればよく使う機能がどこにあるかは分かってくる。

だが、受け取った携帯を開いて、千穂はわずかな違和感を覚えた。

千穂自身もドコデモの折りたたみ式携帯を使っているが、それに比べて明らかにキーに印字された文字が大きい。

更には自分の携帯や家族の携帯、友人の携帯ですら一度も見たことのない、やたら存在感のある「1」「2」「3」と数字が振られたキーが画面の一番上に鎮座（鎮座）していた。

極めつけは、画面の一番左下にある「使い方」と書かれたキーだ。

「鈴乃さんこれ……もしかして、ドコデモの、らくちんフォン。ですか？」

千穂の質問に、鈴乃は驚きを露わにしながら頷いた。

「凄いな千穂殿！ 見ただけで機械が判別できるのか？」

「え、ええ、まあ」

「機械にこだわりなどないし、通話さえできれば別に他の機能はいらない。かつ、私は機械をうまく扱える自信が無いから、極力扱いやすいもの、と言ったらこれになったんだ」

自慢げに話す鈴乃を見て、千穂は深く考えるのをやめた。

テレビCMなどでは機械が苦手な高齢者向けの映像ばかりが流されているが、別に若者からくちんフォンを持つてはいけないという法律も無い。

はどなく鈴乃の携帯で赤外線通信機能を発見した千穂は、自分の携帯電話の赤外線端子と向かい合わせて番号の交換を終了する。

「はい、終わりました。私の番号も、鈴乃さんのに送りました」

「かたじけない。何せ私は黒いダイヤル式の電話で知識が止まっているので、解説書を読んでも基本の用語からしてさっぱり分からなくてな」

恥ずかしそうに言って携帯を受け取る鈴乃。

と、そのときだった。

「……ばばー」

全員が身を跳ませて、声の発生源を見る。

ついさつき寝ついたばかりのはずのアラス・ラムスがのっそりと起き上り、寝ぼけ眼で周囲を見回していたのだ。

「んぐっ……」

驚いた芦屋が生姜焼きを喉に詰まらせてぐもった声を上げる。

「ばばはあ？」

見回す大人の中に、真奥も恵美も認められなかったアラス・ラムスは、みるみるうちに顔を真っ赤にして大粒の涙を溢れさせる。

「ば……ばあああああああ……」

そして爆発。芦屋は麦茶で生姜焼きを流し込むと慌てて宥めようとするが、まさしく火のついたような泣き方にただおろおろとするばかり。

「芦屋さん、ちょっとすいません」

だが一人、冷静な表情の千穂はもたつく芦屋を横にどかした。

「芦屋さん、このおむつは……」

アラス・ラムスはおむつをしていたのだが、それがやけにこんもりと膨らんでいる。

「ああ、昨日私が買ってきたものだ」

答えたのは鈴乃である。

「エミリアが帰った後、アラス・ラムスが盛大におもらしをしてな。手洗いのことなど完全に

失念してたが、もう薬局が閉まっている時間だったからやむなく駅前のコンビニで……」

見ると魔王城のトイレの脇に、小ぶりなおむつの袋が乱暴にやぶかれて置かれていた。

「……芦屋さん、ダメじゃないですか」

「な、何がでしょう」

「泣くはずですよ。もしかして、昨夜から一回もおむつ換えてないんじゃないですか？」

窘めるように厳しい声を出す千穂は、新しいおむつを取り出すと床に広げた。

その上にアラス・ラムスを寝かせると、

「芦屋さん、私を買ってきた袋にスポイトみたいなボトルが入ってるんで、それに水道の水でいいですから水入れてください」

「は、はい、でもあの、水道管が熱せられて少し温いのですが」

「その方がいいです。はやく」

素早く指示を出し、芦屋と鈴乃の見ている前で、アラス・ラムスの両足を片手で掴んで持ち上げ、空いた手でテーブル式おむつを外してゆく。

「はい、お尻きれいきれいしようねー」

件の温水入りボトルを手渡された千穂は、それを握ってアラス・ラムスのお尻にゆっくり浴びせてゆく。一瞬驚いた芦屋と鈴乃だが、流れる水は全ておむつの吸収剤が吸い取っていた。ボトルを置いた千穂はウェットティッシュで残った汚れをふき取ると、古いおむつにティッ



シユを捨てて、もう少しだけアラス・ラムスのお尻を持ち上げてさつと引き抜き脇わきによける。その一連の流れを片手で行った千穂は、最初に敷いておいた新しいおむつの上にアラス・ラムスのお尻をゆつくりと下ろし、手早くテープで留めてゆく。

気がつけば、烈火のごとく泣き喚なげいていたアラス・ラムスがいつの間にか泣きやんでいた。声屋は目を丸くして千穂とアラス・ラムスを見る。

「……エミリアを求めて喚くので、私はてっきりさびしくて泣いているものかと……」

「それも間違まちがいじゃないですけど、赤ちゃんは不快さを訴える言葉のバリエーションが少ないんです。嫌きらなことがあったら、知ってる音で泣くしかないんですよ」

千穂は古いおむつを、ゴミと一緒にいっしょにさつと丸めて燃えるゴミに放り込む。更にウェットティッシュで手を拭ぬぐってから、アラス・ラムスを抱き上げると、りんごのはつべたに頬ほすりした。

「ねー？　ばっちいのやだよねー？」

「うう」

アラス・ラムスは、肯定こうていなのか単に黙もくっただけなのか、とにかく返事をする。

要するにアラス・ラムスの夜泣きの原因は、おむつの中に溜ためまった排泄物はいせつぶつだったのだ。

「大丈夫だよ。ばばも……ママも……も、ちゃんと帰かえってくるからね？　いい子で待つてよ？」

恵美のことを指して「ママ」と言うことに妙な心理的抵抗を覚えたが、赤ん坊相手にそんなことを考えても仕方がないので観念してアラス・ラムスをあやすことに専念する千穂。

「あい」

涙目になりながらも、アラス・ラムスは柔和な笑顔を浮かべる千穂を真っ直ぐに見上げ、しっかりと頷いた。

「もう……可愛いなあ、いい子いい子」

涙目を小さな手で拭う健気な様子に、千穂は思わず相手を崩してしまう。

「あれ……？」

その時、泣きやんだアラス・ラムスの顔に、三日月のような形の紫色の紋様が浮かび、全身がワンピースと同じ色で仄かに光っているのを千穂は見とった。

わずかに瞬きする間にそれらは消えてしまう。

そのことでアラス・ラムスの何かが大きく変化する気配は無かったが、改めてこの赤ん坊が異世界の存在なのだと千穂は嘆息する。

それでも自分にできることは、自分なりに愛情を持って接するだけだと、改めてアラス・ラムスをしつかりと抱きしめた。

「わぶ」

驚いてアラス・ラムスが声を上げる。

その姿を見て、芦屋は打ちひしがれたように畳に手をつく。

「やはり、私など佐々木さんには及ぶべくもない……知将と呼ばれていい気になっていた己が

恥ずかしい……おむつの機能を利用したなんと見事なおむつ交換……まさしく目から鱗……」  
世界征服の過程で赤ん坊のおむつを替える必要に迫られた悪魔など、宇宙広しといえども声  
屋くらいのものであらうが、本人は大真面目に自分の不見識を反省している。

そんな声屋を慰める言葉を持たない千穂は、話題をそらすように壁の時計を見上げた。

「遊佐さん、何時くらいに来るんでしようね」

「勤めが終わってからだろうから、早くても十八時といったところだろうな」

「鈴乃さん、遊佐さんのシフト知ってるんですか？」

「知らんが、待ち伏せていたことがある」

なんの話か分からない千穂だが、ふと思いついて持ってきた靴を見る。

「鈴乃さん、ごめんなさい。私の靴から、ピンクの表紙の手帳出して、その表紙の裏に挟ま  
っている紙、広げてもらっていいですか」

「ああ、ちょっと待て……これか？」

アラス・ラムスを抱きかかえて両手が塞がっている千穂は、鈴乃が広げた紙に目を凝らす。

「今日の真奥さん、朝からランチ過ぎまで店長代理、ピーク過ぎてから木崎さんが来て、あ、  
ちよつと上がり早いんだ。十六時かあ」

パソコンによる勤怠管理とは別に、従業員に配布される木崎の手書きのシフト表だ。それによ  
ると、今日の真奥の勤務上がりは十六時となっている。

現在時刻は十四時半。千穂は携帯に表示された時刻とシフト表を見比べて、

「そうだ、アラス・ラムスちゃん、マダロナルドに連れてってあげませんか？」

「はい？」

「何？」

声屋と鈴乃は面食らって千穂を見た。

「ずっとおうちの中にいても退屈だと思っんです。お散歩に行けば気分変わって何か思い出してくれるかもしれないし、早く『ばば』に会えるじゃないですか」

「ばばー！」

千穂の腕の中で、アラス・ラムスは『ばば』の単語に敏感に反応して嬉しそうに両手を上げる。どこまでも、ばばが大好きなのだ。

だが声屋は落ち込んだ姿勢から顔を上げて反論する。

「魔王様がどのような意図でアラス・ラムスを預かることにしたのかは分かりませんが、やはりこの子を取り巻く状況が分からないうちは、みだりに表に出ては危険かと思うのですが……」

「いや、私は千穂殿に賛成だ。取り巻く事情が多少荒つばかりたとしても、今は状況を動かすために思い切って行動することも必要だ。そう長いことお前たちが、見知らぬ子供の面倒を見られるほどこの国の社会システムは甘くはないだろう。例えばアラス・ラムスが病気になるかとして、親類縁者の証拠も無いのに、無保険で医者に見せられるか？」

鈴乃のもっともな反論に、芦屋は黙り込む。

鈴乃は千穂に抱えられて、先程の泣き方が嘘のようにご機嫌なアラス・ラムスを見た。

「安心しろ。今の私なら、並みの悪魔や天使なら渡り合う自信はある。それに事態が動けば次の行動が決められる。それはお前たちにとってもいいことだろう？」

「それは……そうだが」

「それにな、アルシエル。我々は全員、状況がどう変わろうと、正体がなんであろうと、アラス・ラムスの心身を守ろうという点に於いてはとくに一致しているのではないか？」

「僕はそこまで考えてないよ」

押入れの中からの声は、全員が無視した。

「ならばアラス・ラムスの心身の健康を考え、散歩に連れて行ってやるのがいいと思うが？」

鈴乃は押入れを見やった。

「それに、奴の存在は、幼児教育に良くない影響を与える気がする」

「同感です」

千穂も勢いよく首を縦に振る。

「お前ら僕の悪口言ってるだろ」

自分への悪口であると感じる自覚はあるらしいが、押入れの中から出ようともしないあたり、態度を改める気配は微塵も無いようだ。

「……よからう。だが魔王様が保護すると決めたアラス・ラムスを、部下である私がハイそうですかと人に託すわけにはいかない！ 私と一緒に行く。それならば、外出を許可しよう」

芦屋は言いながらものすごい勢いで弁当を掻っ込むと、口をもごもごさせながら、鈴乃が持ってきた栄養ドリンクの小瓶を一気に仰った。

これも食事のマナーを重んじる普段の芦屋からは信じられない行動だが、ドリンク剤を飲みきった瞬間、

「うっ」

芦屋はうめき声を上げて、その場にあおむけに倒れる。

「芦屋さんっ!？」

慌てて千穂が駆け寄ると、芦屋はしばらく苦しげに虚空を見上げていたが、やがて息を引き取るようにゆっくりと目を閉じた。

「あるしよーる、ねちやった」

呑気なアラス・ラムスとは対照的に一気に血の気の引く千穂。まさか鈴乃は、真奥達を討伐するためにドリンク剤に何か細工をしたのだろうか。

「すー……」

だが次の瞬間芦屋の鼻から、特大の寝息が漏れはじめた。

「……どうやら、トドメだったようだな」

鈴乃が呆れ顔で首を振る。

「隣の私が何度目覚めたんだ。アラス・ラムスの夜泣きをそばで聞いていたアルシエルはひとたまりもあるまい」

鈴乃は倒れるときに芦屋が取り落とした小瓶を、押入れを警戒しながら拾い上げる。

「昨日、エミリアから譲り受けたものだ。多少荒つばかりだったが、こうでもしないとアルシエルは自分から休もうとはしないだろう。この前気づいたことだが、アルシエルが倒れると、結果的に周囲がこいつらに巻き込まれることになるからな」

鈴乃が差し出す栄養剤の小瓶。「ホーリービタミンβ」という聞いたことのない商品名と、見たことのない文字の成分表示が書かれていた。

「……なんて書いてあるんですか？」

「エンテ・イスラの文字だ。悪魔の体力を減衰させる薬とでも思ってくれ」

鈴乃が押入れの方を少し警戒するように見やるので、要するに悪魔メンバーに知られたくない持ち物なのだと理解する。

「あ、そう言えば……」

千穂は、唸るような荒い寝息を立てる芦屋と、アラス・ラムスを交互に見る。

「あるし……るって……アラス・ラムスちゃん、芦屋さんの名前、言えるんだ」

「う？」

千穂に抱えられたアラス・ラムスは、指をくわえて千穂を見返す。千穂はその大きな目を見返しながら少し考える。

「アラス・ラムスちゃん」

「あい」

大きく手を上げて元気のいい返事。それだけで千穂はつい頬が緩む。

「私はね、千穂っていうの」

「ちお？」

「ち、ほ。パパはね、私のこと、ちーちゃんて呼ぶの」

「ちーちゃー」

するとアラス・ラムスは、何かを思い出したように顔を明るくした。

「ばばのおともだちー」

「これ、アラス・ラムス」

すると横から鈴乃が口を挟んでくる。

「千穂殿はアラス・ラムスにとってはお姉さんだ。ちーちゃん。では気安すぎる」

「うー？ う？」

「そうだな、『千穂お姉ちゃん』と呼んでみる」

鈴乃に諭されたのを真面目に受け取ったのか、妙に全身に力を入れてアラス・ラムスは千穂



の顔を見上げる。

「ちお……ち、ね……う」

なんとか鈴乃の言葉を反芻しようとした結果、

「ちーねーちゃー」

どうやらそこに落ち着いたらしい。

「可愛すぎっ!!」

呼ばれた千穂も感極まって、アラス・ラムスに頬すりしてしまう。

「ちーねーちゃ、ちーねーちゃ……」

アラス・ラムスは千穂のことを指差しながら何度も確認するようにその名を繰り返し、

「……う」

千穂の隣に立つ鈴乃を、じっ………と、見た。

「な、なんだ……?」

見られた鈴乃は、ある種の迫力を感じて唾を呑む。

「こっちのお姉ちゃんね、鈴乃お姉ちゃんよ?」

アラス・ラムスが要求するところを機敏に察知した千穂がささやくと、一度自分の中で方法

論が確立された分、アラム・ラムスの反応は速かった。

「すずねーちゃー!」

びしっ！ と指をさして、号令。その瞬間、鈴乃の顔がきつと紅潮する。

「すずねー……や、うん、まあ、その、構わんが、うん」

「ちーねーちゃ、すずねーちゃー！」

真奥と恵美を両親だと言ったときのように、千穂と鈴乃の名を確認するように、交互に何度も叫ぶアラス・ラムス。

「やあんもうかわいいいいい！」

「そ、そんなに連呼するな、くっ……そ、そんな目で見るなっ！ 卑怯だっ！ 可愛いじゃないかっ！」

顔を赤らめながら黄色い声を上げて盛り上がっている女二人は、

「……単純だねえ」

突如押入れから聞こえてきた水を差す声に、キツと厳しい顔を向ける。

鈴乃は倒れる芦屋を跨いで押入れの前に立つと、平手でパンパンと襖を叩いた。

「うわっ!!」

同時に中で漆原が驚いてばたばたと騒ぐ音が聞こえてくる。

「とにかく、聞いた通りだ。アラス・ラムスは私と千穂殿が散歩に連れてゆく。アルシエルが目覚めたらそう伝える。魔王がエミリアの勤務が終わる頃に戻ってくる」

「あービックリした。はいはいもう勝手にして。何があっても僕はいないものと思ってください」

い」

「もとより全員がそのつもりだが、伝言メモ程度に役に立ってもバチは当たらんぞ」

「……なんで、僕と僕以外の全員みたいな構図が出来上がってるの。お前ら人間だろ」

「自分の胸に聞いてみる。利害の一致は時として敵同士を結びつけるが、お前一人だけ誰とも利害を一致させようとしないからそうなるんだ」

「るしふえる、やくたたず？」

襖と会話する鈴乃を見て、アラス・ラムスは、きちんと漆原の本当の名前を交えて不思議そうに言った。

襖の中にもその声は聞こえたらしい。動揺する気配が伝わってくる。

「子供は呑み込みが早くて正直だな」

そして鈴乃がトドメを刺した。

※

十五時。

マダロナルド<sup>はたがや</sup>谷駅前店に、その音は一条の雷鳴の如く響き渡った。

「ばばっ!!」

鋭い指向性を持ったその音は、たった一人の男に向かって一直線に飛んでゆく。

誰もがその音の発信源と、行く先を見、そして、その瞬間に己の時を止めてしまう。

あるクルーは接客を忘れ、あるクルーは運んでいたトレーの束を取り落とし、あるクルーはドリンクサーバーのボタンから指を放すのを忘れてオレレンジュースを盛大に溢れさせる。

キッチンではポテトが揚がったことを告げる機械のメロディが間の抜けた音を響かせる。

天を引き裂く雷鳴に貫かれたその男は、束の間自分の目と耳、いや、世界そのものが信じられない、といった顔つきでしばし茫洋とした表情で固まっていた。が、クルー全員の瞳が、一斉に自分の方向を向いた瞬間、彼の視界に色彩が復活する。

「……………」

声なき絶叫、とはまさにこのことであろう。

真奥貞夫はカウンターの中から不可視カタパルトの推力を得て緊急発進すると、雷鳴の発生源に向かって一足飛びに飛翔した。

「ばばーっ！」

店に入った所で、一瞬で変わった空気に立ち尽くす千穂と鈴乃。そして千穂に抱えられた、小さな小さなリングの少女アラス・ラムスには、まさしく愛するばばが全力で自分の所に駆け寄ってくれているように見えているのだらう。

「おおおおおおおおお前らなああ!?」

真奥は泡を吹いて卒倒しかねないほど顔面を蒼白にしながら千穂と鈴乃に詰め寄る。

「なあんで連れてきちゃってるの!? ちょっと、ええ、洒落にならんぞおい!」

「あ、あの、すいません、アラス・ラムスちゃんが元気になるかなと思って……」

「ばばに会いたいと泣くのでな。気分転換をすれば思い出すこともあるかと考え、連れてきた」  
店内の空気を敏感に感じ取って自分が下手を打ったかもしれないと慌てる千穂と、そんなことを全く気にしない鈴乃。

そしてそれ以上にそんなことを気にしないアラス・ラムスは、抱き上げる千穂の腕の中で暴れると、真奥に向かって手を伸ばす。

「ばば、ばあば!」

「ちょ、あ、危ないから暴れ……」

「れ、連呼すんな頼むから!」

千穂は危うくアラス・ラムスを取り落としそうになり、真奥がそれを慌てて支える形になる。  
「ばば——!」

真奥に受け止められたアラス・ラムスは底抜けに明るい笑顔になって、真奥の首に抱きつく。

「ばば——! あいにくた——!」

「そ、そ、そおか、あははははは」

乾いた笑いを浮かべる真奥の背には、本人たちに隠すつもりすらない、

「真奥さんと佐々木さんの子供？」

「ねえよ、あったら俺真奥さん聞討ちするわ。つか沈めるわ」

「木崎さんどこだ、もしあの人に聞かれたら血の海だぜ」

「やべっ！ ポテト、ポテトが焦げる!!」

などという好奇心と動揺と詮索の声が届く。

「あはははは……真奥さん、す、すいませんなんか、余計なことしちやつて……」

顔を引きつらせる真奥と、笑顔のアラス・ラムス。そして、その二人に忍び寄る巨大な影に気づいた千穂は、ある意味真奥よりも顔を真剣に強張らせる。

「どうした千穂殿、顔色が悪いぞ。骨気にあてられたか」

見当違いの鈴乃の心遣いの声すら耳に入らない。なぜなら、真奥の後ろには、

「まああああああくううううんんん？」

店長の木崎真司が、熊面のような顔で立っていたからだ。

「ひえっ!!」

「う？」

真奥は背骨が抜けそうな勢いで背筋を伸ばす。

「私の耳と目が正常なら、今ちーちゃんが連れてきたその少女は、君のことを『パパ』と呼んだなあ？ んん？」

「……ヨビマシタ」

木崎の声が、一切の反論もごまかしも許さぬという気遣に満ちていると悟った真奥は、素直にそう答える。

真奥も千穂も、次に落ちるであろう木崎の雷を顔面を蒼白にしながら待っていた。が、しばらく経つてもそれ以上なんの動きもない木崎。真奥は恐る恐る振り返る。

すると木崎は、怒るでなく笑うでなく、困ったようにため息をつくとき、驚くほど真剣な表情を浮かべて、真奥でも千穂でもなく鈴乃の方を見た。

「あなたは、確か真奥や佐々木のご友人……鎌月さん、だったかな」

鈴乃は素直に頷くと、

「しばしの時間、佐々木を借りてもよろしいでしょうか」

木崎はそんなことを言い出した。

「……かまわ……構いませんけど……」

前回出会ったときに木崎の前で慣れぬ猫をかぶった鈴乃は、慌てて言葉遣いを修正する。「恐れ入ります。おい、まーくん、鎌月さんをお席にご案内しろ。その子は私が預かる」

「え？ あ、はい、で、でも」

遠慮する真奥の腕から、木崎は有無を言わさずアラス・ラムスを抱え上げる。泣き出すかと思いきや、木崎の腕の中で思わぬ笑顔を見せるアラス・ラムスに真奥は一瞬ホツとするが、

「ちーちゃん、ちょっとスタッフルームに。まーくんもご案内が終わったらい」

その一言に、血の気が下がる。

それは千穂も同じようで、先に立って颯爽と歩く木崎の後ろを沈痛な面持ちでついてゆく。それを見送りながら鈴乃は真奥に、

「……すまない、思いつきとしては浅はかだったようだ」

明らかに穏やかでない雰囲気、少々戸惑いながらもそう言う。

「全くだ、と言いたいところだが、お前らがアラス・ラムスのこと考えてやってくれたんなら、文句言う筋合いはねえよ。あそこら辺、冷房が直接当たらないから適当に座ってろ」

真奥が指差す一角を見て、鈴乃はまた真奥を見る。

「もつと怒るかと思ったが」

「あ？　なんで怒る必要があんだよ。まあ、結果はこうだが、協力してくれてるんだから礼を言うくらいのもんだろ。悪いな」

また、真っ直ぐ鈴乃の目を見て真摯に言う真奥。

「……魔王のくせに、偉そうに」

鈴乃は、素直な気持ちを棄せたその目を見返すことはできず、口をとがらせてそっぽを向いてしまう。悪魔の王のくせに、何を毎回毎回視線を合わせて素直に感謝などするのか。

「魔王が偉そうにしなくてどうすんだよ。とにかくあの席でちょっと待って……」



そんな鈴乃の反応に眉をひそめる真奥が、そう言ったときだった。

「ふっ……猛暑の午後三時、麗しの女神から贈る甘美なるソフトクリームで、熱く見境のなくなる僕のハートをクールに鎮める時!! ああ愛しの我が女神! 本日この時間もまた、僕のをあなたに届けにやってきました!」

騒がしい変態が、騒がしく変態的な発言をしつつ、騒がしく変態的な挙動で入ってきた。

もはやマダロナルド饅頭谷駅前店の名物となりつつある、木崎の美貌の前に墮天使に墮ちる覚悟を固めた大天使サリエルことセンタッキー饅頭谷駅前店店長狼江三月。

千穂の言っていた毎日毎食、というのはおやつタイムも含まれているらしい。

顔立ちだけはいいサリエルは、大きな紫色の瞳で店内を一瞬で走査する。

そして、店の隅のスタッフルームに通じる扉の前に、彼が永遠の忠誠を誓った麗しの女神の姿を発見した。

そして、その女神が抱える存在も。

「んがっ」

妙なうめき声を発して、サリエルはソフトクリームなど必要ないほど冷たく凍りつく。

「本当に太ったな」

鈴乃がサリエルと最後に会ってからまだ数日。それなのにこの小柄な天使の頬や首回りなどには、明らかに不自然な膨らみが増えていた。

その声で自分のそばに真奥と鈴乃が立っていると気づいたサリエル、壊れたからくり人形のような動きで顔だけ二人を見ると、

「天は……僕を見放したのか？」

そんなことを聞いてきた。

「これは……勤めを放棄した僕に対する神の裁きか？ 我が永遠の女神の心は……既に他の男に射止められ、彼女もそれに応えていて、あれはその愛の結晶か？」

至極分かりやすい誤解をしているサリエルを見て、どう答えるべきか判断に迷った真奥は、

「あー、鈴乃、任せた」

判断を丸投げした。

「えっ？ お、おいつ！」

鈴乃が抗議する間もなく、真奥は木崎達を追ってスタッフルームへと逃げていってしまふ。

「クレスティア・ベルー！ これは夢か？ 夢だと言ってくれ！ 今までの僕の行いが悪かったというなら、悔い改めよう！ 女神の悪かった僕だが、今回ばかりは本気なのだ！ 頼む、神が我が罪をお許しになるよう罪の告白を聞いてほしいっつー！」

「どうして大天使のサリエル様が人間の聖職者に告解されるのですかっ！」

敵対したとはいえ、一応相手は聖職者にとって神にも等しい大天使。つい敬語になってしまふが、人間の世界に降りてきた大天使は、なんと言うか、魔王と同様この上なく俗っぽい。



「今朝のニュースの星占いで恋愛運が最低だったのはこういうことか！ 神は、神は僕になんと無慈悲な試練をお与えになるのだ！」

ニュースの星占いで一喜一憂する女癖の悪い大天使の告解など、想像するだけで頭が痛い。鈴乃も一人の女として、そんな想像が肯定されるような告解など聞きたくもないが、

「……サリエル様は、あの赤ん坊の出自に心当たりは無いのですね？」

アラス・ラムスを木崎が抱えていたのをいいことに、鈴乃はさり気なくカマをかける。

「ああ……出自が僕ならばどれほどいいか……」

よよと女々しく泣き崩れたサリエルから返ってきたのはそんな返事。だがその一言で、鈴乃はサリエルがアラス・ラムスと直接の関係が無いことを確認する。

「……仕方ありません、あなたの罪、お話しになってください」

その他、検証材料を引き出すべく仕方なくサリエルに付き合うことに決めた鈴乃だが、これから一体どんな「罪の告白」が為されるのかを想像し、頭が痛くなってくるのだった。

「……さて、と」

その声に、並んで立たされた真奥と千穂はびくりと身を震わせる。一体どのような叱責が飛ぶのか、胃の腑がぎゅっと重くなった。

「この子、いくつだい？」

だが、木崎から最初に問われたのは、そんな予想外の質問だった。木崎は手慣れた様子で、上体をゆっくり揺らしてアラス・ラムスをあやしていた。

真奥と千穂は、思わず顔を見合わせる。

「三歳……いや体が小さいな。二歳ちよつと前つてところか。ん？」

「あ、は、はい、そうだと、思います」

「思いますって、親から年齢を聞いてないのか」

聞けるものなら聞きたいが、その親がどこの誰かも分からないのだからどうしようもない。

「でもまあ、そうだな。私も姪っ子の正確な歳を聞かれると自信が無い。学校に上がると分かりやすいんだが」

だが木崎は深く追及することなく、自分の例と照らし合わせて自己完結してくれた。

「楽にしろ。別に怒鳴りつけようというのではない。子供の前だしな」

それで楽にできる人間がいたら、きつと稀代の大物である。

「一応ベタな確認をするが、この子はまーくんとちーちゃんの子というわけではないんだな？」

「違いますっ！……そうならいいなあとは思いますが……」

千穂がこっそり混ぜた自分の本音を、しかし木崎は聞き逃さなかった。

「思うのは勝手だが、弁えなければならぬ場面というものはある」

木崎は笑顔でアラス・ラムスをあやしながら、魔王すら威圧する穏やかな覇氣を纏ってそう言った。

「君たちは、男女の付き合いをしているわけではない。そうだな？」

「は、はい」

「それは……はい」

一瞬で肯定した真奥をちらりと見てから、千穂も頷いた。

若い二人の回答に、木崎は苦笑した。

「私が職場恋愛や、職場に家庭の事情を持ち込んだことを咎めるでも思っているのか？　むしろ君たちが男女の付き合いをしていれば、こんなお説教をせずとも済んだのだから」

「え？」

真奥は意表を突かれた顔で間抜けな返事をする。

「まーくんがちーちゃんに手伝いを頼んだのか、ちーちゃんが申し出たのかはどちらでもいい。だがいいか、女子高生が男の家に出入りして赤ん坊の世話をすることが、世間の目にどのように映るか考えたことはあるか？」

思いがけない方向に話が飛んだことに、二人は驚きを隠さない。

「で、でも真奥さん他に頼れる人いないし、実際何もありませんし……」

「ちーちゃんにはまだ分からないかもしれない。だがね、『世間』というのは浅はかで早合点

で、口性なく足が速い。そしてなお悪いことに、形を持たない」

「っ……」

「!!」

木崎の目がアラス・ラムスに向けた瞬間、千穂が何事かを言おうとし、真奥がすんでのと  
ころで制止する。

それを目の端で見えていたのか見ていなかったのか、木崎の指先がアラス・ラムスの頬をくす  
ぐる。アラス・ラムスは楽しそうに笑いながら、

「ばばとおんなじにおい」

木崎の手の匂いを嗅しそうにかいだ。

「そうか、おんなじか」

それに答える木崎もまた、楽しそうに答える。

「こういうことを言うとな、世間と同じくらい浅はかな若者は、決まってこう口答える。

「世間に俺たちの何が分かる」とな。それを言わないだけ、君たちは立派だよ」

木崎は膝の上にアラス・ラムスを乗せると、お腹に手を回して椅子を緩やかに回転させてま  
たアラス・ラムスに笑顔を生む。

それを見て真奥は、千穂を制止した手を緩めて神妙に言う。

「そんなことを言えるほど、俺は世の中の何を何も分かっていますから」

きい、と椅子の回転を止めた木崎は、にやりと笑うとアラス・ラムスを勢いよく持ち上げる。

「みーやーははは」

それが面白かったのか、アラス・ラムスははしやぎ声を上げる。

「それが言えて、ようやく半人前だ」

アラス・ラムスを真奥に返した木崎は、スタッフルームの時計を見ると肩を凍めた。

「まーくん、今日はもう上がっていいよ。ちよつと早いが、幸か不幸か一人欠けたところで困るほど混んでもいない」

「え、いや、でも……」

「君はこの子の『ばば』なのだろう？ ならば目先の時給よりも、子供の、君と過ごす時間を大切にしてやりなさい。君のシフト増加の希望は、一応考慮に入れておく」

それだけ言うと、木崎はクルーキヤツプを整えて、真奥とスタッフルームを後にした。

「……真奥さん、シフトって？」

やや釈然としない様子の千穂が尋ねる。

「扶養家族が増えたわけだから、しつかり働かないとな。もしかしたら、アラス・ラムスを学校にやらなきゃいけないかもしれないし」

抱き上げたアラス・ラムスをあやしつつ、どこまで本気なのか掴みづらい調子で答える真奥。

「本当に、アラス・ラムスちゃんを引き取るんですか？」



「引き取るっていうのはちよつと違うけどな」

真奥はアラス・ラムスの額をつつきながら言う。

「まあ、気になることが解決するまでは、面倒見ようかなと思っただけさ。本当の親が現れれば、さっさと引き渡すけどな」

そう言えば、最初にアラス・ラムスを引き取るか否かでもめたときも、真奥はアラス・ラムスの額を気にしていたような素振りだった。

「なあちーちゃん。前にさ、お袋さんも親父さんも、ちーちゃんが俺んとこ来るの、許してくれてるって言ってたじゃん？」

「……はい」

千穂は身を固くする。

真奥が木崎を、一社会人として尊敬していることは千穂も知っていた。異世界の魔王としてそれでいいのかどうかはさておき、その木崎からの説諭で真奥の気持ちが変わってしまうことを恐れたが、

「木崎さんの言うこと肝に銘じた上で頼む。……もうしばらく、その信頼に乗っからせてもらっていいか？」

「は……え？」

協力をやんわりと中止させられると思っていた千穂は、思わぬ言葉に目を丸くする。

「今は比較的平和な状況にあるけど、やっぱ恵美も鈴乃も俺にとつちや敵だからさ、なんつか、今日日本で俺が全面的に信用して何かを任せられる人間って、ちーちゃんしかいねえんだ」

「……」

「その、前にちーちゃんに言ってもらったことに、きちんと返事しねえままこんなこと言うのはズルいってことは分かってるが、できればその、色々面倒は付きまとうかもしれないけど、これからも協力してくれると、助かる」

「……」

「……ちーちゃん？」

しばらくぼかんと口を開けていた千穂だが、

「……お、おいっ!? な、なんで泣く!? ちーちゃん、え? 俺今何か悪いこと言った!?」

その瞳から一筋、涙がこぼれた。

予想しなかった千穂の反応に慌てふためく真奥。千穂はそれを見て自分の涙に気づいたように、ハンカチを取り出して涙を拭いた。

「あ、ご、ごめんなさい、なんか、その、ちょっと嬉しくて」

「や、謝るよ! 悪い! 俺年上で魔王なのになんかちーちゃんに頼りつきりで……って、え?」

「嬉しかったんです、真奥さんに、頼りにしてもらえてるって分かって」

「え？ あ？ え？ 嬉し……え、じゃあ、な、なんで泣いたの？」

千穂の笑顔に、真奥は真剣に大量の「？」を頭の上に浮かべる。

「えへへ、すいません。でも、人間ってそうなんですよ」

「わ、分らんなあ……で、その……」

「真奥さんが、すぐに返事できないの、分かります。どんな返事でも、もらえるまでずっと待つてますから、だから」

千穂はもう一度、溢れそうになった涙をこらえてから、アラス・ラムスの手を取った。

「ちーねーちゃ？」

「頑張つて、真奥さんに協力します」

「そ、そっか、その、悪いな、さんきゅ」

「はいっ！」

今度は最高の笑顔を浮かべた千穂。真奥はどう対応していいか分からず、クルーキャップを目深にかぶりなおしてごまかす。

「あ、そうだまーくん、その引き出しに……」

その瞬間、去ったはずの木崎が突然戻ってきた。

「!!」

ギタリと身を固めた真奥と千穂を見て、木崎の眉根が寄る。

「……やはり女性クルーは当分雇わん。まったく……」

ごまかせる相手ではなかった。男女雇用機会均等法も、木崎憲法の前には無力である。

木崎は仏頂面（ぶつどうめん）でつかつかと入ってきて、事務机の引き出しから封筒を取り出した。

「新聞の勧誘でもらったが、私が持っても使わないからどうせなら君にやろうと思ったが」  
木崎はため息をつきながら、真奥と千穂を交互に見た。

「さっき私が言ったことは、ちゃんと理解しているな？」

そう言つて、封筒を真奥の頭の上に置いて、また出ていった。

ドアが開まってから大仰（おほけい）にため息をついた真奥と千穂。頭の上に置かれた封筒を千穂が手に取り、顔を見合せて中身を取り出す。

すると出てきたのは……。

魔王と勇者・敵め陣に戦う地獄地獄に



「恵美、何かヤなことでもあったの？」

「え？」

「なんか朝から、ずーっと増間<sup>ふくま</sup>に力入ってるから」

同僚の鈴木梨香<sup>鈴木 りか</sup>に指摘されて、恵美は思わず自分の額<sup>ひたい</sup>に手を当てる。

「また真奥<sup>まおく</sup>さんのトコと、何かソメてんの？」

そして胸中の核心に一気に飛び込んでこられて、恵美は思わすのけぞる。

「な、なんでそう思うのよー」

「だってここんとこ恵美の悩みて、あの人ら関係しか聞かないしさ」

「そ、そんなことないわよー」

「そおかあ？ 真奥<sup>まおく</sup>さんの話を聞くようになる前って、恵美<sup>めぐみ</sup>が思い悩んでた記憶無いけどなあ」  
心外である。

魔王討伐<sup>まおうたふく</sup>を最終目標に掲げる勇者として、常に一定の戦意と緊張感を保ち続けてきた恵美である。決して気の抜けた生活を送った覚えなど無い！

「なんかこうさ、恵美と一緒にご飯食べると、こっちの悩みがどうでもよくなるくらい幸せそうにしてて、遊びに行くときも心底楽しそうで、恵美<sup>めぐみ</sup>がそんな深刻な顔するようになったの、本当にここ最近だけだよ」

「う……」

恵美の心の虚勢は一瞬で崩壊する。

確かに日本の様々な食や文化は常に恵美に新鮮な驚きと新たな価値観を吹き込み、見るものが輝いて映った時期があった。こと食のバリエーションとクオリティに関しては、エンテ・イスラ全土の力を結集しても、日本の足元にも及ばないと言い切れる。

「あ、去年の今頃、エアコンが調子悪くて夜暑くて寝苦しいと言ってたっけ」

「……」

恵美は思わずデスクに突っ伏してしまふ。

日本に来て一年と少し。そこまで緊張感の無い生活を送ってきたのかと自己嫌悪に陥る。

「あと、シフト入りすぎてマシシヨンのガス点検の日程が合わないとか愚痴って……」

「梨香……降参するから、お願いだからそれ以上遠い打ちかけないで」

「ん？ そう？ あ、来た」

恵美のうめき声と同時に、梨香のブースに着信が入り、しばらくその応対で時間が過ぎる。

「で、何？ 今度なんでモメてるの？」

通話終了と同時にインカムのマイクを上げて、ブースの壁越しに乗り出してくる梨香。

「なんでちよっと楽しそうなの」

恵美は恨みがましい目つきで返事するが、そんなことでひるむ梨香ではない。

「聞いてると退屈しないし」

こういう本音を隠さないところが、梨香の良いところであり悪いところでもある。

「それに、友達が悩んでるのを見捨ててはおけないでしょー」

「その前の本音と今の語尾が、全部を台なしにしてるわよ」

恵美は苦笑して言う。

「今回は面倒だって切って捨てにくい事情があつてね」

「ふむふむ？」

「小さな子供が関わってくるのよ」

梨香は肘をついて頷きながら、当たり前のように言った。

「恵美と真奥さんの子供？」

「それは本人が言ってるだけ………あつ!!」

恵美は状況も弁えず、全力で否定の言葉を発しようとして、思い切り墓穴を掘ったことに気がついた。

ところが梨香は梨香で恵美のそんな反応が予想外だったらしく、ついていた頬杖からぐんと落ちて、目を丸くして恵美を見る。

「え、ちよっと、マジで？」

「ち、違うの！ そうじゃなくて、や、その、違わないけど違うのっ!!」

「何言ってるのよ、ちよっと落ち着きなつて」



からかった張本人に宥められて、恵美は荒い息遣いで深呼吸する。

「……真面目に聞いてよ？」

「私は最初から真面目だよ？」

いけしやあしやあと言い放つ梨香を軽く睨んでから、恵美は気持ちを落ち着けて話し出す。

「……真奥のところにね、今小さい子供がいるの。人から……預かった子らしいんだけど」

「真奥さんの親戚？」

「詳しくは知らないわよ」

断定した後々面倒事になってもいけないので、恵美は返答を濁す。

「この間会った浴衣の子、覚えてる？ 彼女のところに行ったときに会ったんだけど」

「なんだっけ、珍しい苗字……そう、鎌月さんだっけ？ 鎌月鈴乃さんだ」

「そう。あのときも話してたけど、彼女のうち真奥の隣だからさ、まあ、顔を合わせたくなく

ても会っちゃうんだけど、そのときにね」

恵美はデスクに肘をついてため息をつく。

「その子に、お母さんだと勘違いされちゃって困ってるの」

「へ？」

梨香は意表を突かれたような顔をして首を前に出す。

「見たこともない子にいきなりママとか言われちゃってさ」

「それはお母さん並みになつかれています、ということではなくて？」

「もう完全に私を母親と勘違いしてるレベルよ」

恵美は首を振って梨香を見た。すると梨香は、先ほど茶化してきたときは打って変わって、真剣な表情を浮かべている。

「そりや……確かに悩むわ。なつかれるだけならともかく、お母さんと勘違いされるかあ……」  
眉根を寄せて腕を組み、椅子の背もたれにのけぞるようにして寄りかかる梨香がふと言った。  
「ちよつち暗い想像しちゃうけどさ、その子、生まれてすぐにお母さんを「く」したとかない？」  
「え？」

その声色が思ったよりずっと真面目で、恵美は目を丸くする。

「お母さんが日頃身近にいるなら、二、三日離れたくらいでよその女と母親間違えるなんて絶対有り得ないもん。そうでなきゃ、恵美と実のお母さんが一卵性の双子レベルで瓜二つなのか、そもそもお母さんの記憶自体が無いかのどちらかじゃないかなって」

「そ……」

そんなまさか、と反論しようとして、恵美は押し黙る。

恵美自身、母親の記憶は一切なく、つい最近まで生きていることも知らなかった。

幼い古い記憶で、村の女性を何度も母親と錯覚したことを今になって思い出す。

もちろんそれ以前に、前提としてアラス・ラムスに『元の家族』があるのかどうかすら判然

としないわけだが、そう言えばあの、

「まま、またあたしをおいてっちゃうの？」

というセリフは、なんらかの理由で母親と離れ離れになったから出たものなのではないだろうか。

「何か思い当たるの？」

「……ん、どうだろ。よく分からないけど……」

「んー、まあ真奥さんちのことだし？ 恵美が気にしなきゃいけない理由はどこにも無いけど」

恵美が深刻に考えはじめてしまったせいか、梨香は空気をとりなすように殊更に軽い調子で言ってみせる。

「私が考えすぎただけかもしれないし、それに部外者ができることなんて限られてるから、最後まで付き合うんじゃないかなければ、余計な手出しはしないに限るって」

梨香がそう言って恵美の肩を叩いたとき、丁度終業のチャイムが鳴り、恵美は顔を上げる。

「……でも今日、爆りに寄るって言っちゃったのよね」

「おいっ！ 恵美、あんたやる気満々じゃありませんか！」

今度は手の裏で突っ込む梨香。

「つ、ついその場の勢いがあって……」

「真奥さんたちの手前意地張りたいだけとかなら、絶対やめときなね」

梨香はいちいち、恵美の弱いところを的確に見抜く。

「そ、そんなことはない……こともない、けど……でも、それだけじゃなくて……」

いくら隣に鈴乃すずのがいるとはいえ、またアラス・ラムスの正体がなんであれ、赤ん坊が魔王城にいる、という事態がそもそも心配すぎるのだ。

それに……。

「別に憐れむとかそんなつもりはないけど、あの子にとってこっちにいる間の時間が楽しい時間になれば、それでいいかなって思うんだけど……」

ややしどろもどろの恵美けいみを立っただま見る梨香りかは、インカムを外すと苦笑して肩を竦すくめた。

「良くも悪くも、恵美はお人よしだね」

恵美は心の中だけで、勇者ですから、と返事する。

「まあ実際子供にとって何が良かった悪かったなんて、成長してみないと分からないしね。なら、恵美が思う通り接してみるのもありじゃない？ 真央まへさんたちがそれを良しとするかはともかくね」

でもねー、と梨香は複雑な表情を作る。

「恵美、あんたさ、友達のベツトとか、預かったことないでしょ」

「突然何？」

「一日二日に飯食べさせただけで、情って移るもんよ。のめり込みすぎて、いざその子が親元に帰るときに凹くぼまないでよね」

「……心するわ」

「ん、よろしいー！ そんな、そろそろ帰るか、愛しの我が子が待ってるわよ」

「梨香っ!!」

茶化す梨香を追い立ててから、恵美もインカムを外す。

「本当の親、かあ……」

そう言つて、インカムを所定の場所に戻し、恵美も席を立った。

「ねえねえ恵美、思い出作りとか考えるなら、こんなの良くない?」

ロツカールームに入ると、早くも着替え終わった梨香が、化粧ポーチを出しつつ手招きしてきた。誘われるまま近づくと、梨香の手から小さな紙が差し出される。

「知らなかったんだけどさ、ドコデモが出資してるから、社員割引あるらしいよ」

※

魔王城のコタツの上に、六枚、細長い紙が置いてある。

「……」

「……」

「これなに、これなに」

真奥とアラス・ラムス、そして恵美は、それを挟んで長いこと黙りこくっていた。

「偶然にしても、集まりましたね」

千穂は脇からそれを見て、どのような表情を浮かべるべきか悩んでいるようだった。

コタツの上にあるのは、文京区の東京ビッグエッグに隣接する複合型アミューズメントパーク、「東京ビッグエッグタウン」の、六枚のチケットだった。

真奥が木崎からもらった封筒に入っていたのは、一日すべての遊具が乗り放題のワンデーパスポートが無料になる一枚招待券に二枚割引券という組み合わせの新聞勧誘用のセット。対して恵美が梨香から受け取った、会社においてあったそれは、社割が適用されるワンデーパス割引券が三枚。ただしこの三枚は、木崎のものより割引率が高い。

要するに木崎にしる梨香にしる、親子三人の思い出作りを提案してくれたのだ。

普通に考えてもいつまでも六畳一間のアパートにアラス・ラムスを閉じ込めっぱなしにするわけにはいかないし、それでは早晩声屋が参ってしまう。

「まあ、いいんじゃないか？ アミューズメントパークというのは、要するに遊園地のことだろう？ 子供が楽しむための場所だ。この割引券をうまく組み合わせて行けばいいじゃないか」  
鈴乃はこともなげにそう言うが、それよりも問題なのは、

「ばばとままとおでかけ！」

アラス・ラムスが、完全に家族旅行のノリでいることである。

そしてこの場合の家族とは、真奥と恵美のことだ。

木崎の場合は偶然かもしれないが、梨香の場合わざわざ三枚組を恵美に手渡したあたりに、妙な作為を感じる。

真奥と恵美は、先ほどからチケツトに目を落としたまま微動だにしない。

二人とも本心では全力で拒否したいのだが、真奥と恵美のことになると察しのいいアラス・ラムスにまた泣かれても困るので、完全に途方に暮れてしまっているのだ。

「……ふうー」

息詰まる緊張の後、真奥が観念したように頷く。それを聞き、恵美は小さく身を震わせる。

「お前もこんなもん持ってきたってことは、それなりに覚悟決めてんだろ？」

「な、何がよ……」

「なあ、アラス・ラムス、どっかお出かけしようと思うんだが、ままいなくてもいいか？」

「やー いっしょー」

力強く人の心を揺さぶる魂の籠った返事である。

真奥の膝からアラス・ラムスが恵美に向かって身を乗り出し、コタツの上の麦茶を倒しそうになって、芦屋が慌ててそれをよける。

「じゃ、ままと一緒にアラス・ラムスはお出かけして、俺はいなくてもいいか？」

「や!!」

より力強く、口を引き結ぶ。

「……ってことだ、誰かいい案のある奴は、今すぐアラス・ラムスを説得してくれ。俺も恵美も全力で乗るぜ」

「佐々木千穂はそれでいうわああっ！」

押入れの中から余計な茶々を入れようとした漆原を、すぐ脇に立っていた鈴乃が横を叩いて黙らせる。

「し、しかし……魔王様とエミリアとアラス・ラムスの三人……というのは」

苦言を呈そうとした芦屋を制して、前に出たのは千穂だった。

「……遊佐さん、お願いします、行つてあげてもらえませんか」

「え、千穂ちゃん？」

思いがけない方向から恵美を促す言葉が出て、芦屋も鈴乃も恵美も驚いて顔を上げる。

「ほら、真奥さんが変なことしないように見張ると思えば、いいじゃないですか」

「……」

「だって、真奥さん遊園地なんて、きつと行ったことありませんよ？ 笹塚から新宿くらいまでしか歩いたことない真奥さんがアラス・ラムスちゃん抱えて東京うろつくなんて、不安になりませんか？」

真奥もそこまで世事に疎いわけではないが、千穂が本気でそう思っているわけではないと分



かっているので何も言わない。

「それに、まだアラス・ラムスちゃんが日本にいる理由って分からないままですよね？ もしサリエルさんみたいな悪い人が関係してたりして、真奥さんが一人でうろろうしてるときに、アラス・ラムスちゃん狙う人とか現れて、真奥さんが殺されちゃってもいいんですか？」

「……千穂殿は、本当に法律家に向いていると思う」

鈴乃が誰にも聞こえないように小さく呟いた。

アラス・ラムスが誰かに狙われていると決まったわけではないが、千穂が提示した可能性は、アラス・ラムスを巡る状況の解として、絶対に無いとも言切れないからだ。

「でも、千穂ちゃんは……」

「私のことはどうでもいいんです。アラス・ラムスちゃんが心配なら、できるだけ長い時間一緒にいて、全部終わったときに納得できるように頑張らしましょうよ」

はつきりきっぱりそう言い切った千穂は、腰に手を当てて恵美と真奥を見下ろし、恵美は観念したように項垂れたのだった。

「千穂殿！」

もう暗くなった笹塚の町。家路につく千穂を後ろから追いかけてくる声があった。

「あれ？ 鈴乃さん」

涼やかな下駄の音を鳴らして鈴乃が走ってくる。

「どうしたんですか？ 私何か忘れ物しました？」

「ああいや、そういうわけではないんだが」

うつすらと汗ばんだ額に張りついた前髪をよけて、鈴乃は尋ねた。

「私が言うのもなんだが……いいのか？」

「何がですか？」

「何がって……その、魔王とエミリアが一緒に出かけることが……」

「あー……真奥さんが遊佐さんとケンカした末に斬られちゃうって心配はあるかも……」

「いや、その、それもあるが、そういうことではなくてだな」

追いかけてきたくせに言いよどむ鈴乃に妙な親近感を覚えて、千穂は微笑む。

「心配ですよ。だって遊佐さん、口で言うほど真奥さんたちのこと、嫌ってないみたいだし」

惠美が聞いたら卒倒しそうな話だが、鈴乃は否定はしなかった。

「でも真奥さん、私のこと信じてるって言ってくれましたから」

「何？」

「……ふふ、なんでもないです」

千穂は口の前で人差し指を立てる。



「それより、多分今一番心配しなきゃいけないの、私じゃないですよ。今日も蓮佐さん、帰っちゃうんですよね」

「あ、ああ。さすがにまだ宿泊の決心はつかないと言っていたが……」

「じゃあ、蓮佐さん帰った後の方が大騒ぎになるかもしれませんよ？ 芦屋さんが」

「アルシエルが？」

鈴乃は首を傾げた。

「魔王様！ やはり危険です。お考え直してください！」

鈴乃が戻ると、千穂の予言が早くも的中していた。

「お前、落ち着けよ、いままら恵美だつて公衆の面前で俺を斬ろうとはしねえよ！」

「エミリアに危険はなくとも、佐々木さんの仰るように、最悪の可能性としてアラス・ラムスを付け狙う何者がいたとしたら……」

「だから落ち着けて！ それ言ったら出かけようが出かけまいが変わらんたる！ このポロアパートにドアも窓も鍵閉めて立て籠つてりや天界やエンテ・イスラの刺客から身を守れんのか？ ああ？ いるかいないかも分からねエ奴らにビビってこんな部屋でジツとしてたら、攻め滅ぼされる前に蒸し焼きになって熱中症で死ぬわ！」

「蟻の一噛み<sup>ありがた</sup>が城壁を突き崩すこともあります！」

「例えが逆だろー！ 紙の桶で砲弾防ぐようなもんだろーが！ それに延々引き籠らせて、アラス・ラムスが漆原<sup>ウラハラ</sup>みてえになつたらどうすんだ！」

「素養が違います！ アラス・ラムスは、ちゃんと食べ終わつた後に食器を片づける意思を見せて、私の所まで持ってきて、ごちそうさまと言います！」

「てことは漆原はアラス・ラムス以下か！」

「仰る通りです！」  
おつしや

「漆原!!」

「どんだけ理不尽だよ二人とも!!」

全部の窓が開け放たれているため全ての言い争いが丸聞こえで、鈴乃は頭が痛くなってくる。  
「何をバカげた言い争いをしているんだ。外に丸聞こえだぞ」

「すずねーちゃ、おかえりー」

大人たちの大人げない言い争いには我関せず、玄關先で新聞紙を引きちぎって遊んでいたアラス・ラムスは、鈴乃に向かってびっ！ と手を上げる。

「う、うむ、ただ……ただいま」

すずねーちゃ、という呼ばれ方に慣れないのか、また頬を赤らめてしまう鈴乃。

「すずねーちゃ、これ、せひおと！」

「ん？ どうした？」

アラス・ラムスは鈴乃すずのの浴衣ゆかたの裾すそを引っ張ると、古新聞のカラーページをひっぱって見せつける。そこにはファミリータイプのワゴンカーの広告が載っていた。

デフォルメされた都市の背景で大容量を謳うたった車の写真が載っており、トランクから大量の風船が空に飛んでいる、というデザインだ。

「せひおと！」

「ん……？ そ、そうか、うん」

アラス・ラムスが何を言ってるのかよく分からないが、鈴乃は生返事をして、

「エミリアはどうした、もう帰ったのか」

真奥まおくに尋ねる。

「そう言えば、ちーちゃんが出てって割とすぐな。すれ違わなかったのか？」

「ああ……しかしよくアラス・ラムスが泣かずに済んだな」

「恵美けいみと、いい子にしているって約束したからな。作戦決行は、今度の日曜日だ」

「魔王様、どうかお考え直しを……」

「ける、ねたく、まるくと……びなーいない。ばばー、びなーいない！」

「んー、どうした？」

アラス・ラムスは車の広告が相当気に入ったのか、紙面をばしばし叩たたきながら真奥を呼ぶ。

その後姿を見ながら、鈴乃は芦屋に小声で耳打ちした。

「……そんなに心配ならアルシエル、お前もこっつそりついていけばいいじゃないか」

鈴乃の提案に、なぜか顔を蒼白にする芦屋。

「割引券が余っているんだ。後をつけるくらいはできるだろう」

「し、しかし……」

芦屋はうめいて、突然険しい悪案顔になる。

「魔王様は招待券、エミリアは自腹で払うにしても、アラス・ラムスは小児価格だから割引率が低いし、半額とはいえ往復電車賃を考えると……時間番によつては外食もしなければならなし、そうなる……」

芦屋が何について悩んでいるかはエスパーでない鈴乃にも分かる。

「よく見るアルシエル」

鈴乃は出しっぱなしの割引券を手に取り、裏返して見せた。

「この遊園地に、入場料というシステムは無い。遊具それぞれに値段が設定されているだけだ。最悪後をつけるだけなら往復交通費だけでなんとかなるだろう」

「む……そ、そうか」

「なら行ってきたらー？ 僕はいつも通り留守番してるからさー」

芦屋が態度を軟化させた瞬間、押入れの中から明るい漆原の声。それを聞いて芦屋はすぐ

にまた厳しい顔をする。

「いやーダメだー 漆原貴様！ 私が長時間留守にするのをいいことに、ネット通販のジャンダル。でその日着の買物をする気だろうー」

「……」

静かになったのは、凶星を突かれたからなのだろうか。

「もし行けるようなら行つてこい。ルシフェルは私が見張つてやるから」

「ちよっ！」

「……どういう風の吹き回しだ」

襖の中からは抗議の悲鳴。芦屋はいぶかしむように鈴乃を睨む。

真奥はと言えば、無言でアラス・ラムスが散らかした新聞紙のゴミを片づけていた。

「私だつてここに住んでいるんだ。本当に何かしらのトラブルが起こったとき、ルシフェル一人置いておいて何か役に立つと思うか」

「……くっ……貴様っ」

「ちよっとちよっと言屋？ どうして痛いところ突かれたみたいなきになつてんのー？」

「実際問題アラス・ラムスの関係者が現れたとして、必ずしも千穂殿の言うような狼藉者とは限らない。本当の親が迎えに来たりすれば、穏便に事を進めて、然るべき場所にアラス・ラムスの居所を作れば良いだけだ。一方で懸念通りアラス・ラムスに危害を及ぼす相手が来る可能





「決まってるだろ」

真奥はアラス・ラムスの頭を撫でる。

車の広告に集中していたアラス・ラムスは、突然置かれた真奥の手に気づいて万歳をしながら頭張ってその手に触ろうとしていた。

「頑張って働く。それだけだ。俺がこいつらに飯食わせられなくなったら終わりだかん」

「もー……いや」

爆発した恵美は靴も脱がず、玄関にばかりと倒れ伏した。

アラス・ラムスは純粹に赤ん坊として可愛いとは思うが、考えてみれば自分とは全く関係の無い子であることに変わりはない。

「難しいなあ……」

うめきながら、放り出してしまったバッグを手繰り寄せて、上り框に腰かけてサンダルをベルトを外す。

「……何を弱気になってるの私は！ アラス・ラムスの母親代わりをするんであって、別に、別に魔王とふ、ふ、ふう、ふ……」

その単語だけは、たとえ独り言であろうとおいそれと吐くわけにはいかなかった。

「なるわけじゃないわ!!」

必要ないのに肝心なところをボカして独り言を最後まで言い切るとがっかりと項垂れ、汗のせいで首や額にまとわりつく髪を払う。

「……美容院とか行った方がいいのかなあ……」

無意識にそんなことを口走った瞬間、バッグの中で携帯電話が怒りん坊將軍のテーマをけたたましく鳴らしはじめた。

恵美は尻を浮かして飛び上がり、慌ててバッグをあさり電話に出る。

「も、もしもしっ」

「あ、もしもしっ? エメラダです」

「え、エメっ!? わ、私別に楽しみにしているとかじゃないからね!」

「な、なんですかいきなり。あ、もしかしてまだ仕事ですか?」

意味不明な恵美の弁解に、電話の向こうの旅の仲間、エメラダ・エトウ・ヴァは戸惑った様子でそう尋ね返してきた。

「あ、う、ううん、なんでも、だ、大丈夫よ、大丈夫」

「そ、そうですか、なんか声が上ずってますけど」

ぼんやりした喋り方のくせに、エメラダは基本的に色々と鋭い。そうでなければ西大陸の最大国家で位人臣を極めることなどではしないだろうが……。

「ちょっと心配になって電話したんですけれど」

「わ、私はちゃんと仕事してるわよっ！ 勇者の使命だって忘れちゃいけないわ！」  
 どうにも言い訳がましくなってしまう。

「……はいうちよつと安心しました」

「え？」

「私の。華<sup>はな</sup>が、また教会が不審な動きをしてたって言ってたんで、エミリアに何かあつちやいけないと思つて」

華とは、おそらく密偵の隠語だろう。そして教会の不審な動きとは鈴乃<sup>スズノ</sup>絡みのことだ。

「あー、安心して。確かに教会関係者が接触してきたけど、オルバみたいのじゃなくて話の分かる人だったから」

恵美<sup>エミ</sup>は、鈴乃の出現とサリエルの襲撃の件を、かいつまんで語る。

教会の重鎮<sup>じゅうしん</sup>が恵美の身近に現れたことを最初は警戒していたエメラダだが、彼女自身教会全てが敵だとも思っていないようで、鈴乃<sup>スズノ</sup>の出自や事件の概要を聞き、概ね納得したようだ。

「あっさり言いますけれど、結構危ないんじゃないですか？ その天使はまだそちらにいますよな？」

「そうなんだけど……ま、日本にも、強い人はいるのよ。サリエルに関しては当分気にしないで平気そう」

もちろん強い人とは、マダロナルドマダロナルド谷駅前店店長の木崎きさきのことである。

「でもま、結局のところ、どうして聖剣せいけんを取られなくちゃいけないかは分からないままなんだけどね」

「うーん、考えてみれば聖剣の由来について考えたことってありませんでしたわ。大昔に天から下されたっていうのも、教会がそう言ってるだけだし。私の方でもちよつと調べてみますわ」

「ありがと。でも、あなたも国の仕事があるんだから、無理はしないようにね。復興、うまくいってるの？」

「愚痴ぐちが止まらなくなりそうなんです、聞かないでください」

魔王軍が現れる前から、エンテ・イスラ五大大陸は決して良好な関係ばかり築いてきたわけではない。特に通商の要かなめにして取りまとめ役であった中央大陸がほぼ機能してないだろう今、各国が旧イスラ・ケントゥルムにとつて代わるべく絶賛政争中といったところなのだろう。

「でも、死神デスサイズ・ベルベルの異名いみよなをとつた異端審問官いたんしんもんくわんが、そんなちっちゃくて可愛らしい人だったなんてちよつと意外です。味方になつてくれそうな人なら良かったですわ」

エメラダは暗くなりそうな話題を避けて、明るくそう言った。

「小っちゃくて可愛いって意味では、あなたは人のこと言えないわね」

「城の中をうろついてると、新米の衛士に迷子の子供と勘違いされることはありませんわ」

鈴乃に負けず劣らず小柄で童顔な女性であるエメラダの悩みは、西大陸の大国セント・アイ  
（きまづいてはうじやうし）  
 レの宮廷法術士という職責に見合った威厳が無いことらしい。

「で、用はその話だったの？」

「あーそうだし、それもありましたけど、ちょっと聞きたいことあったんです。ライラ、  
 そっちに行つてませんか？」

「へ？」

思わぬ話題の転換に、惠美は驚く。

「少し前に、ちよつと城下の市場に行つてくるつて言つたまんまいつまで経つても帰つてこ  
 ないんです。本人があんまり自由に動き回れないつて言つてたんで、どこか行くならエミ  
 リアのところかなうつて」

「いや、それ以前に私、お母さんの願すら知らないんだけど……でも、ちよつと待つて、あな  
 たお母さんと一緒に暮らしてたの？」

「暮らしてるというか……その、エミリアに言うのはちよつとアレなんですけど、ぶっちゃ  
 けタカられてたというか」

「あ……そう」

惠美としては他に反応のしようもない。

「と、とにかく、そのベルとサリエル以外で最近こっちは来てな……あ」

恵美はそこまで言って、思わず声を上げた。

「あ、あのね、関係あるかどうかは分からないんだけど……」

恵美は、思い切ってアラス・ラムスのことを話してみる。もちろん真典が父親で自分が母親にされてしまっていることだけはボカしているが。

「リンゴの格好をした……小さな女の子ですか。そんな人や悪魔がいるって話は聞いたことありませんし、クレスティア・ベルを除けば、ここ最近で西大陸で大きなグートが聞いた気配もないですねー」

「そっか……そうよね」

エンテ・イスラとて広いし、グートを扱うことのできる術者も無数にいる。如何に国家の重鎮とはいえ、森羅万象に通じているわけではないのだ。

「ごめんね。ちょっと関係があるかと思ったんだけど、余計なこと言ったわ。まーその、一応気をつけておくわ。って言っても、今の私じゃ大したことはできないだろうけど」

「いーえー、結構マイペースな人だったんでー、もしかしたら今日あたりにも爆ってくるかもしれないしー、一応知らせておかなきゃと思ったただけでー。その子のこともー、怪しまれない程度に調べてみますー、それじゃあ失礼しますねー」

「あ、ちょ、エメ……っ」

そう言うとエメラダは、きつさと通話を終えてしまった。アラス・ラムスのことはともかく、

ライラに関しては、惠美は会ったこともないのである。気にしようにも相手の風体（ふうてい）が分からなければ気にしようがないではないか。

「……ま、いいか。お母さんだつていうなら、そんな危ないことはないだろうし」

だがあっさりとそう決着をつけて、改めてサンダルを脱いで部屋に上がる。

エアコンとテレビを同時につけて、椅子にだらしなく腰かけると、

「……やっぱ……美容院行つとこ。疲れた格好であいつの前に出るの、癪（しやう）だし」

片手で前髪をいじりながら、ぼんやり眩（くら）く。

奇しくもテレビのCMは、東京ビッグエッグタウンの鑑し物のお知らせを放映していた。

日曜朝の男の子向け特撮ヒーローと、女の子向けヒロインアニメのコラボというよく分からない組み合わせだった。

## ※

それから四日が、何事もなく過ぎた。アラス・ラムスに関わる何事かが起こると誰もが構えていたのに、驚くほど何も起きなかった。

唯一、部外者（べいがいしや）に事情を漏らした惠美のところにも、追加情報や連絡などは一切無かった。変化らしい変化と言えば、アラス・ラムスと比較されたのはさすがに堪（こた）えたか、漆原（うるは）が自



主的に食器をシンクに出して水につけるようになったことと、魔王城の住人が皆、アラス・ラムスのおむつを替える手際が良くなった程度のものである。

今日何もなければ、明日も何もないだろう、と思うのは平和ボケしている証拠であるが、育児と仕事に追われる日常は待ったなしだ。

平和ボケしようがなんだろうが、ある程度要領良くやっていかねば、早晚参ってしまう。唯一鈴乃だけはその例外に位置しているが、彼女一人では目の届く範囲にも限界がある。

結局それぞれの「何事もない」日常とともに四日が過ぎ、そして日曜日の朝。真奥と芦屋は、朝七時にアラス・ラムスに叩き起こされた。

ちやんと今日が「ままとのおでかけ」の日だと覚えているのだ。

嫌々取り決めた恵美との待ち合わせは、東京メトロの後楽園駅に昼の十三時。

恵美がどうしても、午前の勤務を抜けられなかったのである。

東京ビッグエッグタウンに行く決めてから今日までの、真奥の労働は奇烈を極めた。

同じ日にシフトに入っていた千穂の証言では、まるで阿修羅の如く八面六臂の猛烈な働きぶりであったという。

店長代理手当の枠の中にも一定の格付けがあるらしく、一円でも高い時給を目指す真奥は必死に働いた。

その分アラス・ラムスと過ごす時間は減ったのだが、鈴乃と芦屋が交代で散歩に連れ出した

リマグロナルドに連れていったりして、アラス・ラムスの機嫌はすこぶる上々であった。

恵美は、しばらく姿を見せていない。一度鈴乃の携帯に電話をかけてきて、アラス・ラムスと電話越しに会話した程度だ。

声だけでも恵美と分かること以上に、電話というシステムに疑問を持たないのはまだ幼いが故なのだろうか。

朝食を済ませて朝九時。

「ばばー。まだー？　ねーまだー？」

アラス・ラムスはどうにもこらえられないらしく、しきりに真奥の袖を引っ張る。その都度軽くごまかしながら、ふと真奥は何かを思い出して膝を叩いた。

「あー、そうだ。ここんとこ働きづめですっかり忘れてた。戸屋、ちょっと出かけてくるわ」

「どちらにいらっしゃるのですか？」

「広瀬さんとこ。自転車相談にな」

鈴乃に購入させたデュラハン式号は、買ってまだ一週間とたたない新品だが、一体何を相談しに行くと言うのだろうか。

「そりゃお前、こいつのことだよ」

「う？」

突然頭を撫でられて、アラス・ラムスは首を傾げた。

出かけたがるアラス・ラムスを宥める意味も込めて、真奥はアラス・ラムスと手を繋ぎ、徒歩で朝の笹塚に繰り出す。

笹塚通り商店街の自転車屋、ヒロセ・サイクルショップはちょうどシャッターを上げようとしていたところだった。

「広瀬さん！」

「ん……？ おお、真奥ちゃんおはよ。どうし……た」

まだぼんやりと寝ぼけ眼の広瀬は、真奥が引きつれている存在を目にした途端水に打たれたように目を開いた。

「広瀬さん、こないだ買った自転車、荷台とか色々つけられるんですよ？」

「お、おう……って、おいまさか……」

「わぶ」

わななく広瀬の反応を楽しむように、真奥はアラス・ラムスを抱え上げた。

「こいつが乗れるくらいの子供用の座席、ありますか？」

呆気にとられる広瀬に頼み込み、小一時間ほど色々なタイプの座席を見て帰ってきた真奥。

「やー、あそこまで予想通りの反応だと清々しいな」

まだ太陽の昇りきらないアパートの庭で、真奥は五千円で購入してきた前ハンドルに固定するタイプの小児用座席を、デュラハン式号に取りつける。

「魔王様もお人が悪い。それで妙な噂になつたらどうするのですか」

「大丈夫だよ。親戚の子を預かつたつてちゃんと云つてあるから」

芦屋は苦い顔をするが、真奥は取り合わない。

「……魔王様、一つお聞きしてもよろしいでしょうか」

「あ？」

「今さらな氣もしますが、どうしてアラス・ラムスを引き取ろうとこの決心なされたのですか？」

「氣にいらねえか？」

「いえ、そういうわけではないのですが、クレスティアに預けてもなんの問題も無かつたように思うので……」

「まー、なんだかんだで実際に世話してんの、お前と鈴乃とちーちゃんだもん。悪い」

「い、いえ、そんな……」

「ただし、最終的になんか問題起きたら、俺が責任取つた方がいいだろなって思つただけだよ。確証はまだ無いし、身に覚えももちろん無いけど」

真奥は言いながら、取りつけ終わつて残つたビニールや付属の六角レンチを一つにまとめる。「ちよつと氣になつちまつてな」

そう言つて自分の額をこつこつと叩くと、寂然としない様子の芦屋を残して部屋へ戻つてしまつた。

芦屋は二回の部屋と、真新しい黄色の小児用座席を交互に見て、首をひねりながら自分も部屋に戻った。

「魔王様……くれぐれも、くれぐれもお気をつけくださいませ！ 相手は勇者です、何をしてくるか、分かったものではありません！」

出かける真奥に必死に訴えかける芦屋。普通は逆ではないだろうか。

「ま、何かあつたら警備員に泣きつくから、安心しろ。俺に何かあつても、アラス・ラムスの安全だけは必ず守る」

真奥は悪魔の王的に全く安心できないことを言い置いて、魔王城を出た。

今までの真奥なら間違はなく笹塚から一駅隣の新宿まで歩いて百二十円の電車賃を浮かし『東京ビッグエッグタウン』の最寄り駅であるJR水道橋駅に向かうところだが、いかんせん今回は乳幼児連れである。素直に笹塚駅から京王新線で都営新宿線に入り、市ヶ谷駅で南北線に乗り換え、もう一つの最寄り駅である東京メトロ後楽園駅に向かうのが安全確実だ。

待ち合わせに遅れて難癖つけられたくはないので早く出たが、既に太陽は中天に差しかかり、容赦ない日差しを地上に投げかけている。

普段は通勤に使っている肩から提げたトートバッグの中には、アラス・ラムス用のコップや

ウェットティッシュ、おむつの替えに経口補水液まで準備は万端整っているのに、金をケチつて熱中症などの不安材料を増やしては本末転倒だ。

初めて乗る電車に、アラス・ラムスは終始興奮気味であつたが、地下に降りて窓の外が轟音に満たされたときには少々不安そうな様子も見せた。

京王新線新宿駅の地下ホームで乗つてきた老夫婦にしきりにアラス・ラムスが可愛いと褒められた後、直通の都営新宿線市ヶ谷駅で南北線への慣れない乗り換えをこなし、後楽園駅のホームに降り立った真奥は、地上に向かう長大なエスカレーターに乗った。

真奥がエスカレーター半ばに差しかけた頃、遠か下方の南北線ホームで、その後姿を心配そうに見上げる影があつた。

「……怪しい人影無し……魔王様、この芦屋が、陰ながら背中をお守り致します」

芦屋である。ヘタクソにも程があるこの尾行は芦屋である。変装のつもりの安物サングラスをかけたまま柱に背をつけ首だけ陰から覗かせている様は思い切り人目を引くし、そもそも尾行対象以外の周囲がまるで見えていない時点で、彼のミッションは失敗していたと言つて良い。「そんなことやつてる芦屋さんが一番怪しいですよ」

背後から呆れたような声をからかけられて、芦屋は身を凍ませる。

「その百均で買ったようなサングラス、やめましようよ。全然似合つてないし、死ぬほど目立ってますよ」

「うわわわわわっ！ さ、佐々木さん！」

珍しく帽子をかぶった千穂が突然自分の隣に出現したのを見て思わず飛びずさった。

「い、い、い、いつの間にそこに！」

悪魔大元帥（あくまのたいげんすい）のくせに、女子高生に簡単に背後を取られるようなことでいいのだろうか。

「同じ電車に乗ってました。鈴乃さんがメールで教えてくれたんです。……それより、いざ何かあったとき、真奥さんよりも芦屋さんの方が問題なんじゃないやありませんか？」

「ど、どういうことで……」

「芦屋さん、携帯持っていないでしょ。何かあったらどうやって連絡取るつもりですか？」

「あ、こ、公衆電話を探すつもりでしたが……」

「……そんなことだろうと思いましたが……連絡手段をきちんと確保していないってことは、真奥さん、芦屋さんが尾行してるの知らないんですね」

「あ、はあ、まあその、エミリアに見つかれば面倒なことにはなるだろうと思ったもので……」

その推測は間違いいではないが、ならどうしてもう少し尾行の準備を整えないのだろう。

「いざというときは私の携帯貸しますから、ほら、行きましょう。見失っちゃいますよー」  
千穂の強い語氣に促された芦屋は慌てて後に続くが、ふと氣になって尋ねてしまった。

「しかしあの……佐々木さんは何故……」

振り返った千穂の形相を見て、芦屋は己の軽率さをすぐに後悔した。

「納得はしましたが、気にはなるんです！」

「……失礼しました」

真奥を見失わないように千穂と芦屋はエスカレーターを駆け上がる。

恵美との待ち合わせ場所は、後楽園駅の丸の内線に近い改札だ。

真奥は構内図をしばし眺めてから、下に立たせたアラス・ラムスの手を引いて階段を上り始めた。後楽園の南北線ホームは、改札もかなり深い位置にあるためアラス・ラムスが疲れてしまうかと思いきや、息も切らさずむしろ真奥をせかすように短い手足を大車輪で動かしている。そんな様子を遠くから見て、思わず顔がほころんでしまう千穂だったが、

「……っ！」

「ど、どうされたんですか、佐々木さん」

地上階に出た所で、千穂は思わず息を呑んだ。

改札前で手持無沙汰にしながら、タイトなデザインの腕時計を見ている女性を発見したのだ。鐙の広い柔らかいデザインの帽子をかぶり、日頃はただおろしているだけの髪を綺麗にまとめ、シックなデザインのミュールを履いたその女性は、間違いなく恵美だった。

真奥と、そして芦屋も、未だに恵美を捕捉していないのは、普段の恵美の格好とあまりに違うからだろう。

「遊佐さん……意外に気合い入ってる」



髪をまとめている分すつきりしすぎる首回りを落ち着かせるために、大きめの飾りのネックレスまでつけて、千穂もつい見惚れてしまうほどに決まっている、大人の女性の姿である。

「む……まさか、あれがエミリアですか？ ふん、随分と戦いにくそうな姿をして、勇者の自覚に欠けているな」

千穂の視線を追ってようやく気づいた芦屋はそんなズレたことを言い出す。

「芦屋さん、今日の真奥さんの服って……」

「普段と変わりありません。エミリア相手にめかしこむ必要など皆無ですし、そもそもアラス・ラムスが来る以前から、漆原のせいで我が家の家計は火の車ですので、夏用の新しい服など買う余裕ありませんでしたから」

千穂の中で、お洒落をした真奥が今の恵美と並んでしっくりくるのはあまり見たくないというヤキモチ焼きの自分と、あの姿の恵美相手に全身着古したユニシロじやあいくらなんでもみっともないと、純粹に真奥のファッションを氣遣う自分が少しの間せめぎ合った。

どうやら真奥よりも、アラス・ラムスが先に恵美を見つけたようだ。アラス・ラムスに引張られて恵美を見つけた真奥の後ろ姿からは、特に何か動揺のようなものは見受けられない。

案の定、恵美はアラス・ラムスを見つけて笑顔になるも、すぐに真奥の全身をきつと眺めて仏頂面になる。

そんな一部始終を柱の陰から見ていた千穂と芦屋だったが、

「ふっふっふっふ、どうだねお二人さん？ 今日の遊佐恵美のコーディネートは」突然二人とも肩を掴まれて、身を凍らせて振り返る。そこには、

「あ……遊佐さんのお友達の……」

「す、鈴木さん!?」

千穂と芦屋の肩をがっしり掴んで、くぐもった笑いを浮かべる鈴木梨香がいた。

この世界の女性は、悪魔の背後を取るのがやたらとうまい。

「こ、こんなところで何してるんですか?」

千穂が梨香と、遠くの恵美とを交互に見る。

「いやいや、それこっちこそ聞きたいし。千穂ちゃんと芦屋さんが揃ってなーにしてんのかなーって思ったら、案の定、視線の先には恵美と真央さんがいるじゃないの。こりゃ、同好の士としては声かけないわけにはいかないと思ってさ」

そう言えば、と芦屋はふと思いつく。

今日の待ち合わせがこの時間になったのは、恵美に午前中勤務があつたからだ。退勤後に永福町に帰る時間など無かつたはずだから、恵美はあの姿のまま会社に出動したことになる。

「やー、びっくりよビックリ。恵美があんな格好して会社来るなんて今まで無かつたもん。こつからだと分かりにくいかもしれないけど、昨日間違ひなく美容院行つたわあれは」

わざとらしく額に手をあてて言う梨香は、殊更に千穂の反応を窺うような話している。

「そ、そうなんですかっ！」

「んー、気になるの？」

「そ、それは、その、な、ならないって言ったら、その、あの……」

暑さもあいまって千穂は顔を真っ赤にしよう。その想像よりずっと分かりやすい反応に、先に折れたのは梨香だった。

「ふふ、ごめんごめん。ちょっとからかいすぎたかな。千穂ちゃんが心配するようなことなんにも無いわよ。あれは恵美が意地っ張りなだけだから」

「……へ？」

「恵美も真奥さんも、基本的にあんま仲良くないんでしょ？ あれは相手にナメられないための単なる武装よ。ただまあ」

梨香はほんの少しだけ視線をずらして、真奥を見る。

「気合い入れすぎると、不思議と外すのよねー。これは完全に自然体の真奥さんの勝ちだね」  
そのとき恵美と真奥とアラス・ラムスが、東京ビッグエッグに向かって歩き出した。

千穂が振り返るとアラス・ラムスが「ばば」と「まま」に挟まれる格好で手を繋いで歩く後ろ姿が見えて、心の中が思い切り動揺してしまう。

「さあつてと」

梨香はにやりと笑った。

「どうします？ お二人さん」

東京ビッグエッグタウンは、プロ野球セ・リーグの巨神軍本拠地である東京ビッグエッグの外周を囲むように展開されている。

後楽園駅に隣接するショッピングビル・ラグーンからビッグエッグホテルの周辺まで、様々なアトラクションが展開されている、都心では唯一と言っていい大型複合アミューズメントパークだ。

入場ゲートで区切られた敷地というものはなく、一つ一つのアトラクションに設定されている料金を払うことで、通りすがりに気軽に利用できる体裁になっている。

ラグーンや後楽園駅と反対側のモールも、幅広い年齢層のニーズに答えるショップが入居しており、ショッピングスポットとしても人気がある。

また土日祝日に行われるヒーローショーは、この施設特有の大きな売りの一つだ。

全ての乗り物にフリーで乗れるワンデーパスポートとは別に料金を取られるが、当代で人気を誇る特撮ヒーローたちが集結するステージは、毎公演大勢の子供たちでにぎわっている。

そんな誰もが笑顔になるアミューズメントパークの中で、笑い損ねた梅干しのような複雑な顔色の真実と恵美が、アラス・ラムスに引き連れられて歩いていった。

ラグーンの外二階にある池では決められた時間ごとに音楽がかかって、噴水で織りなす水の舞が見られる。三人が通りがかった際、おりしも丁度その時間であり、幾筋もの噴水が様々な形を描いては消える様子を、

「お………！」

アラス・ラムスは口を開けたまま目を輝かせている。

「ちよつと」

「あ？」

その背中を見ながら、早くも暑さにやられ気味の真央は恵美の声に気づるげに返事する。

「今日はかなり日差し強いけど、ちゃんと日焼け止めは塗ってあげてるんでしょうね？」

「あー、その……きちんと医者に処方してもらえば問題ないそうだが……」

漆原に調べさせたところ、赤ん坊への日焼け止めはドラッグストア等で通常販売されているものより、医師処方の方の方が将来の肌トラブルを起こしにくいという意見が多かった。

だがアラス・ラムスには真央の健康保険が適用できない。無保険診療を受けさせると、日本の常識的<sup>（常識的）</sup>社会生活上の意味で、魔王城に後々問題が発生しかねず、適正な日焼け止めの用意ができなかったと言うのだ。

「ならせめて帽子を貰うとか他の手を考えなさいよ。ラグーンに服屋さん入ってるから、先にそっち行くわよ。自分で引き取るって言ったなら、責任持つてそういうところ真剣に考えなさい」

有無を言わさぬ惠美の厳しい口調。真奥もこればかりは神妙に返事するしかない。

「ああ、面目ねエ。……どうだ、アラス・ラムス、楽しいか？」

「お……お……お……」

「噴水に夢中か、そうか」

そんな三人の様子を、ラグーンの外二階を見下ろせるテラスから窺う芦屋と千穂と梨香。

「へー、意外と普通に家族してる。惠美本当になつかれてんのねー」

「……か、可愛い」

噴水を食い入るように見つめるアラス・ラムスを見て千穂は思わずため息を漏らす。

芦屋はと言えば、周囲や真奥の安全に気を配るのほもちろんだが、それ以上に真奥が無用な

散財をしないだろうかと目を光らせることも忘れていない。

そんな尾行者達の様子には気づかず、そもそも尾行がついてる自覚すら無く、噴水ショーを見終えた三人は、ラグーンのショップでアラス・ラムスの帽子を探すべくまた手を繋いで歩いてゆく。

そのあとを少し距離をあけてついていく三人。

「お、ユニシロだ」

真奥はラグーンの館内案内板に馴染んだロゴを発見するが、

「却下。どうしてあなたはそう、ユニシロばかりなの」

恵美にすぎなく一蹴<sup>くわく</sup>される。

「だって安いし面倒ないから……」

「あのね、たまにはもつと他の店見てみなさいよ。どれほどのもの想像してるか知らないけど、そんなに高いものじゃないから」

「えー」

「えーじゃない！ アラス・ラムスがあなたみたいな貧乏性に育ったらどうするの」

「経済的でいいじゃないか」

「……行くわよアラス・ラムス。こんなのはっときましょ」

「ほけきよ？」

恵美に手を引かれながらおつかかなびつくりエスカレーターに飛び乗り、ユニシロを含め色々なアパレルショップが入った階に到着する。

「んー……まだこの辺だとちよっと大きいのかあ」

恵美は子供服をいくつか手に取ると、アラス・ラムスの肩にあてがって唸<sup>うな</sup>る。

「でも、すぐ大きくなるだろうし引きずったりしなければ大きいのもいいのかな」

そう言っただけでちらりと真実を見る。

「……何も言わないのね。すぐって言ったって何ヶ月か後のことなのに」

「ツツコミ待ちとか勘弁しろ。そこまで俺はお前と積極的にコミユニケーション取る気がねえ」

「いつまで世話する気なの、この子」

話す間も、恵美は手早くアラス・ラムスに似合いそうな服をいくつか見繕っては肩に当てる。  
 「……さあな。今日にも本当の親が現れるかもしれねえし、もしかしたら嫁に出す日まで世話しなきゃならねえかもしれねえ」

「嫁って……しつこいようだけど、あなた本当に日本に骨埋めた方がいいんじゃないの？」

「……お、これなんかいいんじゃないか。肩のとこまで日よけできそうだ」

そう言つて真奥が無造作に手に取った麦わら帽子は、意外にもアラス・ラムスによく似合つていた。

「私が言うことじゃないかもしれないけど、残してきた部下とか心配にならないわけ？」

それに対する真奥の返答は簡潔だった。

「ああ、それに関しては、もう諦めてる」

「……え？」

「リボンがピンクと黄色があるのか。アラス・ラムス、どっちがいい？」

「んー、まるくとー」

アラス・ラムスは黄色いリボンの帽子を指差す。

ある意味とても魔王らしい冷酷な発言に恵美が二の句を告げないと、それに呆れたように真奥は肩を竦めた。



「お前、エメラダやアルバートにオルバや鈴乃（すずの）がはいはいこっちに来てるのがどういうことか分からねえのかよ」

真奥はアラス・ラムスが選んだ麦わら帽子の値札を何気なく見て、思わず目を刺く。

「一年は、ちっと長すぎたな。エンテ・イスラに攻め込んだ魔王軍の残党なんぞ、とつくに根絶やしにされてる。そうでなきゃ人間世界の最重要戦力のあいつらが、呑気（のんき）に異世界旅行してるはずがない」

表向きはルシフェルも含め四天王（してんおう）は全滅していたわけだし、魔王軍の指揮系統は完全に壊滅していたのだから、理解できない話ではないが、

「そ、そうなの。でも、呆気（あきげ）ないものね。トップがいなくなったただけで瓦解（わかい）するなんて、所詮（しよせん）は悪魔ってことかしら」

惠美としては同情するつもりは全く無いので、いつも通りに嫌味（いんぷい）の一つを飛ばしたわけだが、「グウの音（おと）も出ないな。奴ら、本当に俺がいなきゃ何もできねえんだ。でもな、ロクに力を取り戻さずに帰ったって下剋上（げきじやう）に会うだけだし、かと言って」

真奥は心を決めたらしく、惠美とアラス・ラムスに背を向けて、帽子を手にレジへ向かう。

「例え今の俺が、魔王の力を完全に取り戻したって、世界征服はきつとできねえ」

「そ、そりゃあね、そもそも悪魔が全滅したんじゃ、魔王を名乗ることもできないわけだし」

「悪魔が全滅だあ？ お前何言ってた」

真奥は心底惠美を馬鹿にしたような顔で振り向いた。

「お前ら人間が戦争するとき、国民が一人残らず一つの戦場に出向くか？」

「え？」

惠美は一瞬、何を言われているのか分からなかったが、真奥はそれ以上取り合わずにレジに向かう。

すぐに使うのでタグを切り離してもらい、戻ってきてアラス・ラムスにかぶせてやった。

「むふー、かわいい？」

アラス・ラムスは備えつけの鏡に自分を映しながら、ちらちらと真奥を見上げてくる。

「おう、可愛いぞー」

先ほどの空気もどこ吹く風、真奥の顔はだらしなく緩んでいる。

「おい、子供服はまた今度にしようぜ。それより丁度昼飯時だ。今のうちなら、アトラクションは空いてるんじゃないのか？　おいアラス・ラムス、どんなのに乗りたい？」

「あれ、ばばあれー」

ラグーンの窓から見えるフリーフォールを指差すアラス・ラムス。

「うーん、多分アラス・ラムスだと年齢か身長のとつちかでひっかかるだろうなあ。ま、ちよつとぶらぶらするか」

惠美は煙に巻かれたような顔のまま、二人の後を寂然としない顔でついていく。

そしてその後ろから現れた三人は、ショップと真奥達を交互に見る。

「帽子一つ買うのになんて憂鬱な顔してたのよあの二人は」

「さあ……もしかして、高かったんじゃないですか？」

梨香と千穂の会話を聞いた芦屋は、何気ない調子で真奥がアラス・ラムスに買ってやった物と同じ形の帽子を手に取り、

「にっ………せん、ごひやく、えん」

窒息しそうな勢いでうめく。

「ば、バスの招待券分が一発で吹き飛んだ……」

「あれ？ 芦屋さん、なんか顔色悪いよう？ 何か飲む？」

「は、ははは、いえ、お、お気遣いなく、それより、行きましょう、はははは」

引きつった笑いを浮かべて帽子を元に戻し、梨香を促して歩き出す芦屋。千穂は「この夏の新作！」と銘打たれた帽子を手にとって値札を見、そっと涙を拭いて何も言わずに元の場所に戻したのだった。

「でも、なーんか面白くないなあ。意外と二人とも大人。トラブルになったら介入してやろうかと思っただけど、やっぱ子は鋸なのかねえ」

「え？ 鈴木さん、野次馬しに来たんじゃなかったんですか!？」

千穂は思わず正直に尋ねてしまい、

「いかんねと千穂ちやうん、お姉さんをみくびつてもらっちゃあ、ええ？」

笑顔で梨香にはつべたをむにむにいじられてしまう。

「はひ、ふひまへん……」

「それが無いとは言わないけど、どうせ休みもらってもヒマだしね。アフターケアのために観察に来たのよ」

「あふはーへあ？」

「そ。だって真奥さんの親戚でしょ？ あんだけなつかれてる子がいなくなったら、結構ダメージでかいよ？ そんなとき、ある程度事情を理解してる奴が飲みにつき合ってあげられるだけでも違うじゃん？」

「ゆっ……そ、そうですわ」

やつとはつべたを解放されて、千穂は思わず両手で自分の顔を挟む。

「あとはい、やつぱり恵美がどういう顔して男と出かけるかも興味あるし？」

「や、やつぱり野次馬じゃないですか！ 私つねられ損です！」

「違うわよ千穂ちゃん、そういうときは出歯亀って言うの」

「もつと悪いですよ！」

「そういう千穂ちゃんはどうなのよ。別に真奥さんの身内でもないのに、なんでこそこそあつつけてるのかなあ？」

「わ、わ、私は別に、その」

「はれ、誰にも言わんから、お姉さんに話してみたまえよ君の事情を」

「……お二人とも楽しそうで何よりですわ」

後ろでじゃれ合う女二人に少々げんなりする芦屋。

「まあまあ、そうおっしやりなさんな」

「わっ！」

突然肩を引き寄せられて、芦屋はうめく。

「まあ芦屋さんだって会社潰された遠因の恵美に含むところがあるのは分かるけど？ 今は別に商売敵（あいて）でもなんでもないわけでしょ？ 別に取って食われるわけじゃなし、そんな真剣になる必要ないんじゃない？」

徹頭徹尾商売敵だし、取って食われるどころか斬って捨てられてもおかしくない間柄なのだが、もちろん梨香にそんなことは言えやしない。

「私は芦屋さんに、夏目漱石（なつめ そうし）を読むことをお勧めするわ」

「な、なんですか突然！」

「んー、肩肘張って生きてそうな芦屋さんにぴったりの言葉がぼこぼこ出てくるわよ？」

困惑する芦屋の顔を楽しそうに見てから、梨香は芦屋を解放する。

人の懐（ふところ）の深いところ目がけて一足飛びに入り込んでくる関西OLのアグレッシブな所業に、

千穂も芦屋も翻弄されっぱなしだ。

「でもま」

沢も分からず顔を見合わせる芦屋と千穂には聞こえないように、梨香はぼつりと呟く。

「小器用に生きてる野郎よりは、そういう方が好きだけどね」

アラス・ラムスは、色とりどりの風船を手につけてご満悦であった。

どうやら華やかな色合いのものに惹かれるらしく、道々真奥は何度も風船をねだられた。

「あー……娘に逆らえないダメババの未来を見た気がしたわ」

恵美はラグーンで配布されていた簡易団扇で顔をばたばた仰ぎながらミネラルウォーターで喉を潤しつつ呟いた。

小さなメリーゴーラウンドの馬車に乗って歓声を上げているアラス・ラムスと、一緒に乗っているまんざらでもなさそうな真奥の顔を見て、恵美はなんだか全てを投げ出してエンテ・イスラに帰りたい気分になる。

恵美は先ほどの真奥の言葉が、ずっと耳にこびりついて離れなかった。

何が気になる、というほどのことではない。

悪魔が人間勢力に駆逐されたからといって喜び以外の感情が湧くことはないし、むしろそう

なって当然だという思いがある。

肝心なところで本心を隠す真奥のことだから実際はどうか分からないが、表面上部下の悪魔達が全滅させられていると予測している彼の顔に、悲しみや怒りは見られない。

だが、真奥のあの一言が、今まで自分が当たり前だと思っていた何かに対して警鐘を鳴らしている気がしてならないのだ。

息をするように、水を飲むように当然だと思っていた前提を間違えていたような……。

「……い……おい恵美っ」

「……え？ あ、ごめん、何？」

考え事をしていたら、いつのまにかメリーゴーラウンドから降りてきていた真奥がすぐ真横に立っていた。

「どうしたんだよばーつとして。暑さにやられたか？」

「そ、そ、そんなわけないでしょ！ て言うか、いきなり近い！ それより何!？」

「アラス・ラムスが、コレ見たいらしいんだが」

真奥が指差したのはインフォメーションボードに張られていた、東京ビッグエッグタウンの名物とも言える、ヒーローショーの舞台告知のポスターであった。

先日のテレビCMでもこの公演のことは放送していたが、それよりも気になることがあった。

「……あなた、テレビ買ったの？」

五色のカラーに分かれた特撮戦隊と、カラフルな魔法少女が同時にクロスオーバー出演するというのがウリらしいこの公演。快晴の日曜という日和も手伝ってなかなか盛況のようだが、問題は、いずれのテーマも、日曜朝の子供向けテレビ番組が出演であるというところだ。

「テレビ以前に、アンテナすらアナログのままだ」

真奥からは、ある意味予想通りの答えが返ってくる。

「ただ、アラス・ラムスはこういうやたらカラフルなものが好きみてえなんだよ。なんか思うところがあるのか知らんが」

アラス・ラムスは舞台外に掲げられている、特撮のヒーロー戦隊とアニメの魔法少女達がタッグを組んで描かれている、冷静に見るとシュールな絵面のポスターに釘付けになっていた。

「別に見るのは構わないけど、パスポートとは別料金取られるみたいよ？ 大丈夫なの？」

「……………後で俺が芦屋に謝れば済む。どうせもう、帽子買っちゃってるし」

結構長い躊躇いの後、真奥はなんとかそう言い切った。自分で稼いでいるのにそういうところで主夫に頭が上がりないのは何故なのだろうか。

「…………仕方ないわね。アラス・ラムスの分は私が出してあげるわよ。自分の自分でなんとかしなさい」

「恩に着るっ……………」

軽々に魔王が勇者に向かって頭を下げるものではない。



だが、恵美とすれば、魔王がわざわざ恩をかぶってくれるのだ。鈴乃との一件で芦屋に作ってしまった借りを返すには十分だろう。ダメ押しに真奥の分まで出してやろうかとすら考えたが、さすがにそれはやりすぎだと自重する。

恵美はすぐそばにあったチケットブースに行くが、何やら係員が神妙な顔で頭を下げてきた。「すぐの時間の公演分もう売り切れだって。次のまで二時間もあるみたいよ？」

恵美は真奥を振り返って言う。

「マジか。じゃあ、次の分のチケット買っておいて、飯でも食いにいくか？」

「それもそうね。じゃあ大人二枚に子供一枚で」

恵美がチケットを全員分購入し、

「ほら、大人一枚分千五百円」

「はい、確かに」

真奥が財布からお金を取り出して恵美に渡しチケットを受け取ると、アラス・ラムスを抱え上げ、場内地図を見て適当な飲食店に向かって歩いてゆく。

「なんか仲良くなってるわねーあの二人」

「……」

「……」

梨香はもちろん、芦屋と千穂の反応が面白くてこんなことを言っているのである。

「しっかしヒーローショーかあ。子供の頃見たかったな。どうするの？ これ入る？」

「さすがに……」

「入っても、どうしようもない気が……」

「え？ なんで？」

千穂と芦屋が及び腰なのを見て、梨香は首を傾げる。

「だ、だって子供向けですよ？ 私達の取り合わせて入っても仕方ない気が……」

「千穂ちゃん古いな考え方が。二世帯は古いな」

「ええっ!？」

「今はねー、意外と大人だけでもこういうの見るのよ。一昔前までは特撮ヒーローの変身前のイケメン俳優目当てでお母さんたちが盛り上がったなんて話あるけどさ、ほら、こーゆーステージって、あらかじめそういう声録ってあるじゃない。そういうの目当てに来るんだってよ？」

「えええええ？」

「あとこっちのアニメは……」

「私も小さい頃は見てましたけど、最近じゃ種類が増えすぎて……プリビュアですよね？」

戦隊ものと通じるところのある、カラフルで可愛い衣裳を纏った魔法少女達が戦う人気

アニメの流れをくむシリーズアニメ「魔法少女プリティ・ビュアーズ」。最近では女の子向けアニメの代表格として毎年劇場版が制作されているほどの人気作だ。

「アニメってだけで一定の需要があるし、最近声優とか結構メジャー人気出てるでしょ？ 大人になってもこういうのが大好きな男の人たちが群れを成してるって雑誌で見たわ」

「へえ……老若男女、世代を問わずに人気があるっていうことなんですね」

「いえ、あの、そういう意味ではない気がするのですが……」

ズレたところで感心している千穂と、恐る恐る突っ込む吾屋。すると、丁度これからやるステージが始まったらしい。

さすがに入場料を取るだけあって外から覗ける場所はないが、それでも聞こえてくる歓声には、明らかに子供のものではない怒号が混じっていた。

梨香は表情が固まる千穂を見て苦笑する。

「じゃあ私達も、ご飯食べに行きましょうか」

梨香は、ステージの入り口真正面の、オープンカフェ形式のイタリアンを指差した。

二時間後、真奥達はヒーローショーステージの比較的前の席に、三人並んで腰かけていた。

「結構いい位置だな。こんな簡易ステージなのに、全席指定なんだ」

真奥は長いベンチに腰かけて、きょろきょろと周囲を見回す。

「自由席にすると、子供がステージ見られなくなることもあるらしいわよ」

「は？ どういうこっちゃ」

「世の中色々な人がいるのよ」

指定席とはいえ映画館のように肘<sup>ひじ</sup>かけで仕切られているわけではないので、どうしても左右の人と肩肘を寄せ合うことになる。

アラス・ラムスがいて間に荷物<sup>もの</sup>を置いているものの、どうにも恵美<sup>あみ</sup>は、真奥<sup>まおく</sup>があまりに近い場所に座っているのでやりにくい。

人ごみの中とはいえ、長時間真奥と密着した状態など耐えられるはずもない。

この回のステージも満席らしく、直射日光と相まって外より体感温度<sup>たいかんとく</sup>が二、三度は高い。そうこうしている間に突然騒<sup>さわ</sup>がしいテーマ曲が大音量でかかり、ステージ上で突然煙と花火<sup>はなび</sup>が散る。戦隊ヒーローから先に演目が始まるようだが、今の大きな音でアラス・ラムスはびくりとのけぞってしまふ。

戦隊ヒーロー番組にはテーマがあり、合体メカや必殺技などがテーマに沿って設定されているのだが、どうやら今の戦隊ヒーローは忍者が一つのテーマであるらしい。

ステージの真ん中に二階建てくらいの高さの大きな木のオブジェが設置されていて、そこから五人のヒーローが、一人一人ポーズをつけながら飛び降りてくる。

「へえ、結構高いところから降りるんだな！」

「……何を感じてるのよ魔王のくせに」

「でも、あんな色の忍者っているか？」

「子供向け番組にヤボなこと言わないでよ」

行動の端々に忍者を意識したアクションが挟まるが、蛍光色のカラーリングが施された忍者など、目立って目立って仕方あるまい。

中央の樹のセットはどうやらこのあとのプリビュアのステージにも利用されるらしく、そこらは「自然の力」なるものをエネルギーに戦うらしい。

「へえ！ 結構いい動きするじゃん！ あいつら普通に軍隊入って戦えないのかな」

忍者部隊のはずの彼らが正面切って戦う敵は、どういうわけか宇宙人らしい。

ボスキヤラと思しき宇宙怪人が現れると、場内の子供たちの中から一際大きな歓声上がる。

「おお、頑張り悪者！ 人気あるじゃないか」

「あのね、あれが人気あるんじゃないかって、あれを倒すこれからが人気あるの」

「お前こそヤボなこと言うんじゃないよ、おいアラス・ラムス、お前どっちが……」

アラス・ラムスに話題を振ろうとして、真奥は異常に気がついた。

日頃表情豊かで色鮮やかなものが大好きなアラス・ラムスが、無表情にステージを見つめたまま茫然としている。

「おい、アラス・ラムス？」

真奥の声で、惠美も異常に気づいたようだ。

「どうしたの？」

「いや、何か、ぼんやりとしてて……どうしたアラス・ラムス、具合でも悪いのか？」

「せ……おと」

「え？」

「おちちやった……」

「何、どうした？」

周囲が騒がしいので、アラス・ラムスが何かを喋っていることは分かって、内容が全く聞き取れない。

「ばば、あれ、せひおと」

「なんだ、どうした？」

「きから、みんなおちちやった。ままがあたしをつれて、にげた。まるくともういない」

「き？ まるくと？ なんの……わっ！」

真裏は思い切り慌てた。

一体何が引き金になったのか知らないが、突然アラス・ラムスの額に、三日月の紋様が浮かび上がったのだ。

それはまるでクリスタルのような質感を持った紋章で、アラス・ラムスの瞳や一筋の髪と同じ紫色の光を内に秘めていた。

「……何、それ」

真奥はアラス・ラムスに帽子を目深にかぶせるが、恵美にもそれを見られてしまう。

「……お前気づかなかったのか。一番最初、こいつがアパートに現れたときも、同じ紋章が出てたんだよ。すぐに消えたがな。おい、アラス・ラムス、しっかりしろ」

「ちょっと、揺らしちゃだめよ。とりあえず、ここを出ましょーあの、すいませんー 子供が気分悪くなっちゃって……」

恵美は真奥の返事も聞かず、アラス・ラムスを抱えると大盛り上がりの人ごみをかき分けて会場の外に出る。

係員を呼ぶことも考えたが、額の現象のことを聞いたただされたら言い訳ができない。

恵美は、真奥が二人分の荷物を抱えて追ってくるのを確認すると、未だ虚空を見つめて何事かをぶつぶつと呟いているアラス・ラムスを抱え、とにかく涼しくて落ち着ける場所を探す。

額に手を当てると、熱が籠っているとカ極端に汗をかいているということもない。熱中症ではなさそうだが、原因であるらしい額の月の紋章が一体何を意味するのか、恵美にはさっぱり分らない。

冷房を求めてラダーンの建物に飛び込むと、折よくベンチが一つ空いていた。そこに腰かけてから、

「魔王、何か飲ませるもの買ってきてー」

後から必死に追いついてきた真奥に言う。

「こ、これじゃだめか？」

真奥がバッグから経口補水液を取り出すと、

「貸して！」

恵美はそれをひったくり、アラス・ラムスの口にあてがう。

「あと、これとは別に冷たいの！ 飲ませるんじゃないくて、首とかに当てて冷やすから！」

「お、おう！」

狼狽しながらも恵美の指示にテキパキと従う真奥が、自動販売機を求めて走り去ったときだった。

「大丈夫？」

アラス・ラムスを抱える恵美に、声をかける者があつた。

恵美が顔を上げると、白いロングワンピースに白い鍔広の帽子をかぶった美しい女性が立っていた。

吸い込まれそうな色を満たした瞳で、恵美とアラス・ラムスを見下ろしている。

「あ、はい、大丈夫です。熱中症じゃないみたいですから、ちょっと気分悪くなっちゃったんだと……」

「……………まよ？」



すると、突然今まで呼びかけに答えず虚空を見ていたアラス・ラムスが、何かに気づいたように声を出した。

恵美は顔を明るくして、アラス・ラムスの顔を覗き込む。

「ここにいろわよ。大丈夫？」

「うん……」

顔色は変わらないのに、熱に浮かされたような声。恵美は汗を拭ってやるふりをして、アラス・ラムスの顔を随うとした。すると、

「ちよつと、いいかしら」

突然白い女性が目の前にかがみ込み、アラス・ラムスの頭の上に手をかざす。

「な、何をするんですか」

「黙ってて、すぐ済むから」

決して強い語気ではなかったはずなのに、恵美は相手の言う通り黙ってしまう。かざされた女性の左手薬指には、小さな宝石が嵌まった指輪があった。

太陽の加減で、それが一瞬紫色に光ったと思ったそのとき、

「……う……う!?」

アラス・ラムスが、突然びよこんと起き上がったではないか。

「ん? う? あれ? ばば?」

まるで悪夢から目覚めたかのような仕草で、周囲をきょろきょろと見回すアラス・ラムス。惠美が何より驚いたのは、起き上がった拍子に帽子が脱げてしまったのだが、額の月の紋章が綺麗に消えていたことだ。

「あ、ままわぶっ！」

惠美は一瞬の判断でアラス・ラムスを抱えて自分の後ろにかばうようにし、魔揚に立ち上がった白い女性を睨み上げる。

「そう警戒しなくて大丈夫よ。私はあなたの敵じゃないわ」

白い女性は泰然としたもので、スカートの裾を払うと小さく微笑んだ。

「そしてその子の敵でもない……。アラス・ラムス、よく無事に育ってくれたわね」

「!!」

惠美は、この女の前では一度もアラス・ラムスの名を呼んでいない。

「何故、その名を……」

惠美の問いに、女は艶然と微笑む。

「知ってるわ。大事な名前だもの」

その顔を見たとき、惠美の胸が一気に高鳴った。

三日前のエメラダとの電話が頭の中を駆け巡る。

アラス・ラムスの正体を知っているかのような口ぶり。

まさか、この女は……。

譽さとは違う昂揚を覚えた惠美だが、微笑む女の顔にすぐに真剣な色が浮かぶのを見る。

「気をつけなさい。多分今ので、その子の顔のイエソドの欠片の存在に気づかれました。」

その子の敵は、きつとやってくる。ガブリエル麾下の天兵連隊が、動いているわ」

「イエソドの、欠片？ ガブリエルって……待って、まさかあなた……」

「おーい、惠美！ 買ってきたぞ！」

惠美が得も言われぬ存在感を覚えて女性を問いたたそうとした瞬間、向こうからペストボルトや缶ジュースを抱えた真奥が大声を上げて走ってきた。

惠美がほんのわずかに気を取られたその瞬間、

「まま……」

「!!」

白い女性はいなくなっていた。

まるで白昼夢を見ていたように、忽然と消えたのだ。

「自販機がすぐ見つかった良かった。これ……ん？ あれ、アラス・ラムス、気づいたのか」

「ばば、おかえりー」

「あ、お、おう、なんだあ？ 無駄足か。いや、良かったけど、でもどうしたんだよ」

「なにがー？」

「んと……ああ、うん、まあいいや。おい、恵美どうしぶげえっ！」

「どうしてあなたはそう空気が読めないのいつもいつも!!」

「な、なんだよー 俺が何したってんだー い、いきなりグーでお前……」

「ままこわいー……」

「あー いたいたー 鈴木さんいましたー！」

「おー、よく見つけたね千穂ちゃん！ 愛の力だ！」

「だ、だからやめてくださいってー！」

「まったく……オリーブオイルでお腹壊すなんて、声屋さん意外と軟弱ね。トイレ待ちのおかげで随分操すのに手間取っちゃったわ」

「め、面目ない……」

イタリアンレストランのオリーブオイルに迅速な反応を示した声屋のお腹のおかげで、千穂たちは真実と恵美とアラス・ラムスを見失っていた。

ヒーローシヨーステージから出てくる客の中にいないのであちこち歩き回った結果、アラス・ラムスを抱いて、真実を引きずるようにして歩く恵美の後ろ姿を千穂が発見する。

どうやら恵美は、大観覧車ビッド・ゼロに向かっていているらしい。

「観覧車乗るのかな？　なんか恵美が積極的だけど……」

「この時期の観覧車って、暑そうですよね」

「あの観覧車は全ゴンドラにエアコンを標準搭載してるのよ。日焼け止めさえ塗れば結構快適」  
「ぜ、贅沢なっ！」

エアコン完備に物申しているのは当然芦屋である。

「にしてもー、恵美ったら空中の密室に積極的に真奥さん連れ込んで一体何を……」

「鈴木さん!!」

「千穂ちゃん顔怖いわよ。冗談だってば」

梨香は梨香で分かってやっているのだからタチが悪い。

「でもま、一応追いかけましょうか。何かあるわけじゃないだろうけど。芦屋さん大丈夫？」

「はい、なんとか……」

やや青い顔をしながらも手を上げて頷く。

日頃粗食ばかりで、おまけに夏場のことなので、たまに濃いイタリアンなど食べてしまえば夏バテで弱った芦屋の胃など一撃である。

「でもま、二人ともどんなつもりで来たか知らないけど、大変なことは無さそうじゃない？」  
何も知らない梨香の楽天的な言葉に、千穂も芦屋も、複雑な表情で顔を見合わせるしかなかった。

「いらっしやいませー！ 大観覧車ビッグ・ゼロによう……こ、そ」

観覧車の入場ゲートでチケット確認をしていた係員は、險悪さが尋常でない子連れの新夫婦が現れて、思わず息を呑んだ。

險悪というよりは、奥さんの怒りに旦那さんが怯えているといった様子。二歳ほどの子供は、どうやら両親のどっちに味方したものが困惑しているようだ。

「三人！」

奥さんの方がストレートパンチのように三人分のバスを提示してきて、係員は激しく首を縦に振って先へ促す。

「はいこんにちはー こちらでお写真をお撮りしていますー！ ご来場の記念にあちらのブースでお写真を販売しておりますー！ 宜しければご乗車の後、お買い求めください！」

ゴンドラ乗車口手前には、大きな一眼レフのデジカメを持った係員がいて、どうやらレジャー施設価格で記念写真を撮ってくれるようだ。

「……別にいらないんだけど……」

「あ、ご不用でしたらその場で消去いたしますのでー！ そちらにお立ちいただいて、はい、お父さん、お子様を抱え上げて真ん中にはーいそうです！ すいませんお嬢ちゃんの風船ち

よつと後ろによけてくださーい」

必要以上にハイテンションで強引とも思える撮影だが、

「ばば、あれなあに？」

アラス・ラムスが係員が抱えるカメラを見て、不思議そうに言う。

「ん？ あれはな、カメラって言つて、アラス・ラムスの写真を撮るんだ」

「しやしん？」

エンテ・イスラに存在しない言葉は、いかに日本語を理解できても通じないらしい。

「あーその、絵だな、あれは絵を描く魔法の道具なんだ。あのお姉さんの持つてる、黒いまーるいところ、じっと見るんだぞ」

「おー」

分かってるのかいないのか、アラス・ラムスは好奇心を全面に押し出した顔でカメラのレンズを凝視し始める。

「お母さーん！ こっちに視線いただいていいですかあー？」

「……」

惠美は焦れた様子で横を向いていたのだが、見知らぬ他人相手にあまり大人げないことをしてもどうしようもないので、申し訳程度に視線を向ける。

「はーい！ じゃあ撮りますねー！ はい、ちーず!! ……はい！ 良く撮れましたー 宜し

ければお帰りの際にお買い求めくださーい！」

妙なテンションで送り出されて、三人はようやくゴンドラに乗る。

「あ、涼しい」

ゴンドラ内は蒸し風呂かと思いきや、座席の背もたれから冷房の風が吹き出て、なんとBGが流れている。座席は堅いが、思いのほか快適な空間だった。

「風船気をつけてくださいね。一周が約十五分、ゴンドラ内でのご飲食喫煙ご遠慮ください。それではいってらっしゃーい！」

係員が早口で言いながらドアを閉める。

「あ、もう乗ってる！」

恵美達は気づかなかったが、丁度そのとき千穂と梨香と芦屋が観覧車のチケットブースに現れた。

「引き離されるわよ！ 早く！」

梨香に急かされて、芦屋も千穂も慌ててチケット販売機にお金を入れる。だがしかし。

「あの、ちょっとすいません」

「はい？」

千穂は突然、隣から声をかけられた。

見ると、孫らしき子供を連れたおばあさんが、千穂の横の販売機の前で遠方に暮れていた。



「その、これはどうやって操作すればいいんでしょう？」

「あ、はい、そこにまずお金を入れて……これタッチパネルなんですよ」

年配の人の中には、タッチパネルの概念が理解できずに立ち往生してしまうタッチパネル症候群という現象が起こることは千穂も知っていた。

この販売機は、お金の投入口が操作パネルから離れた所にあつたり、画面に説明が一切なく単純に値段のキーだけが表示されているなど、操作性もあまり良くなさそうだ。

「観覧者は子供料金無いみたいなんで、全部この値段で枚数をここで指定して……」

千穂はほとんど手取り足取り、おばあさんのチケット購入をサポートする。

やがてつつがなく、おばあさんとお孫さんは必用なチケットを手に入れた。

おばあさんは何度もお礼を言いながら観覧者に向かってゆく。

「あー、いけない！」

つい熱心に指導していたせいで、梨香と芦屋を待たせてしまったと思つた千穂。

「……………あれ？」

さして広くないゴンドラ乗り場と観覧車のチケットブース。どこにも、芦屋と梨香の姿が見当たらない。

「え？ ええ？」

千穂は唖然としてゴンドラを振り仰ぐと、丁度窓に張りついて、表情を凍りつかせている梨香

と目が合った。

「ええええええええ？」

「さて、話してもらいましょうか？」

狭いゴンドラの中、真奥は恵美の三白眼に睨まれて逃げ場を失っていた。アラス・ラムスが持つている風船と風船の間から睨みつけてくる恵美の視線が、とても怖い。

「そもそも最初からおかしかったのよね。あなた、どうしてこの子を引き取ろうとか言い出したわけ？ あんなに面倒事纏がつてたくせに」

「あー、そのお……」

「それに、さっきのおでこの月の紋章、なんなのか知ってる風だったわね？ 全部知ってることきりきり吐きなさいー」

「ままー、大きいの、あれなにー？」

「ん……東京スカイツリーよ」

「あんなもんがあるせいで、テレビ買うだけじゃ何も見られなくなっちゃうんだよな」

「ごまかすなっ！」

三人の乗ったゴンドラが、重い衝撃で小さく揺れた。

そのゴンドラの二つ後ろのゴンドラに、梨香と芦屋は二人だけで乗っていた。

「くっ……もう一つ早ければある程度は様子が見えたのに……」

駆け込み乗車をしたはいいものの、シースルーゴンドラというわけでもなく、二つ先のゴンドラの中の様子などとてもではないが見ることはできない。

「……………」

一方の梨香は、芦屋の反対側の座席で凝り固まってずっと自分の足元を見つめていた。

千穂がなんに手間取っていたのか、ついてきていると思っていたのに気づけば芦屋と二人きりになってしまっていた。

「鈴木さん、どうされたんですか？」

「ひゃー え!?」

先ほどまであれだけけたたましかった梨香が、突然員ののように黙りこくってしまったのでは、芦屋でなくても気にはなる。

「あ、え、あ、その、千穂ちゃんお、置いてきちゃって、悪かったなーって」

「とにかく急いでいましたからね……」

梨香の不自然な受け答えに、芦屋は素直に納得し、ため息をついて座席に深々と腰かける。

「……………!!」

観覧車のゴンドラは、決して広い作りではない。長身の芦屋が向かいに座ると、どうしても

膝や足のどこかが接触してしまう。

梨香の先ほどまでの余裕は、結局のところ千穂という同行者がいたからこそその余裕であった。他に人がいればボディータッチをしようが狭い空間にいがまるで気にならないのだが、こうして閉ざされた場所で男性と全くの二人きり、という状況には未だかつて立ち至ったことがなかった。

まして、相手が声屋である。

一週間はど前の恵美と鈴乃を巡る騒動で知り合ったときには、ちよつと変わった人だらけに思っていたが、今日この数時間一緒に行動して、その印象はますます強くなる。

「大丈夫ですか？ 少し顔が赤いですが、陽に当たりすぎましたか？」

「ち、近いっ！」

「へ？」

「あ、あ、あいや、大丈夫、大丈夫ですよー。多分、日焼け止めが効かなかったのよ、うん」それ以上引けないという所まで身を引いて、手をばたばた振る梨香。声屋は特に不審に思わず、周囲の景色を見回しはじめた。

係員は一周十五分程度だと言っていたが、恥ずかしすぎて梨香にはそんなに耐えられる自信が無い。

その頃ゴンドラ乗り場の所では、千穂がベンチに座り、自販機で買った「おい！ お茶！」

をやけ飲みしている。

「で、話すの！ 話さないの！ 死ぬの!？」

「選択肢狭すぎだ！ あと、子供の情操教育に悪い言葉を吐くんじゃねえ！」  
先行しているゴンドラでは、話す話さないの押し問答が続いている。

「だから、いいだろ別に！ 何かしたってわけじゃないが、俺はもうアラス・ラムスの親父でいいんだよ！」

「あなたはそれで良くて、こっちは良くないわよ！ あなた見なかったの!? さっき私の前に立ってた白い女の人！ 絶対にまた面倒が起こるのよ！ 天兵連隊とか言ってたのよ！ 私を敵に回したくなかったら、一から十まで知ってること今すぐ吐きなさい！」

「見たって何をだよ!? 話せば俺の味方になんのかよ！」

「あなたじゃないわよ！ この子の味方よ！」

恵美は外をじーっと見つめているアラス・ラムスを目で示す。

二人でアラス・ラムスの背中を見ている間にも、ゴンドラはゆっくりと最高点に向かって動いてゆく。

「……昔、人から預かったんだよ」

真実<sup>まこと</sup>は顧念したように、難しい顔でため息をついた。

「まだ俺が魔王どころか、ゴブリンに毛が生えた程度のクソガキだった頃な」

真奥が話す気になったのを見て、惠美はとりあえず才を取めて聞く姿勢を取る。

「お前なんか生まれるずっと昔、魔界つてのは、どうしようもない所だった。違う種族の悪魔同士、目が合えばその瞬間殺し合いが始まるような、そんな場所だった。俺の一族は吹けば飛ぶような力しか持たない弱小部族で、ロクに魔術も使えない脳ミソまで筋肉で出来てるような腕力だけが取り柄のたった一匹の悪魔に全滅させられた。倒れて事切れてる姿が、俺が覚えてる、両親に関する最初で最後の記憶だ」

突如始まった身の上話。この方がよほどアラス・ラムスの情操教育に悪い気もするが、とりあえず話の腰を折らずに惠美は先を促した。

「近くの別種族との争いに負けた一族は皆殺しにされて、俺もゴミみてえに捨てられた。虫の息だったわけだ。ところが、小汚い悪魔のクソガキの命を気まぐれに拾った奴がいたんだよ」  
真奥は遠くを見て、どこか懐かしむように言った。

「俺は、そのとき初めて天使つて奴に会った。見たこともない真っ白な翼だった」

「ばばー、あれなにー？」

「んー？ お、アラス・ラムスよく見つけたな！ あれは飛行船つていうんだ」

「ひこうせん？」

アラス・ラムスは空に浮かぶ飛行船を口をぽかんとあけてしばし見上げた。

「どこまで話したっけ？」

「死にかけてたところを天使に助けてもらったって……」

「ああ、そうそう。まあ俺はゴブリンレベルの鳥頭だったから、手負いのくせにそいつに牙利うなりいたりしたんだけどな、今思えば相当高位の天使だったんだろうが、まるで相手にされなかった。かといって別にそいつは俺を救すわけじゃない。時越えれば悪魔だから勝手に治っていいが、それでもたまに俺の傷の様子を見て来て、聞きたくもない話を色々しやがった。こっちは身動き取れないから聞いているしかない。おかげで今まで知らなかった色々なことを聞いた」  
恵美は、少なからず驚いていた。

魔王サタンなどと言うから、相当高位の悪魔の家系（悪魔に家系があればの話だが）の生まれながらの魔王だとはかり思っていたからだ。

「まあ並みの傷じゃなかったから、動けるようになるまで結構時間かかったかな。しばらくすると、さすがにその天使が俺を殺したりするようなことはないって分かってきた。聞きたくもないのに勝手に話すから、色々知識も増えた。ただ聞けば聞くほど、本来天使なんてもんが悪魔を助けたりするはずねって分かってくる。だから聞いたんだ。なんで俺を助けたんだって」

「……そしたら？」

「……笑うなよ？ 笑ったら、そこで話終わらすかな」

真実はなぜか、少しだけきまり悪そうに目をそらした。

「……泣いてたんだとき、俺が」

「へ？」

「泣いてる悪魔なんか初めて見たから、ほっとけなかったんだと」

どんな理由にしろ悪魔が泣くなどという事態は想像ができないが、そのとき惠美は初めて、『悪魔』という種族の生態を、ほとんど何も知らないということに気づいた。

「泣いてる理由は、なんだったの？」

真奥は惠美の問いに顔をしかめたが、からかっている様子ではなかったので苦い顔をしつつも素直に答えた。

「まあ、色々だ。前にも言ったが別に親や係累の死が悲しかったとかじゃねえ。強いて言えば、自分の弱さとか、自分があつさり死ぬ理不尽さとか、そんなものに腹が立ってたからじゃねえかな」

苦い思い出を語っているせいか、少し惠美から視線をそらす真奥。

「とにかくそのあとも、傷が治るまで色々世話かけて、色々な話を聞かされた。人間って奴らの世界があることも、そのとき初めて知った」

「!!」

真奥はさりと流したが、惠美にとっては聞き捨てならない事実だ。

魔王のエンテ・イスラ侵攻の遠因は、天使だった？

もちろん、今の真奥の話が全て本当である確証は無い。だが、もし事実なら、世界の根本的



な安寧が揺るがされることにもなりかねないではないか。

「こいつは……こいつの元となったクリスタルは、その天使がいなくなった日に、残されてたもんだ。三日月型をした、綺麗な紫色のクリスタルだった」

「やあの、見てるのー」

アラス・ラムスは突然真奥に抱え上げられ抗議の声を上げる。

その額には何も浮かび上がってはいないが、三日月型の紋章は、そのクリスタルを象徴しているのだろうか。

「世界をもっと知りたいと思ったら、この種子を植えて育ててみて。がんばれ、大魔王サタン」

「え？」

「……あいつが残した書き置きだ。『文字』は、俺があいつからもらった貴重な財産の一つ。罵声と暴力以外の、革命的な情報伝達手段さ。その後俺が成長して、ものの二百年で修羅の道を立派な悪魔社会にまとめ上げるまでの輝かしい過程は省くが、あのときもらった知識が無ければ為しえなかった。だから俺は、三日月の種を植えたんだ。きっと俺にプラスになるもんだと信じて、正体が何かも分からずに。植えるとは言われてたものの、あんなクリスタルから植物らしいもんが出てきたときには結構驚いたぜ」

真奥の目は、そう遠くない過去を見ていた。エンテ・イスラの中央大陸最大の交易都市、イ

スラ・ケントゥルムの跡地に築いた、魔界の变革の象徴たる、本当の魔王城。

魔界以外の世界を初めて見た魔王サタンは、月の形をした紫色のクリスタルを未来の萌芽を期待して埋めた。

己以外の誰も入ることを許さなかった、魔王の執務室の奥の、空を見渡す鉢の中に。

「俺は生粋の魔王なんかじゃない。あの頃の魔界では、ケルベロスも歩けばサタンに当たるとてくらい、サタンなんて名はありふれてた。サタンってのは、もともと神話よりも昔の時代にいたらしい、伝説上の大魔王の名なんだと。よくもあんなクソみてえな魔界にそんな伝説が残ってたもんだと思うがな。あいつがどういうつもりで俺を魔王と呼んだかは分からないが、言うなれば俺のスタートは、あそこで、こいつだった」

真奥はアラス・ラムスの頭を撫でるが、外を見たいアラス・ラムスは真奥の手から逃れてゴンドラの窓に張りついてしまう。

「ま、とにかくそういう理由でな。確かに俺は、あの紫色のクリスタルがアラス・ラムスの姿になる片棒を担いだって意味では、親父なんだろうさ」

「じゃあ、その天使がアラス・ラムスの本当の……」

「理屈の上ではそうなんのかな。でも、あいつからもらったときには単なる紫色のクリスタルだったからなあ。そこまで自我があつたかどうか」

惠美は真奥の話を聞きながら、昂揚する胸と、ある種不吉な手感に囚われた冷や汗を抱えて、

その一言を口にした。

「その天使って、誰なの」

エメラダの元からいなくなったライラ。アラス・ラムスの名を知っていた白い女。そして、アラス・ラムスの大元になったクリスタルを、幼き日の魔王に預けた天使。そのクリスタルから生まれたアラス・ラムスが自分のことを「まま」だと思っている。

まさか。

恵美の心の中に、期待と予感と不安の嵐が吹き荒れた。

真奥はそんな恵美の胸の内を感じ取ったかのように、少し間を空けて言った。

「お前の知らない奴さ」

心の中の嵐が、不完全燃焼のままに霧散する。

「……ごまかすつもりじゃないでしょうね」

「そんなつもりはねえけど、聖典に出てくるような有名な天使でもないみたいだしなあ。おい、それよりさつき、アラス・ラムスはなんで元に戻ったんだ。お前、何か知ってるんだろ？」

ごまかされてるようにしか思えないが、真奥の過去を詳細に知ったところでどうにもならないので、今は尋ねられたことに素直に答える恵美。

「全身白い服を着た、女の人が直してくれたのよ。手をかざしただけでね」

「……なんだそりゃ。なんかの宗教か」

真奥はあの女性を見ていないのだろうか。恵美は勢い込む。

「違ふわよ！ あのタイミングで戻ってきたのに見なかったの!? こう、その人の指輪が光ったと思ったら、急に夢から覚めたみたいにアラス・ラムスが元に戻ったの！」

「見てねえよ！ 指輪ってどんなだ」

「なんの変哲もない指輪よ。紫色の宝石が嵌まっていた気がするけど……」

「……それは悪い切り、変哲があるだろうが」

時折恵美が見せるこういった間の抜けたところで、真奥は頭が痛くなる。

「他に何か無いのか」

「空気読まないバカが大声出しながら戻ってくるまでそんな時間無かったし」

「おい」

「あとは、ガブリエルの天兵連隊とか、イエソド? とかいうのの欠片がどうか痛い！」

真奥は思わず、恵美の帽子越しにチョップを下してしまった。

「な、何するのよ!! 斬るわよ!!」

物騒な反抗をする恵美だが、真奥としても黙ってはいられない。

「お前は本当に元教会騎士か！ これだから最近の若いもんは！ ちっとは世の中のこと勉強しろ！」

突然大声を上げた真奥は、頭を抱えてうずくまってしまふ。

「イエソド……イエソドだあ？　そういうことが畜生！　あいつとんでもないモン押しつけやがって！　じゃあさっきのあれも……！」

「な、何よ、いきなりどうしたのよ」

「帰ったら思いっきり鈴乃にバカにされんぞお前」

「はあ？」

「イエソドって言ったらお前……」

「ばば、なあに？」

そのとき、真奥が放ったイエソドという言葉に反応したのは、外を食い入るように見つめていたアラス・ラムスだった。

「へ？」

その反応の意味が分からず惠美は首を傾げるが、真奥は確信とも絶望ともつかぬ顔でアラス・ラムスに尋ねる。

「なあアラス・ラムス」

「なあにばば」

「これ、なんだ？」

真奥は赤い風船を指差す。するとアラス・ラムスは迷いなく答えた。

「げぶら」

「これは」

次に指差したのは山吹色やまぶきいろのような、濃い黄色。

「てあれと」

「こっちの明るい黄色いのは」

「まるくと。なかよしなの」

「この白いのは」

「けてるー」

「な、何言ってるのこの子……」

惠美めぐみは聞いたことのない単語の連続に目を白黒させている。

「じゃ、これは」

真真ままがそう言って手に取ったのは、紫色の風船だった。

「あたし、いえほど」

「……そっか、偉い偉いな、ちゃんと言えたな」

「えらい？ えへへー」

ゴンドラも、そろそろ終点に近づいてくる。東京ビッグエッグを照らす西陽にしやうに、惠美は思わず目を細めた。

「どういう理屈りくつか分かんが……アラス・ラムスは、ヘタすれば悪魔や天使より、よっぽどす

げえ存在かもしれんぞ」

「は？」

「ゲブラー、ホド、マルクト、ケテル、それでイエソド。全部、セフィロトの樹に生る世界組成の宝珠セフィラの名だ。アラス・ラムスは……イエソドのセフィラの化身かもしれん」

真奥や芦屋たちのゴンドラが回っている間、ベンチで待っていた千穂は、自己嫌悪に陥っていた。

一人になって冷静に状況を見ることで、梨香の野次馬根性を批判できた立場ではないのを感じたからだ。

真奥の万が一の事態に対して芦屋に携帯電話を貸すという大義名分はあるが、結局のところ、真奥と擬似夫婦を演じている恵美にヤキモチを焼いていただけなのだと気づいてしまった。

「真奥さんは、私のこと信じるって言ってくれたのに……」

その信頼を千穂から裏切るようなことをしては、真奥に対しても、恵美に対しても申し訳が立たない。

そんなことをつらつら考えていると、なんだか無性に恥ずかしくなってくる。

「真奥さん……ごめんなさい」

浅はかな不安と嫉妬にかられて、やっではいけないことをしてしまった。千穂は立ち上がる  
と、芦屋と梨香を待つことなく階段を下りていった。

千穂の姿が消えてからほどなくして、真奥と恵美とアラス・ラムスのゴンドラが降りてきた。  
「ふう、外はあちいな」

「むふー」

真奥とアラス・ラムスは、ゴンドラで冷やされた体が熱気に晒されて顔をしかめる。

恵美は黙りこくったまま一番最後にゴンドラから出てきた。

「お疲れ様でしたー！ お写真出来上がってますよー！」

降りた所で声をかけられてそちらを向くと、ゴンドラに乗る際に撮影した写真がプリントされて、専用の台紙に挟まれているではないか。

「おおー！！」

「……醜い顔」

アラス・ラムスは自分の姿が映っている写真に感動して目を輝かせ、恵美は苦虫を噛み潰したような顔で映っているのを見て顔をしかめる。

「こちら記念のメッセージが書き込める台紙とセットで、千円でございます。焼き増しもできますよー」

「え、タダじゃねえの？」



真実とは思わずそんなことを口走り、恵美に後ろ頭をはたかれる。

「むむ……千円か……」

「ばば、ばば、これ、これ！」

明らかにアラス・ラムスは写真を欲しがっている。だが、印画紙とインク代と台紙の原価を考えると、千円というのはいくらなんでもレジャー価格にすぎるのではないだろうか。

「……一冊でいいわ、ください」

すると、意外にも恵美が即決で、千円を出して写真を購入するではないか。そしてそれを、アラス・ラムスの手に渡す。

「わあー」

アラス・ラムスは台紙を聞いて、微妙な笑顔の真実と、仏頂面の恵美、そして自分の三人が映っている写真を見て歓声を上げた。

「お、おい、いいのか」

「千円くらいケチるんじゃないわよ、本当に甲斐性なしね。初めての写真でしょ」

「ま、まあそうだが……」

「言っとくけどー エメやアルが来たときに見せるんじゃないわよー 私の立場に関わるんだからねー」

「声屋とか鈴乃とかちーちゃんはいいいのか」

「そこは今さらって感じでしょ。でも、ルシフェルだけには秘密にしときなさい」

「無茶言うぜおい……」

恵美のむちゃくちゃな要求に苦笑した真奥は、かがみ込んでアラス・ラムスに言う。

「はら、アラス・ラムス、ままにありがとうは」

「ありがとままり」

ゴンドラ乗り場にいる全員が振り返るほどの声に、恵美は顔を真っ赤にして、

「は、は、母親なんだから当たり前でしょー！ 父親が甲斐性なしだから、仕方ないじゃないー」

なんの言い訳か知らないが、恵美なりに真奥とは関係なくアラス・ラムスに何かしてあげたということにしたいのだらう。

「ほ、ほら行くわよー」

顔を伏せて階段を下りていってしまふ恵美を追いかけて、真奥とアラス・ラムスも歩き出す。

と、そのときだった。

「ちよい待ち恵美、電話だ」

「え？ ……あ、私も。アラス・ラムス、ちよつと待ってて」

真奥と恵美に、同時に電話がかかってくる。

それぞれ、漆原と鈴乃からだった。

「み、見失った!?」

芦屋はゴンドラ乗り場に誰もいないのを見て狼狽する。ゴンドラ二つ分しか離れていなかったのだから、到着は何分も差が無いはずなのに。

階段を駆け下りた先のショッピンダ階で周囲を見回すも、周囲に真奥や恵美の姿は発見できなかった。

「ち、千穂ちゃんも、どこ行っちゃったんだろ」

冷房が効いたゴンドラの中にいたはずなのに、顔がやたら暑い梨香。

「もしかして千穂ちゃん、追っかけてるのかな……ど、どうする、芦屋さん」

それは大変に困る。すぐに千穂か恵美達を見つけなければ、芦屋と二人きりのまま行動しなければならなくなるではないか。

「……ど、どうしようも……連絡を取る手段も無いし……」

「へ?」

「私は携帯電話を持っていないのです」

「え、マジで!?」

密室から解放されて、ようやく梨香もいつもの調子を取り戻している。

「いざというときは、佐々木さんのお借りする予定だったのですが……こうなると……」

時刻は夕方に差ししかかっているが、まだそれなりに大勢の人がいて、この中からまた真奥と恵美を探すのは至難の技だろう。

「……仕方ないわね。ま、ちょっと荒っぽいけど……」

梨香は自分の携帯電話を取り出して、恵美の番号を呼び出した。

「あ、もしもし恵美——」

いきなり恵美に電話をかけるという梨香の暴挙に芦屋は叫び声を上げそうになったが、梨香が人差し指を立てて静かにしろとジェスチャーするので、仕方なく口をつぐむ。

「ん？ いや大した用じゃないんだけどねー、真奥さんとのデートはうまくいってるのかなーって……あっはっは、ごめんごめん、そうだよねー、子供のためだよねー。今電話大丈夫だった？ そろそろご飯とかだった……え？」

冷やかしを装った電話で居所を探ろうとした梨香だが、恵美の回答は予想外のものだった。

「今、帰ってる途中？」

「え？」

それには芦屋も驚く。梨香はなんとか驚きを声に出さないようにしながら、

「ああ、あれかし、子供の体力的な問題かし。うんうん、そっか。ま、子供が楽しそうだったんなら何よりだね。今駅に向かっているんだ、うん分かった、突然ごめんね、気をつけてー、はい、はい……ってことらしいけど」

通話を切って芦屋に言う。

「帰った……はあ……そうですか」

「では、ここに残っていても意味はありませんね。佐々木さんも、帰られたのでしょうか」

「それは分からなかったけど、でも悪いことしたなあ……。もし会う機会があったら、謝ってもらえますか？」

「お安い御用です。それでは私も急ぎますので。今日はお世話になりました」

「あ、ちょ、ちょっと待って！」

すぐさま真奥達を追いかけて走ろうとする芦屋を、梨香は思わず制止してしまった。

「はい？」

「あ、その……」

呼び止めたはいいものの、言うべきことを考えていなかった梨香は、しばらく口をばくばくさせてしまう。

「えっと、その、あの、そうだー あの、これ」

梨香はバッグから慌てて手帳を取り出す。そしてメモページを引きちぎるように破ると、それに急いで文字を書いて、芦屋に手渡した。

「これは……携帯の電話番号ですか？」

「そ……あの、私の……」

「鈴木さんの？」

手渡された紙を熨めつ眇めつしながら芦屋は尋ねる。

「ほら、また何かあったらさ、連絡してもらえればその、力になれるかもしれないし」

何かあったらとは何かあったらなのか、言っている梨香も分かっていないのだが、とにかく何か言わなければ、とてもこの空気には耐えられそうになかった。

「なるほど……そうですね、もしかしたら、またご助力願うことがあるかもしれません」

「……え？」

ほとんどしどろもどろ状態で言ったセリフだったが、芦屋がなんの疑いもなく頷いて、

「先ほども言った通り、私自身は携帯電話を持っておりませんので、何かあったら真奥の……」

芦屋はそこまで言って、ふと何かを思い直したように首を横に振った。日頃、魔王城の対外的な連絡先は真奥の携帯になっているのだが、みだりに主の電話番号を他人に公開するのは良くないと思い直した。

「いえ……今日のこととで、色々と身に染みました。多少家計には負担になっても、私も携帯電話を持とうと思うので、購入にあたってアドバイスを頂けませんか」

梨香の顔が、一気に紅潮する。

「鈴木さんは遠佐と同じ携帯電話関係の職場にお勤めでいらっしゃるんですね。お勤めの会社の端末を買い取らうかどうかは現時点では分かりませんが、ご迷惑でなければ今度、選ぶ際にご指

導頂けるとありがたいのですが」

「い、いいよ！ うん、いつでも連絡して！」

気づくと梨香はほとんど身を乗り出すようにして、勢い込んで首肯した。

「ありがとうございます。それでは、近いうちに連絡させて頂きますね。きっと公衆電話からになるかと思っています」

「はい……」

「では、失礼します」

声屋は一礼して、今度こそ後楽園駅こうらくえんえきに向かって走っていった。

「嘘……何これ、やだ……ちよつと、どゆこと？」

一方の梨香は声屋の後姿が見えなくなってもしばらくその場に立ち尽くし、

「どうしょ……どうしょ……どうしょ」

やがておぼつかない足取りで、声屋とは反対方向の水道橋駅すいどうはしえきに向かって、ふらふらと歩き出したのだった。





魔王、大切なものを失う苦しみを知る



瞬かぬ星の狭間の闇の中に、蒼と紅を従えた、一際巨大な大地があった。

輝く青で満ち、十字の刻印が穿たれた生命ひしめき溢れる大地。

生命の大地に寄り添う蒼い大地には、広漠として音の無い、風さえ吹かぬ荒野が広がっていた。

その荒野の中に、大地と同じ色をした一柱の巨木がそびえ立っている。

どこまでも平坦な荒野に屹立するその巨木は、それまで数えきれない年月を生き、これからまた数えきれない時を渡るための生命に満ちていながら、まるで枯れ木のように覇気の無い姿をしている。

天を覆う葉も無く、春を彩る花も無く、豊かさを謳う果実も無い。ただ樹そのものだけがそこに悄然と立ち尽くしていた。

蒼い大地には、その巨木を囲むように、十の祠が建立されており、それぞれの祠の入り口には、一つずつの『名』が彫られていた。

最初の祠はケテル、次の祠はコクマー、順にビナー、ケセド、グブラー、ティファレット、ネツアク、ホド、イエソド、そして最後の祠はマルクト。

何者か。の名であった。その文字を使うものも読むものも、今は何処にいたのだろうか。

魔や神殿のような屋根や柱のあるものではなく、まるでその場にある岩を掘り抜いたような、真球ばかりが十、実っていたはずの巨樹から墮ちた果実の成れの果てのように、大地に転がっ

ている様を思わせる。

蒼く枯れた大樹の荒野に、初めて動く者が現れた。

失われた言葉で、イエソドと彫られた球から、大柄な人影が、のそりと姿を現した。

「良かった、割と早くに見つかったよ」

男の声のようだ。

その眩きと同時に、人影の周囲に四つの光柱が出現し、すぐにそれらも人の形を取る。

「中央大陸の反応が消えたときにはまた何百年も探し回るのかって思ったけど、どうやら見失わずに済んだようだ。因果な所から、欠片、同士が共鳴した反応があった」

四柱の者たちに動揺が走る。

「最近サリエルが行方不明になった所だよ。そしておそろく……」

大柄な男は、生きながら枯れた蒼い巨木を仰ぎ見た。

「イエソドのセフィラを盗んで砕いたあの女も、そこにいる」

大柄な男が、星空に手をかざすと、次の瞬間空に光溢れる異空間への穴が出現していた。

「行こうか。セフィロトの樹を、あるべき姿に戻すために」

そして五人の姿は、ゲートの彼方へと消えた。

ゲートの光の残滓すら消えて、蒼い大地には再びの静寂が訪れた。

巨木の大地に立つ五人を見ていたのは、生命の大地に刻まれた十字の刻印、聖十字大陸エ

ンテ・イスラ。そして著<sup>つく</sup>い大地と同じく生命の大地の周囲を回り寄り添いながら、決して近づくことのない彼<sup>かなた</sup>方の赤い大地のみであつた。

※

時間は真<sup>ま</sup>奥<sup>おく</sup>と恵<sup>めぐ</sup>美<sup>み</sup>が東京ビッグエッグタウンで観覧車を降りる少し前のこと。

「おーいベルーー いるか!?」

「んぐっ……ど、どうしたルシフェル」

鈴<sup>すず</sup>乃<sup>の</sup>は、珍<sup>めづ</sup>しく漆<sup>うるし</sup>原<sup>はら</sup>が押入れから出てきて、焦<sup>あせ</sup>った様子で部屋を訪ねてきたので驚いた。うどんを茹<sup>ゆ</sup>でて遅い昼食に興じていたところだったので、危<sup>あや</sup>うくうどんを喉<sup>のど</sup>に詰<sup>は</sup>まらせそうになつてしまふ。

漆原が大盛りのざるうどんをちらりと見て、鈴乃はその視線を目ざとくキャッチする。

「貴様の分は無いぞ」

「当分うどんはいらないよ。さっきビザ取ったから……って、それどころじゃなくてー」

漆原は、芦屋が聞いたなら怒<sup>いか</sup>りで悪魔に戻りそうなことを言ってから鈴乃に尋<sup>たず</sup>ねた。

「お前、さっきの氣づいた?」

「さっきの?」

漆原が何を言っているのか分からず鈴乃は首を傾げた。

「やっぱ気づいてないか。お前、エミリアと連絡取れるんだっけ？ 真奥には僕から連絡するから、二人に早く戻ってくるよう言った方がいい」

「なんだ、どうしたというんだ」

いつになく漆原の様子が真面目なのを見て、鈴乃はさすがに顔が真剣になる。

「いいから早く。今さっき、理由は分からないけど、ものすごく大きなグートが東京のどこかで聞いた。多分、面倒なことになるよ」

それだけ言うと、漆原は魔王城に戻ってノートパソコンに搭載されたスカイフォンを起動させる。その真剣な様子はとても演技とは思えなかったのだ。鈴乃も素直に携帯電話を取り出して恵美の番号を呼び出した。

ヴィラ・ローザ笹塚の中庭に、五つの人影が現れたのは、そんなときだった。

「おいおい、客が来てるなんて聞いてねえぞ？」

真奥は余裕の笑みを浮かべながらも、油断なくアラス・ラムスを背後にかばう。

「タイミング的にどっちが先だったんだ？」

「すまない魔王……完全に、私達が不意を突かれた」

「まー、こいつらのフットワークを甘く見てたのは認める」

鈴乃が悔しげにうめき、漆原が悲げにもせず、普段と変わらぬ調子で言う。

「やー、彼らを責めないでやってよー。君たちのことを考えて電話してくれたんだからー」

ヴィラ・ローザ笹塚に戻った真奥と恵美とアラス・ラムスを迎えたのは、漆原でも鈴乃でもなかった。

「それに、別に手荒なことはしてないよー？ 基本的に話し合いで解決できればそれが一番いいと思ってるから、できれば面倒なのはナシで行きたいんだよねー」

魔王城の中は、異様な空気に包まれていた。

どう異様かと言うと、人口密度が高すぎてやたらと室温が上昇しているのだ。

なにせ、六畳間に合計で十人も人間がひしめき合っているのである。いや、正確に言えば、十人いる中で「人間」であるのは鎌月鈴乃一人ということになる。

「ガブリエルか」

「いえーすあいどうー！ でもどうして分かったん？ どっかで会った？」

殴りたくなるようなお気楽ハイテンションな巨漢が、招かれざる客のリーダーのようだ。

肩で切り揃えた青い髪に、緊張感のまるでない目つき。だが、上背は声屋ほどもあり筋骨隆々としたレスラーのような男だった。古代ギリシャ人が纏うようなトーガを身に着けているが、それがまた驚くほど似合っていない。

魔王城の中には真奥が「ガブリエル」と呼んだ巨漢の他に四人の男がいて、一人が鈴乃の喉元に裝飾過剰なデザインの長剣を突きつけ、残る三人が腕を組んで胡坐をかいている漆原を囲んでいた。

「大天使の中に、話してるだけで頭が痛くなるような能天気なデカブツがいるって昔聞いたことがあつてな」

「ヒドイね。僕がいない所でそんなこと言うなんて。誰だいそんなこと言うのは」

「それに、イエゾドのセフィラの守護天使だろう、お前は」

「やだ、褒めても何も出ないよ」

「そういう疲れるのやめろ。余計な問答はいらんから用件だけ簡潔に言え」

「君の後ろに隠れてる子と、できたらエミリアの聖剣頂戴。あと、ルシフェルが注文したビザキャップのビザ、皆で食べちゃった。ごめん」

「お前はこの期に及んで何してんだ!!」

さすがに真奥の雷が飛び、漆原は身を竦ませる。

「あ、僕らが食べたんだからちゃんとお金払うよ?」

「心配してんのはそこじゃねえ! や、そこも心配だけど!」

主に芦屋の怒りを買いたくないという意味で。

「あ、ちょっと待って! やっぱりその子を返さなければ、ビザ代の命は無いものと思え!」

「ビザ代償<sup>か</sup>しんでガキを誘拐<sup>きうかい</sup>犯に渡す親がどこにいるっ!!」

真<sup>ま</sup>實<sup>じつ</sup>は絶叫<sup>ぜつきよう</sup>した。

「随分<sup>ずいぶん</sup>ご登場<sup>ていじよう</sup>が遅<sup>おそ</sup>かったじやねえか。こいつが俺<sup>おれ</sup>んとこ来て何日経<sup>た</sup>つてると思<sup>おも</sup>つてるんだ」

「いや、君<sup>きみ</sup>たちには何日のレベルかもしれないけど、こっちは何百年単位で探し回<sup>まわ</sup>つてたんだから、数日の誤差<sup>ごさ</sup>は大目に見ようよ。ついさつき、イエソドの欠片<sup>かけ</sup>の波動を感じたときには夢かと思<sup>おも</sup>つたもん。エンテ・イスラの魔王城からその子の欠片<sup>かけ</sup>が持ち出されたときは本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>絶望したからねー。また何百年も探し回<sup>まわ</sup>らなきゃいけないんだと思<sup>おも</sup>つたからさー」

ガブリエルという名らしい男はそこまで言<sup>い</sup>つてから、

「あー、君<sup>きみ</sup>が余計な問答<sup>もんたう</sup>はナシだつて言<sup>い</sup>つたんじゃないか! と、とにかく! その子返すの、返さないの、どっち!」

前例<sup>ぜんれい</sup>に違<sup>ちが</sup>わずそれらしいところは徹<sup>てい</sup>底<sup>てい</sup>も見<sup>み</sup>当<sup>あた</sup>たらないが、惠<sup>めぐみ</sup>美<sup>み</sup>の聖剣<sup>せいけん</sup>を欲<sup>ほ</sup>しがっているところを見ても、天界<sup>てんがい</sup>の回<sup>まわ</sup>し者<sup>もの</sup>、すなわち天使<sup>てんし</sup>であることは間違<sup>まちが</sup>いない。

ガブリエルであるということも否定<sup>ひてい</sup>はしなかった。ならば確<sup>たしか</sup>かに彼は、本来<sup>ほんらい</sup>のアラス・ラムスの親<sup>おや</sup>か保護<sup>ほご</sup>者<sup>もの</sup>に当<sup>あた</sup>たる人物<sup>じんぶつ</sup>ということになるだろう。

「……………」

だが、アラス・ラムスは、露骨<sup>ろこつ</sup>な警戒<sup>けいけい</sup>の目でガブリエルを睨<sup>にら</sup>んでいた。どう見ても、友好的な感情<sup>かんじ</sup>を抱<sup>いだ</sup>いているようには見えない。



「おい、アラス・ラムス。あのおじさん、知り合いか？ お前を連れていきたいらしいんだが」

「いや!! だいつきらい!!!!!!」

「が——————ん——————」

アラス・ラムスの即答に、わざとらしくショックを受けるガブリエル。

「おじさんとかやめてよ。傷つくよ」

そっちな。心なし、鈴乃と漆原の周りにいる男たちも呆れたような目をしている気がする。

「まるくとも、けるも、びなーも、こくまも、みんなつれてっちゃった! だいつきらい!!」

「ああもう、余計なこと言わないでよー」

続けざまにアラス・ラムスが放った言葉に、ガブリエルは頭を抱えた。

「……よくは分からんが、アラス・ラムスが嫌だつて言ってる以上、例えお前が生みの親だろ

うと引き渡すわけにはいかないな」

「えー……じゃあ聖剣……」

「お断りよ。例え神様に土下座されたつて、私の目的を果たすまで聖剣を渡すつもりはないわ」

「……うー、めんどいよー。なにこの魔王と勇者。めんどいよー。僕も手荒なことはしたくな

いんだけど、立場上その子を見つけたら連れて帰らないわけにいかないんだよー」

「知るか、そんなこと」

「聖剣は、まあ、サリエルが手を出せなかったくらいだから、在り処が確認できただけで今は

良しとしておくけど、でも、その子はそういうわけにいかないの。お願い、返して」

「却下だ」

「もともとうちの子だよ？」

「今は俺が親だ」

「どうしても？」

「どうしても」

「天界全部敵に回すことになるかもよ？」

「ガキ泣かせてまで命惜しもうとは思わねエよ」

「……めんどいなあ、もう。本当は、嫌なんだからね？」

ガブリエルは、さびしそうに呟いて、そして、

「……………」

その場の全員が、圧力で壁に叩きつけられそうになるほどの聖法気を、全身からジェット噴射のように放射しはじめた。

その事態が瞬きをするほど一瞬の出来事で、真奥は思わずよろけてしまう。

「力ずくって、本当嫌いなんだよ。降参するなら認めるから、いつでも言つて」

まるで調子が変わらないガブリエルが、気づいたときには、真奥の目の前に立っていた。

「うおー」

真奥の視界の端に、ガブリエルの踏み込みで穴が開いてしまった畳が映った。

「君が魔王の力を取り戻しても、多分僕なら勝てちゃうよ？ だから、頼む。その子返して？」  
静かな、だが前に立つものの全てをひれ伏させずにはおかない威圧感と神聖性。

「……本気かよ、くそっ」

真奥は唾を呑む。かつて、どんな相手と対峙したときにもこれほどの威圧感を感じたことなどなかった。

それは自分が弱くなったということではない。

セフィロトの守護天使という今までの連中とはケタ違いの天使を、初めて相手にしたということだ。

だが、真奥は驚きはしたものの、怯みはしない。

「だが、嫌だね。俺は人間や天使の嫌がるのが大好きな、悪魔の王だ。こいつは俺が世界征服した晩には、後継ぎとして立派に育ててやるよ」

「君は魔力を失っている身だから、手加減はするよ……降参、認めるからね」

それは、全ての交渉が決裂した合図だった。

なんともお優しい条件だが、言われるまでもなく、真奥に勝算などあるはずもない。

無造作に振られた腕が真奥に触れただけで、それこそ全身が粉々になってもおかしくはないだろう。

だが、大天使の聖なる光の一撃を、止めたものがあつた。

「真奥さん……！」

それは、單なる叫び声だった。魔法でもない。剣でもない。ただの声。

だがその声が、大天使の攻撃を止めた。

全員が、声のした方に顔を向ける。

「……………真奥……………さん」

千穂だった。

汗をかき息を切らした千穂が、階段の最上段に足をかけて、こちらを見ていた。

「千穂ちゃん!? ダメよー! 逃げてー！」

恵美は千穂の乱入に慌てて警告を発するが、千穂は首を横に振る。

「……………今日のこと、やっぱりきちんと謝ろうと思つて……………」

「今日のこと？」

「そしたら……………こんなことに……………。私じや力になれないって分かってますけど、でも、我慢で

きなくて」

真奥は、そもそも千穂や声屋や梨香に尾行されていたことを知らない。

千穂は全員に先んじて怪塚に戻ってきたが、真奥の信頼を結果的に裏切った後悔に耐えきれず、一度家に帰ったものの、いてもたってもいられなくなり走って戻ってきたのだ。

「……見たところ、この国の人間のようなだね。でも、これは君のあずかり知るところじゃない。警察とか呼んだって無駄だし、信じられないかもしれないけど、この真奥貞夫や僕は……」

「私、知ってます！」

ガブリエルの口上を違つて、千穂は叫んだ。

「私、日本人です。でも、知ってます。真奥さん……魔王サタンや、勇者エミリアや、エンテ・イスラのこと。あなたが……多分、アラス・ラムスちゃんを迎えにきた、天使だってことも」

ガブリエルは、その言葉を聞いて意外そうに首を振った。

「へえ、異世界人同士がナチュラルに交誼を結んでるのは驚いたけど、よく僕が天使だって分かったね？ そんなに神々しい？」

この期に及んで軽口を叩くガブリエルに、千穂は困惑して、

「……基本的に、今まで真奥さんや遠佐さんに酷いことしてる人、皆天使でしたから」

あまりにも正直すぎる返事をしてしまう。

真奥と恵美と鈴乃は啞然とするし、ガブリエルや取り巻き連中は思い切り顔を曇め、一人漆原だけが吹き出してにやにや笑っていた。

「ルシフェルに関しては何も言わないけど、サリエルは一体何したわけ？」

それでも正直すぎるが故に嘘ではないと分かるので、ガブリエルとしても困ってしまう。

「僕もサリエルも、この国の『天使』のイメージとは程遠いことしたのは間違いないね」

「あのさ、やつばイメージって大事だからさ、評判落とすマネだけはやめようよ」

「お前も十分イメージ悪いから、諦めたら？ こいつらもどう見てもヤクザの三下風情だし」

漆原が鈴乃や自分を取り囲む四人を軽く睨むと、何故か取り巻き達が、漆原を恐れるように身を引いた。

それを見てまた満足げに微笑む漆原と、呆れたようにため息をつくガブリエル。

「ま、まあとにかくだ、悪いけど、今ちよつと取り込み中なのね。僕は話し合い優先で物事を進める気だけど、万が一にも怪我したくなかったら、早いとこいなくなつた方がいいよ」

「いいね、その噂ませ大つばい三下ばりばりのセリフ。嫌いじゃないなそういうの」

漆原の茶々を、もはや誰も聞いていなかった。何故なら、

「お願いします。アラス・ラムスちゃんを、連れていかないでください」

千穂が、ガブリエルに向かって深々と頭を下げたからだ。

千穂には分かっていた。ついに来るべき時が来てしまったということだ。

それでも、エゴだと分かっている、何がアラス・ラムスにとっての本当の幸せか分からなくても、これまで見てきた全てが、千穂を突き動かす。

「アラス・ラムスちゃん、本当に真奥さんと蓮佐さんが大好きなんです。だから、お願いします」

千穂の足元に、涙の滴が落ちた。

「ちーちゃん……」

「千穂ちゃん……」

「ちょ、ちょつとやめてよ！ 頭上げてって！」

そして意外なことに、ただの人間、無力な一介の女子高生でしかない千穂の行動に、ガブリエルは思い切り動揺した。

「ちょつと勘弁してよ！ これ明らかに僕一人が完全悪者じゃん！ うるせえこつちも仕事なんだよとか言いながらいたいたいけな女の子の涙を無視して借金のカタ差し押さえてとか、昔のドラマの借金取りみたいじゃん！」

「何言ってんだこいつ」

テレビドラマを見たことのない真奥は首を傾げる。

「お願いです……お願いですから……」

「だー目 もう泣かないでったらー 本当勘弁してよ！ こんななら凶器振りかざして襲いかかられた方がよっぽどマシだよ！ ねえ君ちょつとー」

ガブリエルは、もはや真奥も恵美も完全に無視して千穂を宥めにかかっている。

「お願いします……お願いします」

だが千穂は顔を上げない。ひたすらガブリエルに嘆願を繰り返す。

「ああああもう！」

ガブリエルはじたばたと手足をバタつかせてから、憤然と、

「明日までだっ!!」

「ガブリエル様!」

「何をおっしゃっているのです!」

漆原と鈴乃を囲む男達が、信じられないものを聞いたという面持ちでガブリエルを見た。

だがガブリエルはそれを振り返らず、涙目で自分を見上げる千穂を決まり悪そうに見下ろす。  
「うー、言っとくけど、僕にだって事情はあるんだからね! だから、明日朝一番になったら絶対迎えに来るかんね!? それまで記念撮影でもなんでもやってりやいいさ! でも、逃げられるなんて思ふなよ!」

「は、本当ですか!」

千穂の顔色が、ぱっと明るくなる。

「……うー」

ガブリエルはその顔を直視できずに視線をふいとそらし、

「あ、明日だかな! それ以上は待たないかな! そ、それに魔王! お前、魔力集めて下手に逆らおうとしたら、タダじやおかないんだからね!」

「あ、ありがとうございます!」

ガブリエルとしては色々釘を刺したつもりだろうが、千穂の完全無欠の善意から来るお札の



言葉に、結局氣圧されてしまう。

「か、帰るぞお前ら！」

あの威圧的な聖法氣もいつのまにか霧散し、どしどしと足音を立てながら、

「……この捨て台詞も完全にチンピラじゃないか！」

自分にそう突っ込みを入れて、わざとらしく肩を怒らせて部屋からぞろぞろと出ていくガブリエルと取り巻き達。

取り巻きはまるでカルガモの親子のように、ガブリエルの後に続いて順繰りに真奥に肩をぶつけていき、そのサマは完璧に三下のチンピラである。

「おっ、お、ぶっ、おいお前らっ！」

それでも実力的にはかなわない真奥が、抗議の声を上げながらその背を悔しげに睨んでいると、先頭のガブリエルが階段に差しかかった途端、

「わっ！」

重い何かが、激しい音とともに転落する音が聞こえた。

「ガブリエル様！」

「ガブリエル様っ!!」

どうやらガブリエルが階段から落ちたらしい。その上、

「あっ！」

「わっ！」

「おっ！」

「ぬうっ！」

四人の男の短い悲鳴とともに、更に四つ質量が重い音を立てて位置エネルギーを消費しつつ滑落してゆく音がした。

「こーゆーの勘弁しろよっ!!」

外でガブリエルが喚いて取り巻きと言い争う声が聞こえたが、それもやがて遠ざかった。それと入れ替わるようにして、

「ただいま、戻りました……はあ、暑い……」

いっそ呑気すぎるほど呑気な声屋が、汗を拭き拭き階段を上がってくる。何も事情を知らない彼は、真奥とアラス・ラムスが無事に戻ってきているのを確認して顔をほころばせたほどだ。「今そこで誰かとすれ違いましたが、またMHKの集金人でも来ましたか？」

「……お前、なんつーか、平和だな……てか、この非常時にどこ行ってたんだバカ」

「は？ え？ は？」

外の暑気にも関わらず冷たく暗い空気が場を支配していることに声屋もようやく気づく。

「……さて、事情が分からない声屋は置いておいて」

喧噪が過ぎ去り、凍った空気を動かしたのは、漆原だった。

「これからどうする？」

※

すっかり日も落ちて、夜のとばりに包まれた魔王城。

「うー」

悪魔の王の名を冠するその城の、主たる悪魔の王の間で、世界征服を画策しエンテ・イスラを恐怖に陥れた魔王サタンと、その野望を打ち砕くべく立ち上がった勇者エミリア・ユステイナが対峙していた。

「だうー」

魔王城全体に緊張と殺気が満ち満ちて、ほんのわずかな刺激で張り裂けそうなほどに戦いの予感をはらんでいた。

「にやーにやー」

かすかなそよ風、雨の一滴、路傍の小石、そんなさやかなものですら、この緊迫した空気をかき乱すのに十分な威力を持っている。

「まーま、まーま」

拮抗した気迫と殺気が今まさに最高潮に達しようとしたそのとき、

「わぶっ！」

魔王と勇者の間を駆け回っていた者が足をもつれさせ、危うく王の間の中央にある卓の角に頭をぶつけそうになった。

「!!」

魔王と勇者は同時に反応し、手を差し伸べる。

そして、危ういところで救出に成功するが、同時に手を出したため、魔王の手が勇者に触れてしまった。

「さ、触るなっ！」

「いてっー つ、爪が……」

勇者が心底揺動した声で魔王の手を払い、魔王の手に一本、赤い筋が走る。血がにじんだわけではなく、ほんのちよっと、肌が赤くなっただけだ。

「お前さっきからなんなんだよ！」

「あなたこそ、ほとんど人任せだったくせに手を出さないでもらえる!?」

「お、お前だって似たようなもんだろうが！」

「だめなの、けんかやーの、だめなの！」

言い争う宿敵同士の間を割って入ったのは、魔王と勇者よりも、ずっと小さな小さな影。

「あ、いや、別にケンカしてるわけじゃないぞーアラス・ラムスー」

「そ、そうよー、だから泣かないでねー」

「……ほんと？」

大人の胡散くさい棒読みの言葉を確認するように、アラス・ラムスは心配そうな顔を全面に押し出して二人を見上げた。

「ほ、ほんとほんと！」

「本当よー」

「にへ」

曇りかけるようにして息をするように嘘をつく魔王と勇者を信じた少女は、安心した様子で満面の笑みを浮かべて『まま』である恵美に縋りついた。

「まま、ずーっといるの？」

「え、ええつとー」

「……っ！……っ！」

見えない所から合図を送ってくる真実。恵美はうるさそうにそれを無視し、

「アラス・ラムスは？ 私……ままに、いてほしい？」

「うん、まま、ずっといっしょ」

「あー……」

恵美は心底困り果てて、それでもなんとかそれを悟られないように笑顔で困惑を押し込める。

「ばばもいっしょ！」

「お……」

続けざまに放たれた矢には、真奥も抗う術を持たない。

そしてまた、気まずい沈黙。

気まずい沈黙に構わず、恵美の背中によじ登ろうとするアラス・ラムス。

千穂の乱入により、真奥と恵美が傷つけられた末にアラス・ラムスを奪還される、という最悪の展開だけは免れることができた。

だが結局のところ、面倒が先延ばしになっただけなのだ。

アラス・ラムス本人がどれだけ嫌がったところで、真奥も、そして神学に精通する鈴乃も、イエソドのセフィラが天界に属するものであることは認めざるを得ない。

そして今、アラス・ラムスに関わる誰一人として、ガブリエルに抗う術など持たないのだ。

サリエルの特殊能力を例外と思えば、恵美と鈴乃はなんとか戦う力を持っていることになる。だが、二人とも、積極的に戦う理由を持っていないのも事実だ。

ガブリエルが去った後。セフィロトの樹。という聞き慣れない単語に疑問を發したのは当然のように千穂だった。

「セフィロトの樹とは、天界に存在する『世界の全てを世界たらしめている樹』で、セフィロトの樹に生る実を口にした者は、不老不死や無限の知恵すら得るといふ。神に作られた最初の人間は、禁を破ってこの実を口にし、楽園を追放されたそうだ」

「地球にもそういうのがあります。聖書のアダムとイブとか、似たようなお話が……」

鈴乃は千穂の言葉に頷くと、先を続ける。

「その樹に生る十個のセフィラという実が、世界や命の様々な要素に対応しているらしい。惑星や色や金属や宝石だといふが、例えば……第一のセフィラ・ケテルは魂、思考、想像を司るとされ、対応する数字は「1」、宝石はダイヤモンド、色は白で、惑星は冥王星の星、守護天使はメタトロンだ。第四のセフィラ・ケセドなら、神の愛を司り、数字は「4」、金属は銅、色は青、惑星は天王星の星で守護天使がツァドキエルと言った具合だ。十のセフィラそれぞれにそういった、世界の要素に対応する性質があって、アラス・ラムスが色鮮やかなものに惹かれるのは、きつとセフィラのそういった色と重ね合わせているのだろうな。ちなみに第九のセフィラ・イエソドは、アストラルと呼ばれる精神世界や自我を司り、数字は「9」、金属は銀、色は紫、惑星は天蒼星、そして守護天使はガブリエルだ」

鈴乃の解説に、しばし座は呆気にとられた。

「……お前、それ全部覚えてるわけ？」

真真が尋ねる。

「神学しんがくの基本だ」

「わけわかんない。三行くらいにまとめてよ」

「もともと大天使のお前が何を言うかつ!!」

漆原うるははのやる気のない言葉に、鈴乃すずのが突っ込む。

「まあまあ……漆原さんですから」

千穂ちほの一言で、鈴乃は釈然しやくぜんとしないものを感じつつも、なぜか納得してしまった。

「どうしてこの子は最初、イエソド、じゃなくて、アラス・ラムス。って名乗ったのかしら？」  
この疑問は恵美けみだ。

「この子が欠片かけらであるからなのか、他に理由があるのか分からないが、少なくともガブリエルが名付け親ということはなさそうだな。今のところ、ガブリエルは一度も『アラス・ラムス』という名を呼んでいない。とにかく、語られている伝説を信じるという前提で、アラス・ラムスが本当にセフィロトの樹のセフィラ、イエソドの欠片……一部ののだったとしたら、ガブリエルが言っていたことは筋が通る。要するに、イエソドのセフィラが司る世界の要素に危機が迫っていることになる。世界の危機、ということだ。ガブリエルが守護天使として世界のバランスを保つためには、アラス・ラムスが必要なんだ」

「そんな……じゃあ、アラス・ラムスちゃんは、やっぱり嫌らないと……」  
千穂が悲しげな声を上げるが、



「それが、そうとも限らない」

解説をした鈴乃自身がそれをあつさり否定するので、千穂は驚いた。

「セフィロトの樹やセフィラが世界の構成要素の大元だとか、守護天使たちがそれを管理しているなどという話は、実際のところ聖典や神話がそう言っているだけだ。誰かがそれそのものを見たことがあるわけではないし、検証が行われているわけでもない」

「検証って……」

「例えば、第十のセフィラ・マルクト。は……」

鈴乃がそう言った途端、

「まるくとー！」

アラス・ラムスがその単語に反応する。

「……そう言えば、アラス・ラムスが観覧車で、『まるくとと仲良し』みたいなこと言ってたが、もしかしたら、マルクトや他のセフィラにも、アラス・ラムスみてえな人格が宿っていたりするのかな？」

真奥の問いかけに、鈴乃は困惑して首を横に振る。

「私は聞いたことがないが……だが、私ですら聞いたことがない、ということとは、私が今言おうとしていたことにも繋がるかもしれない」

「おお、話の腰折ってすまねえ、続けてくれ」

真奥に促されて鈴乃は頷く。

「その、マルクトは生命の樹の下段に位置して、物質世界を司り、数字は「10」、宝石は水晶、色は明るい黄色やオリブ色など複数、惑星は生命の大地、つまりエンテ・イスラを象徴する。伝説を信じるなら、このマルクトがなんらかの理由で消滅したら、水晶や黄色やエンテ・イスラの存在が危うくなるというわけだ」

鈴乃は一度言葉を切つて座を見渡す。

「しかし冷静になつて考えてみる。どこかの世界にある木の実が消滅したからと言って、世の中の全ての水晶が一齐に消滅するさまを想像できるか？ 木の実一つで、大陸や海の存在を危ぶませるなど、どんな物理現象だ。聖典の言う「最初の人類」が食べた禁断の実がセフィラと関係あるのか無いのかも、様々な解釈があり今なお結論は出ていない。先ほど魔王が言っていたように、セフィラには固有の人格と呼べるものがあるのかもしれない。つまりセフィロトの樹が世界を支えているなどという話は伝説に語られているだけで、なんの証拠も無い。天界と意思疎通したものは大勢いるが、行つたことのある人間は誰もいないからな。だからアラス・ラムスがなければ世界が危くなるなどというような事態は、私は無いと思つてゐる」

「お前、そういうとこ、結構ドライなのな」

「……だが、いずれにしろ、天界や天使が存在することだけは間違いないし、向こうがイエソドの欠片を取り戻したがつていくなれば、今の我々に抗う術は無い。まったく、理不尽だ」

全員の視線が、真奥の膝に抱えられているアラス・ラムスに集中する。

「……ったく、辛気くせんなあ」

真奥はその視線を、耳をはじりながら受け止めた。

「おい、アラス・ラムス」

「なーにばば」

「さっきのおじさんは、お前をおうちに連れ帰りたいらしいが、行きたいか？」

「や——」

激しい拒否。明確な拒否。

「そっか」

真奥はびしやりと胡坐をかいた膝を打ち、

「よし、話し合い終了。明日奴らが少しでもアラス・ラムスが嫌がることしたら徹底抗戦だ」

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ!!」

当然恵美は食ってかかる。

「あなた状況分かってるの!? ペルも私もおおっぴらにガブリエルなんかと事を構えられないし、アルシエルやルシフェルだって力を取り戻したわけじゃないのよ!?」

「分かってるよ。だからイザとなったら俺一人でやるさ」

「一人でってバカじゃないの!? 今のあなた一人で何ができるって言うのよ!?」

「おい、しつこいぞ。俺が一人で立ち向かってぼこぼこにされて、お前らなんか損することあるのか？」

「……っ、え、……そ、それは……」

「俺は俺のわがままで、アラス・ラムスを返したくないだけだ。理由はアラス・ラムスが嫌がつてるから。お前ら人間的には、俺が負ければ魔王討伐完了で万々歳だし、イエソドの欠片があるべき天界に帰るだけだ。なんか文句あつか？」

「でも……でもっ!!」

「魔王！ 貴様それでいいのか！」

「真奥さん！」

納得がいかない恵美と、黙っていられなくなった鈴乃と千穂。三人に詰め寄られて真奥は目を白黒させる。

「お、おい芦屋、漆原、なんとか助けろ」

「……し、しかし、魔王様、それではあまりにも……」

「……僕は……まあ、別に、どっちでもいいけど、最近押入れも悪くなかって悪いはじめたところだから、調子狂うな」

「な、なんだよお前らまで」

「ここまで言われて分からないのか貴様は！」

鈴乃が真奥に食ってかかる。

その剣幕に驚いたアラス・ラムスが真奥の膝から転がり落ちるが、

「すずねーちゃ、だめ、ばばいじめたためー！」

ばばの危機に、小さい体を精一杯広げて鈴乃の前に立ちはだかる。鈴乃は冷静にアラス・ラムスを横にどけると、改めて真奥の胸ぐらを掴みにかかった。

「貴様が魔王かどうかなどこの際関係ない！　だがな、私達全員……ルシフェルですら、アラス・ラムスが嫌がる場所に行くことを容認しかねる!!　アラス・ラムスが嫌がる場所に行かされるなら、まだ貴様の所にいた方がマシだ！」

「……その発言は聖職者としてどうかとも思うが……」

「私は聖職者だが政治家だ！　大体何百年も探してる間なんともなかったものを、今さら出てきて管理<sup>マナ</sup>者面するなどおこがましいにもほどがある！　セフィロトの樹<sup>ツ</sup>なぞ、嘘<sup>ウソ</sup>っぱちだ！」  
論理も何も無い、聖職者としてあるまじき決めつけた。

「……要するにあれだろ、お前ら」

「なんだっ！」

「何よ」

「……なんですか」

「なんでしょう」

「なんだよ……」

真奥は、歯を見せて困ったように笑う。

「アラス・ラムスのことが好きになっちまったんだろ？」

「……っ」

鈴乃は一瞬息を呑む。

「……ありがとな」

魔王の口から、放たれるはずのない言葉。それなのに、何度も放たれている言葉。

「でも、聖なるものに反逆するのは魔王の専売特許だ。お前らには荷が重すぎる。俺は自分のわがままで、神様の所有物らしき子供を奪いたいだけだ。だから、もし明日ガブリエルと事を構えることになっても、手は出さなくていいからな」

鈴乃は瞭然として、真奥の胸ぐらを掴んでいた手を離してしまふ。

「……ま、うまく行ったら御の字ってことで、当たって砕けろって感じだな」

「……」

「ちよつと！」

「真奥さん！」

「魔王様！」

「……これだよ」

「うるせえお前ら！」

サラウンドで弱腰な発言を責め立てられた真奥はばたばたと手を振る。

「少年漫画じゃあるめえし、気を強く持っただけでどうこうできるような生易しい相手じゃねえつつの。最悪のこと考えてリスクマネジメントするのが大人だろうが！ おい惠美！」

「何よ！」

「お前今日、うち泊まってけ！」

全員の頭の中に、リスクマネジメントってなんだっけ、という疑問が横切った。

「……ええええええええ！」

「一体これの何がどうリスクマネジメントなのよ」

惠美は、足を横に流して膝の上にアラス・ラムスを乗せたまま真奥を睨み、アラス・ラムスはままだっこしてもらってご機嫌で足をばたばたさせている。

「おう、万が一ガブリエルとドンパチやりあうことになった場合、お前を巻き込んでなし崩し的に戦ってもらおうという俺の深謀遠慮が光る素晴らしい計画だ」

「……本気で言ってるわけじゃないわよね？」

「七割方本気だ。前にも言った気がするが、たまにはお前が厄介事解決したってパチは当たら

んと思うぞ」

「魔王の厄介事なんて解決したら、それこそバチが当たるわ」

「ばち？」

偶然なのだろうが、アラス・ラムスが手をばちっと叩きながら単語を復唱したおかげで、気の抜けた空気が一瞬流れる。

「まあ、七割本気だが、三割は俺も真面目に考えてる。別に俺の味方をしろとは言わないが、万が一ドンパチやらかすことになったら、アラス・ラムスが怪我しねえくらいには立ち回ってくれよ」

「まあ……その、別に、それくらいなら……でも、残りの三割ってなんなのよ。それが分からなきゃ、守れるものも守れないかもしれないじゃない。本当に何か考えてるの？ 本当に、この子の思い出作りするだけなの？」

真奥が言うには、ただで負けるつもりはないが、これと言って勝算があるわけでもないのです。アラス・ラムスが連れ去られたとき、向こうで強く生きていけるように楽しい思い出はできるだけ多い方がいいと考えているらしい。

その結果が、家族本人らずの寢床である。

アラス・ラムスは今までいい子にしてはいたものの、やはり時折ままとを求めてぐずることもあった。万が一のために、せめて一晩でもままと一緒に寝かしてやりたいというのは親心とし



ては普通のことだろう。

千穂がこの案に全面賛成し、鈴乃も淡い顔をしつつ承諾する。声屋は頑強に抵抗したが、結局鈴乃の部屋で万が一に備える、という条件付きで同意した。漆原はパソコンさえあればどこでだって眠れる。

今回に限っては誰も安全を保障できないので、千穂は早くに帰宅する、という条件を付けて、恵美は仕方なく魔王城宿泊を了承した。

声屋が千穂を家まで送り届け、その後漆原と二人で鈴乃の部屋に厄介になる。本来の敵味方が入り乱れた、なんとも奇妙な部屋割りだ。

恵美の質問に、真実は何気ない顔で、ごく当たり前のことを言った。

「親らしく子供のために命を賭けるだけだな。ま、あんま心配すんな。イザってときにはお前に迷惑かかることには多分ならねえよ」

「……その自信はどこから湧いてくるのよ」

「根拠なんかねえよ。でも不思議なもので、アラス・ラムスのためならなんだってできそうな気がしてくるんだ」

「魔王のくせに誰かのためとか言えた義理？ 気を強く持ったって意味ないみたいなこと言っでたくせに」

「だから今、きつと報いを受けてんだらうよ。でも、俺や魔王軍の侵攻で死んだ奴らだって、

きつとテメエのガキを助けるためなら最後まで諦めずになんたつてしただろうさ。なら、魔王の俺に、命張つてガキを守るくらいのができねえはずがねえ」

穏やかな口調でそう返されて、皮肉を飛ばしたはずの恵美が逆に狼狽えてしまう。

「……な、何よ……魔王のくせに、悟つたようなこと言わないでよ」

恵美はなんだか自分の方が相手を傷つけたようなことをした気がして、そんな眩しさが出せず目をつもらしてしまった。

真奥の言葉は、故郷の村で引き離された父の顔を思い起こさせる。

真奥の言う通り、これは報いだ。大勢の人々の命を、父と自分を引き離した悪魔の王として受けるべき報いだ。

それなのに何故だろう。まるで恵美は溜飲が下がらない。

あの魔王が、自分と同じ目に遭つて苦しんでいる。それなのに、どうしてこんなに胸が苦しくなるのだろうか。

「まま？」

そんな恵美を、心配そうに見上げるアラス・ラムス。

真奥は二人の姿を見て、少しだけ口の端を上げた。

「さつてと！ そろそろ寝るか！」

「え、えええっ!?」

真奥は時計を見上げて複雑な空気を断ち切るような明るい声でそう言った。

「ま、まださすがに早すぎない？ 十時前よ？」

「大人の俺達は良くても、アラス・ラムスはもう寝かきなきやダメだ。徹夜したって、明日がブリエルが来る時間は変わらないぞ」

「で、でも……でも」

「まーま、いっしょにねるの！ みんなでいっしょにねるの！」

「ううううう……」

魔王城には布団が無い。タオルケットが数枚あるだけだから例え三人一緒に寝たとしても、単なる川の字の雑魚寝であって、決して同衾どうきんというわけではない。

だが恵美にしてみれば、かつてやむにやまれず宿を求めたときとは違い、アラス・ラムス之間に挟み真奥と接近して横にならなければならぬ、というだけで抵抗があるのだろう。

それは真奥だって同じことだ。アラス・ラムスが寝付いた瞬間に寝首を搔かかれるかと思うとおちおち背も向けられない。

だがアラス・ラムスはままとばばと一緒に眠れることが楽しみなようで、これから寝るといふのに奮起ふんきして、押入れからタオルケットを引っ張り出そうとしてぐちゃぐちゃにしている。

「ああ、おいおい、まだ転ぶぞ」

「アラス・ラムス、おいで。そこのダメババにやつてもらうから」

惠美は真奥がのろのろと寢床の用意をするのを見ながら、

「……電気の小玉はつけておきなさいよ」

用心と確認のためにそんなことを言う。

「あたりめえだろ。真つ暗だとアラス・ラムスが怖がる」

そういう理由で言ったわけではなかったのだが、なるほど、確かに小さな子供にとって闇は恐ろしいものだろう。

「あ、そうだ……アラス・ラムスの寢巻とか無いわけ？」

「寢巻？ ああ……そうか、考えてみりや、服それだけしかないんだよな」

タオルケットを三枚出した真奥は、アラス・ラムスの黄色いワンピースを見て手を打った。

「ちよつと……洗濯とかちゃんとしてたんでしょね？ お風呂とか入らせたの？」

アラス・ラムスが来て数日、この夏場に着衣が一枚だけ、という今さら判明した事実、惠美は驚きを隠せない。

「ちゃんと銭湯には連れてったし、洗濯もしてるぞバカにすんな。夏場だからすぐに乾くし、その間はおむつ一丁で部屋の中走り回ってたぜ」

「……信じられない」

呆れ顔には構わず、真奥は壁にかけたアラス・ラムスの麦わら帽子を見る。

「結局帽子しか買わなかったもんな。笹塚のユニシロに子供服売ってたっけかな」

「うにひろ？」

「だから、そうなんでもかんでもユニシロで片付けようとしなくてよ。女の子なんだから、もうちよっと可愛い服とか探そうと思わないの？」

「そんなこと言われても売ってるとこ知らねえもん」

「これだから男ってのは……」

「ま、あれだ」

真奥は何気ない様子で立ち上がって、電気の紐ひもに手をかけようとする。

「そんな明日が来るように、頑張らなきゃならんわけだ」

「……え、あ、うん」

虚うつろを突かれて、自然に顔かほく恵美に、難しい会話は全て聞き流しているアラス・ラムスは、

「まま、ままここー」

アラス・ラムスは、自分の隣の畳をびしりと叩く。

「は、はいはい」

恵美は真奥を警戒しながらも、居心地いこちが悪そうに、ゆっくりと体を横たえた。

恵美が完全に横になったのを見計らって、真奥はアラス・ラムスをけしかけた。

「ほら、ママがいなくなっちゃわないように、ぎゅっとしてろ」

「ん、ぎゅ」

「わっ……」

惠美は満面の笑みでしがみついてくるアラス・ラムスを、戸惑いながらもゆっくり抱きしめた。

「あれ？ アラス・ラムス……何持ってるの？」

抱きしめたアラス・ラムスと自分の間に、何か堅い薄いものが挟まっている感觸。

「しゃん！」

それは、観覧車で購入した台紙付きの写真だった。

「相当気に入ったのね……でも寝てる間持ってたから、ぐしやぐしやってやつちやうわよ。枕元に置いておきなさい」

「あう」

惠美はやんわりと写真を取り上げて枕元に置くのを、アラス・ラムスは名残惜しそうに目で追う。それを見た真奥は少しだけ笑って、

「消すぞ」

予告してから、前言通り小玉だけ残して電氣を消した。

「っしょっと」

光量が落ちた室内に目が慣れない惠美は、予想以上に近い場所から、真奥の声が聞こえてきて全身に鳥肌が立ってしまう。

「ち、近いわよっ」

「俺だってお前になんか寄りたかねえよ。アラス・ラムスがこっち掴むんだからしょうがねえだろ」

見ると、この暗闇の中、おねむの様子だったアラス・ラムスがいつの間にか、恵美のシャツと真奥のシャツを両手でしっかりと捕まえていた。

「……変な真似したら、殺すわよ」

「だから、ガキの情操教育に悪い言葉を使うんじゃないの？」

「何よ、悪影響が服を着て歩いてるような存在のくせに」

「そんなばばでも、アラス・ラムスは好きだもんない？」

「ん……にひひ」

「否定されてるんじゃないの？」

「照れてんだよ。いっちゃまえにな」

「ねーばばー、おはなししてー」

早くも声に眠気が混ざりはじめたアラス・ラムスが、寝物語をねだった。

「ん？ お話か。ままのじゃなくていいのか？」

「ん……ままはあした……」

「っ……」

無邪氣なアラス・ラムスの予定を聞いて、惠美の胸にちくりと刺が刺さる。

真奥も複雑な微笑を浮かべてから、アラス・ラムスのお腹をやさしくばんばんして、何かを思い出すように虚空を見上げる。

「んー、そうだな、昨日の続きでいいか？」

「うん」

「よし、どこまで話したっけなあ……えつと」

「たびびとが、てんしにあつたの」

「おお、そうだったそうだった。よく覚えてたな、偉いぞ」

「にひ」

アラス・ラムスと真奥の会話を不思議そうに眺めていた惠美は、ふと真奥が自分の方を向いたので、小さく息を呑んだ。

「寝付けなかったり、さびしがつて泣くときは、仕方ないからずっとお話してやってたんだよ。初日のあれば、まさかおむつとは思わなかったが」

「……別に聞いてないわよ」

惠美はぶっさらばうにそう言うが、真奥は構わず、ゆっくりとした調子で「お話」を始めた。

「さて、ええとだ、怪我をした貧乏な旅人が、天使様に助けられたところからだったな」

悪い悪魔にいじめられて怪我をした貧乏な旅人は、優しい天使様に命を助けられました。



天使様は、旅人が聞いたことのないお話を、いっぱいしてくれました。

高い高い山のお話。広い広い海のお話。深い深い森のお話。王様のお話。お姫様のお話。お店やお金のお話。お野菜やお魚の話。兵隊さんのお話。神様のお話。星の世界のお話……。

旅人は、わくわくしながらそのお話を聞きました。

ある日、天使様は、旅人にお守りをつづプレゼントしてくれました。

旅人は天使様にもらったお話とお守りを大事に大事にしながら、また旅に出ました。

お話とお守りの力で、旅人はやがて王様になって幸せに暮らしましたとさ。

「……すひゅー……」

「……めでたし、めでたし。……んじやおやすみ」

どの段階から眠ってしまったのかは分からない。それでも真奥は最後まで物語を語り終えろと、さっと恵美に背を向けた。

夏の夜の虫の音だけが、しばし部屋の中を支配した。

「……ねえ」

「……あ？」

穏やかに寝息を立てるアラス・ラムスの髪を撫でながら、恵美は尋ねた。

「その旅人は、王様になった後、どうなったの？」

真奥は願っただけのそりと振り返る。小玉の明かりの中でも、馬鹿にしたように眉根が寄ってい

るのが分かった。

「お前、子供寝かしつけるための適当な作り話だぞ。そんなこと知るかよ。幸せに暮らした、めでたしめでたしでいいじゃねえか」

「故郷に帰ったり、天使を探しに行ったりはしなかったの？」

「……あのなあ」

「いいじゃない。明日は私がお話しなきゃいけないのよ。参考にさせなさいよ」

「……」

恵美がどういうつもりで『明日』と言ったのか、真奥には分からなかった。だから呆れ返った顔をわざと見せて、また恵美から顔をそむける。

「あんま難しい設定作っても、ガキは分からないぞ。これくらい適当で丁度いいんだ」  
取り合わない真奥。恵美は不満そうに眉をひそめる。

「話変わるけど」

「もう寝ろよ。お前と喋つてるとケンカになって、アラス・ラムスが起きちゃう」

「どうして、旅人は、王様になったのに、よその国を欲しがったの？ 幸せで、めでたしめでたしのはずだったのに」

「……」

「……ねえ」

それは、本当に小さな眩くらきだった。

「王様になって、きつと欲張いきばりになったんだろ」

「え？」

「……アラス・ラムスが続きを知りたがったら、適当に作って聞かせてやるよ」

ほんの少しだけ早口になった真奥は、そう言いうと殊更ことさらに大きく寝息を立てはじめた。

アラス・ラムスではないのでこんな一瞬いつしゆんで眠れるはずもないが、要するにもう何を聞かれても答えないぞという意思表示なのだろう。

するとその寝息に呼ばれたように、アラス・ラムスが恵美から手を離し、真奥の脇腹わきばらにひつついた。

「……」

それを見た恵美は、もう一度だけアラス・ラムスを撫なでると、タオルケットをアラス・ラムスの肩まで上げてやって、自分は二人に背を向けた。

視線の先は、二〇二号室側の壁だ。

「……本当、ヒネくれてるわね……心配で、とてもじゃないけど任せていられないわ」  
そんな独り言が、自然と漏れた。

ヴィラ・ローザ管塚の二〇二号室で、鈴乃と漆原は無言のまま座っていた。

時代を感じさせる桜の木を使った鏡台に、古式ゆかしい丸型卓袱台。真新しい桐箆筒。

家具は和風のもので統一させているが、冷蔵庫はフアミリータイプの最新型省エネモデルで、廊下に出ている洗濯機は殺菌乾燥エアアイロンまでこなすドラム式。だがアンペア数の問題か、電子レンジは魔王城のものと大差ない簡素なものだ。

扇風機は、一体どういう仕組みか羽が無いのに楕円形の枠の中から風が吹き出してくるタイプの最新モデルで、漆原が物珍しげに、枠に手を入れたり出したりしている。

「……何事もないか」

そこに、玄関から戸屋が入ってくる。

「千穂殿は、きちんと送り届けたのだらうな」

「もちろんだ。別れ際までずっと、魔王様たちのことを心配していらっしやった」

「しかし、こればかりは、千穂殿を巻き込むわけにもいくまい」

「もちろんだ。佐々木さんにもしものことがあつては、我らの生活は立ちゆかないからな。どのような形にしろ決着がついたと認められるまでは、魔王城に近づかないよう言つてある」

「……まあ、それはいい判断だ」

鈴乃はそういうことを言つたわけではないのだが、あえて反論はせずに戸屋を中に入れる。

所在なげに部屋の中央に腰を下ろした芦屋に、鈴乃は改めて問いかけた。

「アルシエル、一つ聞かせろ」

「なんだ。宿代なら払わんぞ」

「誰がそんなケチくさいことを言うか、貴様じゃあるまいし。お前たち魔王軍のことだ」

鈴乃は、抱えていた膝から顔を上げて、尋ねた。

「お前たちは、何故世界征服などしようと思った」

鈴乃は、日本を探せばどこにでもいるような小市民の男二人の横顔に問いかける。

「何故、お前たちが世界征服などしようと思ったのか、私は分からなくなった」

「……………その冷蔵庫、いいものだな」

「は？」

芦屋の返事は、全く噛み合っていないように思えた。

だが芦屋は、鈴乃が先日恵美の勧めで購入したエコ機能満載の最新冷蔵庫を見て、真面目な顔で言い切る。

「その冷蔵庫を開ければ、昨日買った野菜や肉や牛乳が入っている。今日の献立に足りない物を店に買いに行つて、美味しい物を作つて食う……………きっと、魔王様も我々も、そういうものを求めて、エンテ・イスラに攻め入つたのだと思う」

「……………」

「分かんないいいき。いずれにしろ、我々はまた、エンテ・イスラに戻るために、毎日勤勉に働くのみだ……分かつてるな漆原」

「……僕はまあ、働くようになったら働くよ」

「貴様」

隣と、状況をわきまえてか、書屋と漆原の言い合いは比較的穏やかに進む。

鈴乃はそんな二人の声を聞きながら、またゆつくりと、抱えた膝に顔を落とした。

※

「……………」

早い時間に昇る朝日と、早い時間にかかるりはじめの気温のダブルパンチで、恵美は目が覚めてしまった。うつすら目を開けると、板張りの見慣れない天井の染みが見えて……。

「……………!! つと……………」

やむにやまれず魔王城に宿泊したという事実を思い出し慌てて飛び起きようとして、

「……あぶない」

アラス・ラムスが、自分の腕に縋りついて穏やかな寝息を立てていることに気づいた。

勢いに任せて飛び起きていたら、アラス・ラムスも一緒に起こしてしまうところだった。

安堵のため息をついた恵美は、首だけ動かしてアラス・ラムスの向こう側にいる真実を見る。なんともみっともない寝姿だった。

いくら暑いとはいえ、Tシャツの腹を放り出して、大口を開けていびきをかいている。鼻提灯が出ていないのがいつそ不思議なほどだ。

「ん……………」

アラス・ラムスが起きないようにそっと腕を離す。触ったら起きてしまうかとも思ったが、相当深い眠りなのかまるで覚醒する気配が無い。

時計を見ると、まだ五時前。随分と目が昇るのが早くなったものだ。

タオルケット一枚で畳の上に直で寝たために、全身が凝り固まっている。恵美は首や肩をはぐしながら、せめてアラス・ラムスの分だけでも布団を買わせなればと思い、一つ大きなあくびをする。

隣りの鈴乃の部屋からは何も聞こえない。寝ているのだろうか。とりあえず千穂がきちんと帰宅したかどうかが気になるところだ。

恵美は傍らのアラス・ラムスの髪を一度撫でてから、自分のバッグを引き寄せ、持ってきたホーリービタンβの瓶を取り出し一気に飲む。

ガブリエルがいつ現れるか分からないし、万が一戦闘になった場合に備え、少しでもエネルギーを補充しておいた方がよい。

もちろんアラス・ラムスを守るためであり、決して魔王の口車に乗ったわけでもなんでもないので。

「アラス・ラムスのためよ、アラス・ラムスのため」

ぶつぶつとそう呟きながら、口の中に残るビタミン臭に顔を顰める。

「顔洗おうかな」

そう言いながら台所のシンクに目を向けた恵美は、

「やつ、おはよー」

その瞬間まで、真奥とアラス・ラムス以外の存在が部屋にいることに全く気づかなかった。

「……つぐつ……!!!」

台所側の恵美の視界の死角にいたその男は、恵美が反応するよりも早く恵美の口を手で塞ぐ。

「暴れないで、手荒な真似はしないからさー」

「むぐつむぐぐ」

恵美は足で真奥を蹴飛ばそうとするが、ほんのわずかに届かない。

「無駄だよー。みーんな気持ちよく眠っちゃってるからー、当分は起きてこないよー」

にやけた声の主を口を塞がれたまま睨み返すと、問答無用で右手に意識を集中させる。

「つと、それはちよつと危ないな」

すると男は、あつけないほど素直に恵美の口から手を離し、距離を取った。



距離を取ったと言っても六畳間の中だけの話なので、都合二間ほどしか彼我の距離は無く、余裕で恵美の聖剣の間合いの中だ。

「近頃の天使は、本当にマナーがなくてないのね。人を誘拐したり人の靴に発信機つけたり、人の家に無断で上がり込んだり……」

天使らしい神秘さなど欠片も見えないにやけた顔つきの男は、不敵に笑う。

「やー、でもほら、魔王城ならぎりぎりセーフじゃない？ 一応悪い奴の本拠地だしー」

「随分お早い到着ね？ それとも日付が変わったからって強引にこの子を連れていくつもり？」

恵美はすつと右手をガブリエルの喉元めがけて差し出す。

二人が瞬きするほどの間に、進化聖剣・片翼が恵美の右手に出現し、その切っ先を大天使の喉元に向けた。

「ちよっと、僕昨日、話し合いしようって言わなかったっけ？ 問答無用って感じだね」

「アラス・ラムスの件はともかく、私の聖剣も欲しいんでしょ？ 私の目的を果たす障害を排除するのに、手加減する理由はないわ」

「ったくやだねー、最近の女の子は揃いも揃って気が強くて。そりゃー草食系男子とか溢れるはずだよ。怖いもん最近の女の子」

生来の性格なのか、それとも大天使敵の余裕なのか、聖剣を突きつけられてもガブリエルに

動揺は見られない。

「あー、それから、一応誤解を解いておくけど、魔王や隣の人たちが起きないの、僕が術を使つたとか結界張つたとか、そんなんじゃないから」

「……どういうこと」

「や、多分だけど、昨日とかあんまり寝てなかったんじゃないの？ 隣は不寝番のつもりか、はんの一時間くらい前まで頑張ってたけど、ついさっき全員落ちたしき。本当、君だって全然起きなかったんだよー？ 僕この部屋に来てからコンビニで買ってきたお弁当あっためて食べて、トイレ行って、庭でラジオ体操やつたのにそれでも皆起きないんだもん、道にきみしいよねそういうの」

「……」

そう言えば、昨日の真奥は、夜十二時まで勤務を続けていたのに、アラス・ラムスに早朝に叩き起こされたと言っていた気がする。

「で、天界一の紳士を志す僕としては、一家の寝込みを襲うようなマヌはしたくないしさ。だから、君か魔王か、どっちか起きるの待って、一応もう一度相談の末、納得してもらおうと思つてずーっと待ってたんだよねー……その、だから、ちよつと刃物しまおうよ刃物」

ガブリエルは媚びるような上目遣いしながら突きつけられた切っ先をそつと指先でつまんで押し戻そうとするが、恵美はそれを許さない。

天使のくせに即日コンビニ弁当だラジオ体操だと俗っぽいものに染まるような奴も、これ以上増えてたまるものか。

「僕サリエルと違って、聖法氣防ぐ方法とか持っていないからさ、そのね、おつかん 稔便ねんべんにお願いしたいの、ほんと」

「……よく言うわ」

「へ？」

「どうせ今頃、アパートの周りを昨日の連中が取り囲んでるでしょ？ あれが天兵連隊とかいう奴らね？」

惠美の挑発的な問いに、ガブリエルは本気で慌あわてた。

「僕は僕の欲しいものさえ手に入ればいいから、誰かを傷つけようなんて気は毛頭ないけど、仕方ないじゃん。昨日の魔王、やる気まんまんて感じだったし、一応用心のために遠くから見張らせてる。あ、でも僕一人でかなりゲートの容量食っちゃってるから、ぶっちゃけあいつら大して強くないよ。爆りはこの子とか連れて爆るとなるとますます容量不足するし。そういうことだから、お願いだから話聞いてちょんまげ」

「……っ」

「わー！ー！ 今ちよつと首に切っ先食い込んだ!? 勇者のくせに刃物で人を脅おどすスキルに長けてるよこの子！ 怖いよ!?」

惠美が無言で押し出した切っ先がガブリエルの首に当たった。別に傷ついたわけではないが、ガブリエルは表面上慌てふためいている。

そしてさすがに二人でこんなことをしていれば、

「……うっせえな、何騒いでやがんだよ……ンだよまだ五時じゃねえか……っておいしい？」

前日寝不足たろうがなんだろうが、隣で騒いでいれば起きるというものだ。

目が覚めたら惠美と見慣れぬ男が聖剣を挟んで、いい加減狭い六畳間で対峙している。

「ういーう……ばあ？」

ついでにアラス・ラムスも起きた。あまりの急展開に真奥は頭が回らない。

「ガブリエル……お前いくらなんでもこんな早い時間に……」

「あ、魔王サタン、おはよう。早くにこんな格好でごめんねー。やー、僕もこの後色々予定詰まってるさー」

真奥はとにかくアラス・ラムスを抱きかかえて自分の膝に隠すが、魔力の備蓄がほとんど無いのに、ここまで接近されるまで気づけないようでは万休すだ。

「ほ、ほらー、子供の前で刃物はダメよ刃物はー。情操教育上よろしくないからしまつてー」ガブリエルはそんな調子のいいことを言う。

だが、さすがにそんな口車に乗るわけにはいかない。聖剣をしまったとたんに襲いかかってこないとも限らないのだ。

天兵連隊を弱体化させてでも自ら出張ってきたということは、それだけの自信があるということだ。ガブリエルという名の天使に限って、見た目通りの軽佻浮薄な男であるはずがない。「私だって別に、好き好んで天界や天使と事を構えたいわけじゃないの。そっちがつかってくるから仕方なく戦うだけだね」

「わー……怖い論理だよー」

ガブリエルは世を憐むような淡い顔をして、肩を絞めた。

「じゃあ仕方ないからこのまま話すけど……喉仏が切っ先に当たるより、怖いよー……まあ一応僕から譲歩するとね、僕は最悪、聖剣がその子かどっちか持って帰れば、今はいんだ。もう僕は全部正直に話すから、君たちの選択肢は二つだ。渡すか、渡さないか」

泰然としたガブリエルは、上げた両手をばたばた振って面倒くさそうに話す。

「世界の礎であるセフィロトの樹で僕が管理してたイエソドのセフィラが、随分前に盗まれたのよ。盗んだ犯人は、パチ当たりなことにイエソドのセフィラをいくつもの欠片に分けてあっちこっちにバラまいちゃったの。エミリア、君の進化聖剣・片翼も、魔王の後ろの子もそんなイエソドの欠片から生まれたもののなの。で、そういうものが天界の外に長くあるのってマジいのよ」

「聖剣が……イエソドの欠片から？」

ガブリエルは人差し指を立てて、まるで今朝見たニュースの内容を話題にするような気軽さ

で話を進めてゆく。

「そだよー。ほら、そこ、埋まってるじゃん。紫色のタリスタルが」

ガブリエルは指と目だけで、惠美の聖剣の柄元を指し示す。

進化聖剣・片翼の柄には翼があしらわれ、その中心には確かに、紫色の宝石の装飾が嵌め込まれていたが、それは単なる意匠以上の意味は無いと惠美は勝手に思っていた。

「中でも。進化聖剣・片翼は結構危険だね。回収優先順位は高かったんだけど、サタン、君がエンテ・イスラを攻めるまでずーっと行方不明だった。もう何百年もかけて少しずつ少しずつ欠片を回収してるんだけど、聖剣とその子の元の欠片はなかなか見つからなかったのよ。んでね、僕も自分の失態を明るみにしないために、なんとか欠片をこっそり回収したんだけどさ、やつば長いこと一人で勝手やっているとダメね。僕が神に造反してるんじゃないかって疑われて、サリエルにばれちゃったんだ。危うく墮天させられるところだったよーはっはー」

自分で言っただけで笑うガブリエル。周囲の冷たい空気などどこ吹く風だ。

「一体何が危険なの。聖剣は、魔王を倒すために絶対必要な物で、何も危険は無いはずよ」

「俺にとっては危険だがな」

真奥の茶々は無視された。

「や、それ君たち人間……っていうか、イエソドの欠片を手に入れた昔の教会が勝手に言ってるだけだし。それにどう危険かを言っちゃったら、必死に追いかけてたの全部水の泡だもん、

それは答えられないよー」

「そんな……勝手にって」

「大体さあ、魔王や悪魔にだけ有効な剣とか、そんな都合のいい武器あるわけないじゃない。進化聖剣・片翼<sup>ハヅレ</sup>は聖法<sup>せいぽう</sup>気由来で力が増減するんでしょ？ ああ教会騎士団とかが使う武身<sup>ぶしん</sup>鉄光<sup>てつこう</sup>と、何が違うの。素材が違うだけで、聖剣は、対悪魔専用兵器<sup>へいぎ</sup>ってわけじゃないんだよー」

「そんな……だって、聖剣は魔王城で私達を魔王のいる所まで……」

かつてエンテ・イスラの魔王城に突入した際、聖剣はその輝きで、悪美達を真っ直ぐ魔王の元へと導いたのだ。だからこそあの広大無辺の魔王城をごく短時間で攻略できたのだ。

「多分、それ魔王のいる所じゃなくて、その子のいた所だよ」

ガブリエルは事もなげに言う。

「イエソドの欠片同士が引き合った、ただそれだけのとき。まあそのせいで、逆にその子の発見が遅れちゃったんだけどねー」

欠片同士の反応が起こった後、何があったかといえば、勇者と魔王の大激戦である。勇者は聖剣の力をいかになく発揮し、大立ち回りを演じた。

「反応が強かった聖剣のおかげで、もともと微弱だったその子の欠片の反応がかき消されちゃったみたいね。で、その後エミリアが聖剣もろともこっちに来ちゃったおかげでまた反応が途切れるわ、どこに行ったか分からないわでもうてんやわんやだったからさー。まさか魔王の園

芸趣味に擬態されているとは思わなかったしー」

真奥が最後にクリスタルから生まれた木の鉢を見たとき、二本の幹が絡まり合いはじめたばかりで、葉もまだまばら、実や花などは見られない程度にしか育っていなかった。

そもそもあのクリスタルがこんなことになるとは思ってもいなかったもので、最近まで完全に忘れていたわけだし、よく無事に育ったものだと思つていたとき。

ガブリエルが突然、聖剣の刃を驚掴みにした。

惠美は驚いて刃を引こうとするが、剣は微動だにしない。

「無駄だよー。コピー用紙で指の腹切っちゃったくらいには痛いけど、でも今の聖剣じゃ、よっぽどのがない限り僕は倒せないよー。だからさー」

ガブリエルはひょうひょうとした態度のまま、真奥に目線をやる。

「もう事情は分かったでしょ？ 頼むから大人しく、僕のお願ひ聞いてよー」

これは、つまり最後通告だ。

もし惠美がガブリエルと戦う意思を見せたところで、結果は分かりきっているというアビール。魔力を蓄積しているわけでもない真奥が何をやったところで勝ち目はない。

もちろん鈴乃たちの力をアテにしたところで結果は変わらないだろう。

となれば、真奥の取り得る手は、たった一つしかなかった。

真奥は、大きく息を吸ってガブリエルに向き直る。



恵美と、そしてガブリエルは、真奥がやけっぱちになって特攻を繰り出すのかと緊張するが、

「……え」

「な、なにしてるのよ!?」

ガブリエルも、そして恵美も、予想だにしなかった行動に出た。

「頼む」

土下座をしたのだ。

魔界の頂点に立ち、今なお世界征服の野望を抱くと公言する魔王サタンの化身が、大天使に向かつて頭を垂れたのだ。

「アラス・ラムスを、連れていかなくてくれ」

豊に額をつけて、真奥は真摯にそれだけを言った。

「ばば……?」

アラス・ラムスは真奥の行動の意味するところが分からず、真奥とガブリエルを交互に見る。

「あのね、僕は天使で、君は魔王だ。昨日の女の子みたいになわけにはいかないんだよ」

なんとか呆れたような口調で返事するガブリエルだが、真奥はその返答を予想していた。

「もちろんタダでは言わねえ。俺の首と引き換えでどうだ。悪い話じゃないだろう」

「はあ!?」

「ちょ、ちょっと!? バカなこと言わないでよ!?」

これにはさすがに二人とも仰天した。

「あ、あなたは私が倒すのよー！ こんな所で勝手に自分の命投げ出さないでよー！」

「うっせえな。大天使のご加護を受けて倒したとかなんとか吹聴すりやいいじゃねえか。なんの不都合がある」

「大有りよっ!! 誰が好き好んでこんな連中の助けなんか借りるもんですか! あなたは私がこの手で倒さないと意味ないの!」

「お前の都合なんか知るか! いま大事なのはアラス・ラムスだ!」

「あー、その、僕をはったらかしにして夫婦ゲンカしないでくれるかな?」

「誰が夫婦だ(よ)っ!!」

「わーお……なんて息の合いようだ……」

ガブリエルは半ば感心したようにそう言った。

「ばばもままもけんかだめなのー!!」

ガブリエルとアラス・ラムスの意見が一致した稀有な瞬間である。

「一つ聞いていいかな。なんで魔王の君が、そんなにこの子にこだわるの。つい最近まで、存在も忘れてたんでしょ?」

「王」になって、『あの悪魔』と同じように目先の欲に目が眩んで、大切にしなきゃいけなかったはずのこのことを忘れたからだ!」

振り下ろされた爪に囚われ、紅い空と大地に死を見た、あの日を。

「こいつは、死の淵から救われて、生まれ変わった俺が手にした、希望の象徴だ。……なのに、俺はいつの間にかそれを忘れて、『悪魔の王』になっていた」

サタンという名の取るに足らない悪魔であつた真奥貞夫は、体を起こすと、アラス・ラムスをゆっくりと抱き寄せる。

「ばば……ちよつといたい」

アラス・ラムスは真奥の腕の中で、むずむずともがいた。

「今まで何百年とはっておいても大丈夫だったんだろ？ 俺の命に免じて、こいつを、こいつの嫌がる場所に連れていくのだけはやめてくれ」

「……まるで俺がその子を連れ帰つてもものすごく酷いことするみたいになつてるけど、何度も言うけども、もともとイエソドの欠片であるその子は天界の……」

「俺は『古の大魔王サタン』の伝説を知っている――」

恵美は、真奥がそう言い放った瞬間、ガブリエルの表情が一瞬にして強張るのを見た。

古の大魔王サタンとは、昨夜真奥が言っていた大昔の魔王のことだろうが、一体それがガブリエルになんの関係があるのだろうか。

「……だから、行かせられない。行かせたくない。頼む。今はこいつを……っ!!」

最後まで言い切ることができずに、真奥は膝をついた。

「悪いけど、予定変更ね」

「が……はっ……」

ひざまずいた真奥は、苦しげにもがく。聖剣を抑えられている恵美からはよく分らないが、どうやら呼吸が止められているらしい。

「や、正直ここまでする気無かったんだけどさ、ちよつと君、それは墓穴だったよ。いかに濃厚な僕でも、それ聞かされちゃ実力行使に出ざるをえない」

「こあああああああ……!」

「ま、魔王っけ」

ガブリエルがそう念を押すように顔を近づける。その瞬間、真奥の首が恵美の目にも分かるくらい、まるで見えない腕で握られているようにへこみはじめる。

「魔王様ー 魔王様、何事ですか!!」

「下がっているアルシエル、武身鉄光でぶち破るー」

と、そのとき急に外の共用廊下が騒がしくなり、芦屋と鈴乃の慌てふためく声が聞こえてきた。た。

「あー、これだけ騒げば起きるかー。でも無駄だよー。ちよつとやそつとじゃ破れないよーその結界はー」

まるで動じないガブリエル。実際外から重いものでドアを殴る音が聞こえてきたが、第六十

年のアパートのドアにはヒビ一つ入らなかった。

そしてこんなときですら、漆原の声は聞こえない。多分、一人だけまだ寝ているのだろう。

「勇者エミリア。悪いけどさ、後継の憂いなきように、魔王サタンは僕が処理するよ。君にも事情はあるだろうけど、まあ最悪教会とかにきつき魔王が言ってた大天使の加護でーみたいなことご託宣下しとくからそれで手え打ってくれない？」

完全に絶望的な状況だった。

魔力の無い悪魔達に為すすべはなく、聖剣は封じられた。

「ねー、エミリアいいでしょ？」

ガブリエルは真実を見たまま、恵美に尋ねる。本当に、道を尋ねるくらいに気軽なものの言い方。その程度にしか、人間の世界を見ていないものの言い方。

「……お断りよ」

「へ？」

「今夜は、私がお子にお話してあげる番なのよ。連れてかれちゃ、約束破ることになっちゃうじゃない」

「えー……マジでー……」

恵美の返事に、言葉の上では落胆し、感情の上ではそれほど気にもしていないと分かる声。恵美の苛立ち<sup>いらだち</sup>は、更に募る<sup>たふさ</sup>。

「あなたたちお偉い存在の事情なんか知ったことじゃないわ！ でもね、魔王サタンを斬るのは私よ！ 他の誰にもやらせるもんですか!!」

「いやー……今時そんな使い古されたセリフはどうかと……」

「第一ね、嫁がる女の子を父親から引き離すようなのに、いい奴はいないのよっ！ 天光炎斬!!」

「お？ おお、わ、わっちやちやちやー あっついよあっついよー ちょっと何すんのー!」

惠美は聖剣の刃に炎をともらせる。

堕天使のルシフェルをも切り裂いたそれはしかし、ガブリエルの掌を焼いていない。

「い、一応なんともないように見えるけど熱いんだかなー つたくもう、君に手荒なマネはしたくないのにさー、どうして分かってくれないかな？ もともと僕が管理してたんだよ?」

「たのんでないもん!」

「や、頼まれちゃいないけどそれが僕の役目であって……」

「……」

「ぐ……がはっ……」

「今の……誰?」

鬱陶しそうに適當な受け答えをしたガブリエルすら、真顔になった。

「わたしたちはたのしくあそんでただけなのに」

その声は、恵美の、ガブリエルの、真奥の、足元から届いた。

「まるくとがいった。あなたたちは、うそつきだって」

小さな足、小さな手、つぶらな、だが意思の強そうなその瞳。

「うそをついて、かみさまになったんだって！」

アラス・ラムスは、もがく真奥にそっと手を触れた。それだけで、

「つかはっ!! げホッ……げえっ」

「ええええ!!」

ガブリエルの拘束が緩み、真奥は冷や汗を流して呼吸を取り戻す。

「あたし、あなたのこと、だいっきらい！」

「えー……」

アラス・ラムスはガブリエルに歩み寄る。

「あたしたちをひきはなしたこと、あたしたちをとじこめたこと、それに」

その瞬間、アラス・ラムスの額に紫色の三日月の紋章が浮かび上がり、纏う黄色いワンド

ースから、真夏の太陽のような閃光がひらめいた。

「ばばとままをいじめるやつ、ぜったいゆるさない……!!」

「のわっ！」

「きやああっ!!」

黄金色の光に吹き飛ばされて、ガブリエルは魔王城の壁に叩きつけられた。はずみで聖剣がガブリエルの手から離れて、恵美が自由になる。

「アラス……」

「まってて、ばば！」

「わ、ちょっ!!」

立ち上がれない真奥の脇から、黄金色のオーラを身に纏ったアラス・ラムスが、弾丸のようにガブリエルの胸元に飛翔する。

「ぐえええっ!!」

ガブリエルは潰されたガマガエルのような声を上げながら、アラス・ラムスごと壁を突き破って吹き飛んでゆく。

「あ、アラス・ラムスっ! 天光駿靴っ!!」

恵美は真奥のことはほったらかしにしたまま、破罪の衣を一極集中することで得られる高速移動術を用いその後を追った。

「エミリアっ!」

「魔王様っ!!」

と、ガブリエルがいなくなったことで結界が解除されたか、突然ドアが爆音ごとぶち破られ、鈴乃と声屋が転がり込んできた。



身動きが取れない真奥と壁に開いた大穴を見て、芦屋は顔を憤怒の形相に染める。

「おおおおおのれエミリアっ!! なんとる非道なマネを!!」

芦屋の思考回路とこの状況では当然そうなるだろう。だが、

「ちが……ガブリエル……アラス・ラムスが……」

「何っ!? 奴が来たのか!?」

「アラス・ラムスが、戦ってる、早く、追いかけて……げはっ」

「アラス・ラムスが……」

「戦っている?」

芦屋と鈴乃は、状況がまるで呑み込めないまま、しばし壁と真奥を交互に見るしかできなかつた。

「鈴乃、頼む、俺を、上に……」

苦しげにうめく真奥を見て頷く鈴乃だが、

「止まれ人間! 魔王サタン!!」

「ガブリエル様の邪魔はさせん!!」

突然現れた、昨日の四人のガブリエルの部下が、アラス・ラムスのぶち破った穴を塞ぐように飛来したではないか。

天兵連隊である彼らも、その背には白い翼がはためいている。

「くっ……てめえら……」

戦うにしても、戦闘能力を持っているのは鈴乃だけだ。ガブリエルがいくら弱いと評したところで、天兵連隊というポジション相手では一対四はどう考えても分が悪い。

だが、

「へえ、誰に向かってそんな口聞いてるわけ？」

新たにかかった声に、なぜか四人の天使の顔が強張った。

「ガブリエルの子飼いかきが偉そうに、僕らに下がれとか言えた立場なわけ、へえ？」

「う、漆原？」

いかにも寝起きといった様子の漆原が、気たるげに玄關に寄りかかりながら四人の天使を睨みつけていた。そして、

「そこだけよ」

なんてことのない一言。だが。

「……」

四人の天使が、素直に道を開けるではないか。

「真奥、ベル、大丈夫だよ。こいつら僕が邪魔させないから、行ってきたよ」

「ど、どうしたことだ？」

「戸屋、僕がもともとどういう悪魔だか忘れてない？」

漆原は不機嫌そうな顔で、舌打ちをした。

魔王軍に於いては悪魔大元帥の地位にあるルシフェル。だが数多の聖典や伝説に語られる堕天使の前身は、暁の子と呼ばれ、神に取って代わろうとした、天界最高位の天使であった。

「堕ちる前は、これでも大天使筆頭だよ僕は。ガブリエル本人相手じゃこうはいかないけど、あいつに顎で使われるような天兵連隊の雄兵如きが、僕には逆らえるはずないだろ？」

堕ちた者相手でも、上位格の天使に逆らうことができないのは天界の摂理である。

だが、暁の子どころか夕方にかけて明け方に寝るような日もある生活リズムが崩れまくったニート堕天使にすら逆らえない杓子定規な摂理とあつては、真面目に働いているであろう天兵連隊が少し気の毒になってくる。

「お前……本当に時々役に立つな、おい……」

「時々は余計だよ、真奥。それよりさっさと行きなよ」

「お、おう、鈴乃、頼む！」

「よし、ハンマーの打面に乗れ！ 振り落とされるな！」

天使が空けた道を、鈴乃と真奥は、早朝の大空向けて飛び出した。

「アラス・ラムスっ!？」

惠美は、笹塚の遙か上空で、それを見た。

意思を持った流星のように高速でガブリエルに突撃するアラス・ラムスと、防戦一方のガブリエル。

「いたっ、あだだだだだっ！」

「ガブリエルー アラス・ラムスから離れなさい！」

「ば、僕だって離れられるものなら離れたいって……!!」

惠美の牽制に注意がそれたガブリエルの顔面に、アラス・ラムスが全力で頭から突撃する。目をそむけなくなるような衝突の後、ガブリエルはペットポトルロケットのように軽々と更なる上空へ放り出された。

「アラス・ラムス！ 大丈夫だ！」

鼻の頭を押さえてスッ飛んでゆくガブリエルなど気にもせず、惠美は空中でアラス・ラムスを抱き寄せる。

「理不尽だああー どう見たって僕の方がやられてんじゃん！」

少し上の方で泣き言を喚きながら、大きな翼を広げて急制動をかけるガブリエル。

「あーもう！ 僕そんなに戦い得意じゃないのにー！」

空手の右手から、ガブリエルは顔の横で拳を握る。そして、

「じゃーん！ 剣がでっかくなっちゃったー!!」

一体なんの物真似だか知らないが、物騒なものを取り出したガブリエルに、惠美は言う。

「こんな子供に剣向ける気!?」

「あのねっーサーカス団の猛獣使いが、暴れるクマやライオンに素手で立ち向かったりしますか!? 管理者だからって常に余裕こいてられるわけじゃないの!」

「も、もう一度言ってみなさい! アラス・ラムスをクマとかライオンとか言ったわね!?」

「僕は分かりやすい例出しただけだよー なんて急に母性発揮して怒っちゃってるのさー!」  
「まよ、きをつけてー あのけん、すごくつよい!」

そんな惠美を守るように、アラス・ラムスはガブリエルとの間に立ちはだかる。

「うん、強いよー。逆に言うとな僕がこれ出そうと思うくらい今の怖かったんだけどねっ」

余裕のあるものの言い方こそ変わらないが、アラス・ラムスに言われなくてもガブリエルが持つ、その一見なんの変哲もないロングソードが普通のものでないことくらいは分かる。

「ガブリエルの剣……デュランダルね?」

「せいかーい。これねー、特別な法術がかかっているわけじゃないけど、とにかく頑丈で、なんでも斬れるの。どんなつまらぬものでも斬ってしまっちゃうよー。多分、進化聖剣・片翼だって例外じゃない。僕も管理者だからさー、欠片の一つに負けるわけにいかんのよ。例え正体がイエソドの欠片でも、女子供斬るのって後味悪いからさ、できれば降参してほしいんだけど」  
「……そう言われて降参すると思う? 余裕を見せた悪役ってのは、負けるって相場が……」

その瞬間、惠美の傍らを微風が通り過ぎ、右手に軽い衝撃が伝わった。

「やー、紳士気取つてると、フラグブレイカーとか呼ばれるんだわこれが」

ガブリエルの声は、後ろから聞こえた。

「っ!!」

その瞬間、惠美の中から急激に聖法気が消滅する。

なんと、聖剣の刀身が半ばから折れていた。いや、斬り飛ばされていた。

虚空にホタルのように明滅した聖剣の刃の残滓が光る。切断面は鏡のように光っていて、ガ

ブリエルに斬り飛ばされたのだと気づくまで、惠美は動くことすらできなかった。

「ままっ!!」

それはアラス・ラムスも同様だったらしく、惠美の元に飛翔してくるが、体当たりするしかないアラス・ラムスがもしデュランダル之刃にかかったら……。

「イエソドの欠片である、進化の天銀の核だけ持っていけばいいからさ、まあ、聖剣がどうなろうと知ったこっちゃないのよね」

ガブリエルは、格好をつけようと思ったのだろう。デュランダルを肩に担ぐとして、

「いてっ! 肩切った!」

なんでも切れるというその両刃の剣を肩に載せてしまい、衣服と肩口を自分で斬ってしまっている。

「ねえ、アラス・ラムス」

「……なあに、ママ」

一人芝居で馬鹿をやっているガブリエルに構わず、恵美はアラス・ラムスに尋ねる。

「……………」「ばば」のこと、好き？　ずっと一緒にいたい？」

「うん！」

アラス・ラムス。即答にして迷いなし。

「あ、でもね、ママもすきな、ママともはなれたくないの」

そのあと慌てたように付け足すのがなんともいじらしい。

「そう」

恵美は小さく微笑んだ。

「じゃあ、大好きなばばと引き離されようとしてる子を、見捨ててはおけないわね」

恵美は、氣力を振り絞って聖剣に聖法氣を注ぎ直す。

砕けた刃が徐々に補修され、第一段階の形状を取り戻した。

最初よりも若干細く頼りないが、それでも、

「守るべきものを幸せにするためなら、とことん欲張りになってやるわー」

「うえー………なんか、凄く面倒なことになりそー」

氣力で氣を補う恵美と、心底嫌そうに顔をゆがめるガブリエル。

「……悪く思わないでよね。こんなこと言うて僕が悪人みたいだけども」

ガブリエルが、剣術の基礎などまるで無視した適当な構えを見せる。だが、あの速度と威力と切れ味に少しでも引つかかれば、おそらく命はあるまい。

「言っておくけど、君から手を出してきたら僕も真剣に応戦せざるを得ないよ？ それ覚悟して、かかってきてよね」

「子供が泣くのを見るのに比べたら、どんな相手だって怖くはないわ！」

「その子、確かに子供の格好してるけどイエソドのセフィラなんだよ元は……って、こんなこと言うて、やっぱり僕の方が悪役じゃーん」

ぶつくり言うガブリエルにはもう取り合わず、惠美は絶望的な戦いの算段を立てようとする。万全の状態でも、刀身を斬り飛ばされたのだ。切り結んではならない。一撃で、ガブリエルを仕留めなければ……。だが、あの速度をどう捉えれば……。

「どっせーい!!」

その瞬間、ガブリエルの背後から、高速で襲いかかる者がいた。

「ま、魔王っ！」

「ばばっ！」

「うげっ！」

鈴乃の大槌に乗って上空までやってきた真奥は、あろうことか真後ろからガブリエルに組み



ついた。

真奥が大槌から飛び上がると同時に、鈴乃がガブリエル目かけて武身鉄光を振り抜く。

「武光烈波!!」

鈴乃のかけ声とともに振り抜かれた大槌の打面から発生した衝撃波は、真奥に組みつかれたまま大槌本体を回避しようとしたガブリエルの尻に直撃し、

「うおおおおお!!」

「うわああああ!!」

真奥を背負っているおかげで重心が体の上の方にあつたガブリエルを、物凄い勢いで空中回転させる。

「はああああああせええ!!」

「だれがはなすかああああ!!」

大回転の中で、大天使と魔王の繰り広げる戦いとは思えないほどヤボった時間が経過する。  
「惠えええ美しい!! 今のうちにいいい!! 俺ごと斬れえええ!!」

ぐるぐる回りながら聞こえてきた真奥の絶叫に、惠美はようやく我に返る。

「ば、バカっ!! アラス・ラムスの前で、そんなことできるわけないでしょ!!」

「ばああああ!! 今しかああチャンスはああああ!!」

「ふんっ!!」

「ぎやっ！」

ガブリエルだって、いつまでも回ってちやくれないのだ。

その瞬間にガブリエルは小蛇を払う程度の方で、真奥を引っぺがして空中に放り出した。

「だああああ!!」

真奥はこれまた回転の慣性を受けたまま、猛スピードで吹っ飛び、やがて落下しはじめる。

「ま、魔王っ!!」

鈴乃が慌ててそれを追うが、彼女の飛行速度で追いつける距離と速さではなかった。

「まま」

そんなやり取りをどうしようもなく眺めていた恵美に、突然アラス・ラムスが、尋ねてきた。

「……なあに、アラス・ラムス」

「ままは、ばばとずっといっしょ? ままも、ばばのこと、好き?」

この非常時に、なんと言うことを言い出すのだろうかこの子は。

あれだけ目の前で大喧嘩を展開したのに。魔王と、人間の区別がついているくせに。

恵美はつい可笑しくなって、微笑んでしまった。

子供を、傷つけるわけにはいかない。でも、嘘をつくわけにはいかない。

「私は、そうね、きつとばばと一緒に」

「ほんと?」

心の底から嬉しそうな笑顔になったアラス・ラムスに、恵美も笑顔で答えた。

「ええ、本当よ」

それは、本心からの、額面通りの言葉である。

「死が二人を分かつまでね」

真奥貞夫が魔王サタンである限り。

「わーい!!」

アラス・ラムスが子供らしい快哉を上げたその瞬間、

「!?」

まさしくそれは、空震と呼べるほどの衝撃を伴った。

鈴乃は落下する真奥を追っていたが、超スピードで傍らを通り過ぎた何者かに仰られて、危うく自分の飛行制御を失いかけた。

なんとか体勢を立て直したときにはもはや真奥は地面に叩きつけられるタイミングであったが、

「ばば」

地面すれすれのところで、真奥は空中に制止していた。

否、アラス・ラムスの纏う黄金色の光に抱き止められていた。

「アラス・ラムス……お前……」

「ねえばば、まま、ずっとばばといっしょだって」

「は？」

真奥はアラス・ラムスが何を言い出したか分からず、四肢を投げ出した間抜けな姿のまま、ヴィラ・ローザ笹塚の庭までわずか数十センチの場所で浮遊したまま首を傾げる。

「だから、ばばもさびしくないよね」

「お前、何言って……」

「あたし、ままとばばと、ずっといっしょにいるね」

「へ？」

無邪気な言葉と、その光は、ほとんど同時に発せられた。

柔らかな、羽毛のような温かみのその光が、一瞬で、真奥の視界に満ちる。

「だからちよつとだけ ばいばい」

真奥が支えを失って、地面に落下した瞬間、既に黄金色の流星は天高く向かって急上昇していた。真奥はそれを下から見上げながら、どうすることもできなかった。

ようやく地上に降り立った鈴乃のことなどまるで目に入らず、真奥は叫んだ。

「アラス・ラムス……っ!!」

真奥の絶叫に應えるように、遙か高空で、光の乱舞が起こり、それは朝の太陽の光を受けて

もう一つの太陽のように、銀色に輝いた。

「ガブリエル。悪いけど、第三の選択で、手を打ってもらうわよ」

満月の日のような清かな光を放つ、白銀の手甲と脚絆を纏ったエミリアがそこにいた。

聖剣を握る右手には、柄の護拳に当たらない、指の出たシンプルな手甲。空手の左には、流線形のシールドがついた、重厚な手甲と、同じデザインの白銀の脚絆。

それは、今まで具体的な形状を持たず、単なる光として出現していた破邪の衣の一部が、具現化した姿だった。

両腕の手甲と脚絆以外の箇所は、今までと変わらず光の衣のまま。しかし手甲で握りしめる『進化聖剣・片翼』は、デュランダルに斬り飛ばされた先端すら、白銀の輝きを帯びて復活していた。

「なんてこったー……そうかあ、教会が君に与えた『進化の天銀』は、一つじゃなかったんだっけねー、忘れてたよー」

ガブリエルは、真剣な表情でデュランダルを構え直す。

「見たとこそその破邪の衣に核となる欠片は見当たらないけど、そりゃ、あの子も惹かれるわけだよ。やばいね、そんなやり方で進化するなんてさすがに予想外デス……ここから本気で……」



っ！」

顔に鬨志を漲らせながらも軽い調子を崩さなかったガブリエルのすぐ横を、何かが通過する。そして次の瞬間、

「ぬあああつー！！ え？ え？ 何なに？」

背に鋭い痛みが走り、ガブリエルは叫び声を上げてしまう。

それは、未だかつて経験したことのない。痛み。だった。天界の大天使として、人に傷つけられた経験などほとんどないガブリエルにとっては、未知の痛みであった。

「こ、こ、これはっ……!!」

ガブリエルの左腕が、浅く、本当に浅く切り裂かれていた。

だが、それはガブリエルにとって有り得ない出来事だった。さっきまで聖剣の刃を素手で握みしても平気だったはずのに。

「……天使の血も、私達と同じで赤いのね」

惠美は……否、勇者エミリア・ユスティーナは、進化聖剣・片翼の先端にわずかについた血を振るい落とすと、ガブリエルに向き直った。

「退きなさいガブリエル。私は天界と事を構えるつもりは毛頭ないの。ただ、あの子が泣くのを見たくなかっただけ」

エミリアはさびしそうに目を伏せる。

「そ、そういうわけにはいかないなあ……僕だって、引き下がれない事情があるんだよ。何百年、そのイエソドの欠片を探したと思ってるんだい？」

「へえ、じゃあ、その剣で、まだ私と戦うつもり？」

「!!」

ガブリエルは、今度こそその顔から余裕を消滅させた。

神話に語られる大天使の剣デュランダルの先鋒が、先ほど、進化聖剣・片翼がそうなったのと同じように斬り飛ばされているではないか。

それだけではなく、デュランダルの鏡のように鮮やかな切り口から刀身にヒビが走り、次の瞬間には灰のように原型を失って崩れ果ててしまった。

「……ど、どうやら、退くしかないみたいだね、これは」

思ったよりもあっさり、ガブリエルは降参した。

「でも、僕も、そしてサリエルだって、きつと諦めないよ。いずれイエソドの全ての欠片は、僕たちが回収する。そのときまで預けるだけだ」

「負け犬の遠吠えにしては上等ね。でも、一つだけ分らないの。魔王が言ってたように、今まで何百年も放っておいても何も無かったのに、何故今になってそこまで必死に集めようとするの？」

エミリアのその問いに、ガブリエルは東の隅、啞然として口を開けた。



「……驚いた。この期に及んで、君がそれを言うのかい？」

「？」

ガブリエルの言うことが分からず、エミリアは目を細める。

「……君は、自分がどんな存在なのか、もう一度よく考えてみることにだ。そして今の僕との戦いの意味をね。そうすればいずれきつと分かるさ」

謎めいた言葉を吐いたガブリエルは、エミリアの返事を持たずに、崩壊したデュランダルを握っていた手を、突然更なる上空に向かって掲げる。

「そのときの君の選択が、世界の安寧を優先してくれることを願うよ。決して」  
その手から、更なる光が放たれた。

「大魔王サタン、の災禍を、再来させないためにも」

「な、なんだっ？」

一瞬強い光が上空で炸裂し、真奥と鈴乃は一瞬顔をそむける。

巨大な爆発のようにも見えたが、光が収まってまた視線を上空に向けると、何かが落下してくるのに気づいた。

鈴乃は大地を蹴って飛空し、それに接近を試みる。

「え、エミリアっ!?」

すぐに落下してくるのが人間で、それが恵美であることに気づいた鈴乃。

負傷したのか、先ほどの光の爆発で意識を失ったのか。力なく落ちてくる恵美の真下に入った鈴乃は、ぐったりとした恵美の体を危ういところで受け止める。

「エミリアー! 無事か!?」

完全に脱力しているように見えた恵美だが、声をかけるとあっさりと目を開いた。

「……ああ、ベル……うん、無事よ。私は。あと、ガブリエルもいなくなっただわ」

「何っ!?」

鈴乃は驚いて、上空の光の爆発の残滓を見上げる。

するとそこには、かすかにきらめく光が残るのみで、あとは変わらぬいつもの笹塚の空が広がっていた。人影はどこにも見当たらず、もちろんガブリエルの姿も無い。

だが、鈴乃はそれで安心するようなことはしなかった。

人影が無い。

この空には鈴乃と、恵美しかない。

「おい恵美っ!」

下方から、そちらを見なくても青い顔をした口から放たれたと分かる声がした。

「アラス・ラムスは、どうした」

「……」

「アラス・ラムスはどうしたんだ!?」

「……」

ゆっくりと降りてくる恵美と鈴乃を見ながら、真奥は、我知らず声が高くなる。

恵美が、しかめた顔をそむけたことで、この上なく嫌な予感が背筋を伝う。

「まさか……ガブリエルが……」

恵美は、何も答えなかった。

答えない代わりに、

「もー……どうすりゃいいのよ、この状況……」

誰かに文句を言うように、口の中で独りごちたのだった。

※

「おいちーちゃん」

バイトを上げる時間になって、千穂は木崎に呼び止められた。

「あ、木崎さん、お疲れ様です」

「はい、お疲れ様。ちよつと時間いいか」

「大丈夫ですよ、どうしたんですか？」

午後九時。木崎に手招きされた千穂は、なんとなく用件が分かっていた。

「例のあの子、親戚のところに帰っちやったのか？」

やはりそのことが、千穂は心の中で頷く。

「やっぱり、分かります？」

「なんとというか、抜け殻のようだったからな」

真奥のことだ。

まさに、今日の真奥は精彩を欠くの一言だった。つまりぬ凡ミスを連発し、声に張りが無く、逆に木崎が心配になるほどいつもの真奥とはかけ離れた仕事ぶりだった。

「こればかりは本人の気持ちの決着を待つかないが、困ったものだ……すまないが、この状態が続くようだったら、ちーちゃん、少し仕事面でフォローをしてやってくれ」

「はい、分かりました」

「私はちよつとばかりきついことを言ったからな。あまり甘い顔をするわけにもいかない」

「大丈夫ですよ、木崎さんが真奥さんのために思って言ってるの、真奥さんもちやんと分かっていますから。それじゃ、お先に失礼します」

「ああ、気をつけて帰りなさい」

木崎に一礼して千穂は店を出ると、時間を確認してから豊塚駅の方向へ歩きはじめた。

アラス・ラムスは、消えた。

ガブリエルとともに飛び出した惠美が、一人で帰ったのを見て、真裏はまさに、打ちひしがれたといった様子だったという。

千穂は早朝にあったという惠美とガブリエルの戦いを、鈴乃から伝え聞いたただだった。

ガブリエル一党のことが気になって朝一番でヴィラ・ローザ笹塚に駆けつけた千穂を待っていたのは、

「アラス・ラムスが……いなくなつた」

鈴乃の、そんな衝撃の一言だった。

外の階段で、鈴乃と、苅屋と、津原が遠方に暮れたように座り込んでおり、二階の壁にはとんでもない大穴が空いていた。

異世界の者が引き起こす超常現象に慣れてきている千穂には、一目で戦場の跡だと分かった。大騒ぎが起こったのに近所で騒がれたり通報されていないのが気にはなったが、今はそれどころではない。

「あ、苅屋さん、これは……っ」

「魔王様は……無事です。魔王城にいらつしやいますが……今は一人にしてほしいと」

「アラス・ラムスちゃん……どうなつたんですか？ あのガブリエルって人が、何かしたんですか？」

千穂は勢いでガブリエルの名を出すが、

「分かんないんだよ。エミリアも、なんか真奥と同じように気が抜けちゃったみたいでさ」

千穂の疑問に答えたのは漆原だ。

「一番考えられるのは、アラス・ラムスがガブリエルに連れていかれてしまったということだ」

「そ、そんなっ!」

千穂は悲痛な叫び声を上げる。

「今回は天兵連隊に見張られていたから、魔王に魔力を取り戻させる暇も手段も無かった。セフィロトの樹の守護天使相手に、エミリアもよく抗しえたとは思えない……幸いにしてエミリアも魔王も大きな怪我はしていないが……残念だが、連れていかれた可能性が一番高い」

「でも、仕方ないんじゃないの? アラス・ラムスがイエソドのセフィラの欠片だったんなら、ガブリエルが天界に連れて帰るのは自然な流れだ。そもそも僕らにあの子を保護する義務なものにも無……」

「漆原さんっ!!」

千穂は、漆原がそれ以上言う前に大声で遮った。

「それ以上言ったら、許しませんよ!」

「……………なんだよ」

不貞腐れたように口をとがらす漆原は、それでも一応口を閉じた。

「……遊佐さんは、どうしたんですか？」

「エミリアは、既に帰宅しました。今日も勤務だからと……戦いで荷物や衣類がぼろぼろになつてしまったというのに分かりますが……奴も情の無いことで……」

芦屋が力なく答える。

「佐々木さんも、とりあえず学校に行つてください。今、魔王様は……」

芦屋は、沈痛な面持ちで二階の大穴を見上げた。

「多分、誰とも話したくないと思いますので……」

千穂は釣られて一緒に見上げるが、その瞬間、胸に何か得体の知れない気持ちがかみ上げてきて、思わず涙をこぼしてしまった。

「す、すいません……それじゃ、私」

それをごまかすように、慌ただしく三人に一礼して、千穂はアパートを後にした。

「アラス・ラムスちゃん……」

学校への道すがら、千穂は小さなリングの少女の名を呟き、また一筋、涙をこぼした。

ほんのわずかな時間しか一緒にいなかったはずなのに、千穂ですらこれほどの喪失感を抱くのだ。まして父親と慕われていた真奥の心の内はどれほどだろう。

こんなときにも、自分は、真奥のそばにいないことすらできない。

無力さに、歯噛みした。

「……あ、メール」

靴の中で携帯電話が震えていることに気づいた千穂は、涙を拭って取り出した。

「蓮佐さん？」

恵美からのメールだった。そこには、今日何時でもいいから会えないか、という旨の内容が書かれていた。

今日は学校が終わった後夜までバイトであることを返信すると、夜でもいいから会えないかとのこと。そこまで言うなら、断る理由も無い。

そして今、アルバイト雇りの千穂は、恵美の姿を笹塚駅の構内で見つけた。

「蓮佐さん、お待たせしました！」

「あ、千穂ちゃんごめんね、疲れてるところ呼び出して」

そう言う恵美の方が、よほど疲れたような表情をしている。

彼女なりに、やはりアラス・ラムスの喪失が心に重くのしかかっているのだろうか。

「いいんですけど……どうしたんですか？」

「えっとその……私がおくるからさ、その、エキセントリック・シオールに入って話さない？ 店の隣の席、空いてるから」

「え？ あ、はい、いいですけど……」

笹塚駅のモールの端にあるエキセントリック・シオールに入り、恵美はブレンドを、千穂は



アイス豆乳ラテを注文する。

店の隣の、周囲からあまり目に入らない席に陣取った恵美は、クッションの効いた席に深く腰かけ、大きく息を吐いた。

「今朝のこと、誰かから聞いた？」

そして、開口一番そう切り出してくる。やはりその話か。千穂も沈痛な面持ちで頷いた。

「……アパートに行きました」

「そう……」

「あの……アラス・ラムスちゃん、やっぱり、連れていかれちゃったんですか？」

「……」

恵美は、千穂よりも更に深く憂いを帯びた顔で、額にしわを寄せている。

やはり、そうなのだ。

「……私に、もっと力があつたら……」

「そんな、遊佐さんが悪いわけじゃ……」

「……私に、一人でガブリエルと戦えるだけの力があつたら、こんなことにはならなかったの」

「そんな、自分を責めないでください……」

「いいえ、これは私の力不足の結果よ」

「まま、だいじよぶ？ かぜ？」



「わぶっ！」

千穂は快哉を上げて、アラス・ラムスを抱きしめる。

「で、でも、一体どうして!? 真奥さんも鈴乃さんも芦屋さんも、みんなアラス・ラムスちゃんがいなくなっちゃったって思ってたよ!?」

不愉快な漆原のことなど、もはや話題にも上がらない。

「……私だって、まさかこんなことになるとは思わなかったのよ」

恵美は、そっぽを向いたままぼつぼつと話しはじめた。

アラス・ラムスからまばゆい光が発せられたと思った瞬間、恵美は聖剣に違和感を感じたという。

「アラス・ラムスがね、聖剣、食べちゃったのよ」

「……え？」

アラス・ラムスが、聖剣を、食べた。

絶対に結びつくはずのないそのSVOに、千穂は目を丸くする。

「こう、ぐるぐる丸めて、パンでも食べるみたいだね。そのときの私のパニック、想像つく？」

「……」

答えようがあるはずもない。

「まあ、要するにそれが、アラス・ラムスなりの『イエソドの欠片の融合』だったらしいの。

私もガブリエルも、何が起こったか分からなくて呆氣にとられたわ」

「いま、ずっとままといっしょなの！」

「それでねー、まーその、イエソドの欠片同士が融合したわけだけど、聖剣は私の体の一部になっちゃってるわけで、結果としてどういうことになったのかというとね……」

恵美は、店内の他の席から見えないように体でアラス・ラムスを隠すと、頭の上に手をかざす。すると、

「わぶっー」

アラス・ラムスが、形を失い光の粒子になる。

千綾が驚いて瞬きするほんの一瞬の間に、恵美の右手に、美しい短剣が一振り出現していた。そしてその短剣、おそらくは聖剣なのだろうが、恵美が今まで見たものとは明らかに形状が異なり、紫色のオーブの輝きが目に見えて強くなっている。

恵美の右腕には今までの戦闘では見たことのない美しい銀色の手甲が出現し、そして、

「まーびっくりしたー」

剣が、喋った。

「……しゃ、喋った……って、ええ!? ええ!? それもしかして……」

「そーなの」

「ちーねーちゃ、あたしかっこいい?」

「……アラス・ラムスが、聖剣と、破邪の衣の一部になっちゃったの」

千穂は、開いた口が塞がらなかった。

「じゃ、じゃあなんで、このこと真奥さんたちに教えてあげないんですか？ 真奥さんもう完全に意気消沈しちゃって、昨日も今日も全然仕事にならなかったんですよ？」

「あ、そうなの？ なんだ、結構ダメージ受けてたのね」

「そりやそうですよー あんなに可愛がってたんだから……」

「ふふ、ごめんね。でも、これくらいしてもいいと思うわ。あいつにも」

次の瞬間、恵美の右手から聖剣が消え、また千穂の目の前にアラス・ラムスが現れた。

「大事なものを失う悲しみつてのを、少しは分かせてあげないとね」

変身の残滓の光が消えると、恵美はアラス・ラムスの頭をやさしく撫でる。

「ガブリエルも泣いて帰ったわよ。まあ、サリエルの墮天の邪眼光が私から聖剣引きはがせないんだから、どうしようもないしね。魔王やベルが最後に見たのはガブリエルが小学生みたいな悪口言いながらダートに逃げ帰っていく光だったのよ……でね、本題はここからなんだけど」

「……え、は、はい、なんでしよう」

あまりの事態に理解がなかなか追いつかない千穂に対して、恵美は更に追い打ちをかけるようなことを言い出した。

「アラス・ラムスは今、聖剣と融合した状態なんだけど、見ての通りある程度は独立して行動

できるわ」

「はい」

「それでね……融合前にこの子が言ってたことなんだけど……どうも私が、ずっと『ばば』と一緒にいると勘違いしてるみたいなのよ……」

束の間の沈黙の後、千穂はうめいた。

「え!?」

「もー今日の仕事の途中で、私の頭の中ではばに会いたければどこだって大騒ぎでね。かといって、この子をいちいち魔主城に預けてたら、いざっていうとき、私が聖剣使えないのよ」

「なんですかそれ」

「そんな日に限って、何か梨香もぼーつとしちゃってて助けを求めるわけにもいなくて」

「鈴木さんが?」

「朝もお昼休みも、帰りの時間も、妙にそわそわしてずっと携帯の着信気にしてたわ」

惠美は温くなったブレンダーを一気におおると、心底困った顔で頭を抱えてしまう。

「とにかくこのままじゃ私、OLとしても勇者としても仕事にならなくなっちゃうの! 私は魔王を討伐しなきゃいけないし、でもそうするとアラス・ラムスに『ばば』を殺させることになっちゃうし、そもそもこの子が聖剣状態だと今までみたいに格納してると、頭の中大騒ぎで日常生活に支障きたすし……もうどうしたらいいか分からないのよお……」

「どんな育児ノイローゼですか……」

聖剣の勇者の泣き言。千穂は頭が痛くなってくる。そんなこと言われたって、千穂はもっと分からない。

分からないが、千穂にしてみれば、できれば代わってあげたい贅沢な悩みだ。

「解決になるかはわかりませんが……」

「何っ!?」

乗り出してくる恵美に、千穂は至極冷静に言った。

「真奥さんのアパートの空き部屋に引っ越せば、少なくともアラス・ラムスちゃんの希望は叶いますよ」

「何かに負けた気がするから、それだけは絶っつつ対に嫌っ!」

「子供みたいなこと言わないでくださいよ」

「だってえ……」

「ばばのおうちにおひっこしー!」

そんな「まま」のジレンマと苦悩などどこ吹く風、リンゴの少女アラス・ラムスは、大人の世界の事情などには関わりなく、相変わらずマイペースなのだった。

## ※

「またその焚火？」

恵美が千穂と一緒にグイラ・ローザ笹塚を訪れると、夕方の西陽が最後の光を街に投げかける中、真奥はアパートの階段の下で、おがらを燃やして浮かぶ煙をぼんやりと眺めていた。

「お前もちったあ日本のこと勉強しろよ。送り火って言うんだよこれは」

「送り火。ふうん。……なんのためにやるの？」

「……迎え火で来た先祖の霊を、あの世に送り返すためだよ。本来盆の締めにはやるもんだが、多少ずれたって構わねえだろ」

真奥はそこで深々とため息をつく。

力なく下がったその手に、アラス・ラムスと恵美と、三人で撮ったあの写真の台紙がつままれているのを、恵美は視界の端に捉えた。

「アラス・ラムスは、迎え火に乗ってきたんだからな。……あれも、無駄になっちゃった。結局一度も使わずじまいだ」

真奥の視線の先にはデュラハン式号があつて、夏の夕暮れの白い陽を受けて、黄色いプラスチックの子供用座席が光を反射する。



夏の夕暮れにかすかな風が舞い、煙を巻いて空に散らす。

「今日はお前と会話する気力はねえ。帰れ」

「随分ね。でも、今日は聞きたいことがあって来たの。答えてもらうわよ」

「……」

真奥が面倒くさそうに顔を伏せたまま、何も言わないので、惠美は勝手に話し続ける。

「旅人が、天使からもらったお守りだけど、王様になった後、どうしたの？」

「っ……」

真奥は、顔を俯かせたまま小さくうめく。

「参考にさせてもらいたい。設定があるなら、教えてくれない？」

「あれか、お前は俺をいたぶりに来たわけか」

「そうね。魔王のくせに一丁前に凹んでるあなたを笑いに来たと思ってちょうだい」

「本当に、勇者だ天使だつて奴らは陰険だな」

「悪魔ほどじゃないわ」

千穂は黙ったまま、じつと成り行きを見つめている。

真奥が怒り出すかとも思ったが、しばらく沈黙した後、ぼつりと呟いた。

「……旅人は、王様になってお守りの存在を忘れた。色々あって昔と同じぼろぼろの旅人に戻ったある日、いきなり目の前に現れたから今度は大切にしようと思ったけど、王様時代の行い

が悪かったせいとか、お守りは人に奪われてなくなっちゃったよ、多分な」

「ふうん、なるほど。でも旅人は、それが大切なものだってことは、思い出したんだ」

「……なんだってんだ」

目に險を籠らせて惠美を睨み上げる真奥。

だが、惠美はなぜか、先ほどの真奥を馬鹿にする様子とは打って変わって、少しだけ顔を赤くして、真奥から視線を外している。

「……あ？」

惠美のその態度に不審を覚えた真奥だったが、

「じゃ、きっと今度こそ、大切にできるわね。どう思う？」

「私も、そう思います」

千穂が初めて声を出す。

「なんなんだよ二人とも……」

明らかに含みのある惠美と千穂の態度にさすがに不審に思った真奥だったが、

「まあ、その旅人の宝物が何かは知らないけど、そこまで言うなら、よっぽど大事なものだっ  
たんでしょ？」

惠美がすっと右手を出すと、ほのかに淡い光がとる。

「大切なものを失った気持ち、少しは分かった？ 分かったなら、今度こそ大事にしない」

その小さな奇跡は、唐突に真奥の目の前に舞い降りる。

「ばばー!!」

送り火の焚火の前に降って湧いたように現れた小さな女の子を見て、真奥は心底驚いて、まさしく豆鉄砲を食らった鳩の如く、目を丸くして固まった。

「アラス……ラムス……一体、おい、これは……」

ふらふらと立ち上がった真奥は、思わず手に持っていた写真を取り落としてしまう。

いなくなったはずのアラス・ラムスはそれを見咎め、

「ばばだめー! おとすのばっちーの」

素早く写真を拾ってそれを胸に抱える。

「お、おい、本当か、お前、本当にアラス・ラムスか!?」

真奥は地面に膝をついて、写真を抱えるアラス・ラムスの頭や顔や肩をべたべたと触る。

「ばばやだくすつたいー」

くすくすつたい、は言うのが難しいのだろうか。

アラス・ラムスは子犬のような反応で笑い声を上げると、片手で真奥の手を握んだ。

「……ま、そういうことだから」

恵美の言葉も、真奥の耳には届いていない。

「そ、そうか、連れてかれたんじゃ、なかったのか……」

「もっと苦しめてやろうかとも思ったけどね。でも、アラス・ラムスがばばに会いたって言うし、あなたと同じことをしたら私が悪魔と同じレベルに下がるから仕方なく、こうして連れてきてあげたのよ。感謝し………ちよつと」

惠美は言い訳がましくまくしたてていたが、想像だにできなかったものを見て真剣に慌てた。

「あなた、泣いてるの？」

「あ？ え？ あ？」

真奥は、言われて自分の顔に手を当てる。そこには、命が失われようとしたあの日以来流したことの無い涙が、一筋伝っていた。

「な、何よ魔王のくせに、何泣いてるのよ！ ちよつと、バカじゃないの！ やめてよ！」

惠美は真奥の反応に思い切り狼狽し、どうしていいか分からずとりあえず罵る。

「ばば、いたいのか？ いたいのか？」

同じく真奥の涙に気づいたアラス・ラムスが、それこそ泣きそうな顔で真奥を見上げてきた。

「や、これはあれだ、うん、なんかこう、事故みたいなんもんで、その」

真奥は真奥で必死に言い訳しながら涙を隠そうとするが、

「真奥さん、嬉しいんですね。アラス・ラムスちゃんが帰ってきて」

千穂の微笑みが、真奥の全てを言い当てていた。

「流れるでしょ、涙。嬉しいときに」

真奥は、啞然として千穂を見る。

「また一つ、世の中のこと、分かりました？」

「ちーねーちゃ、ばばだいじよぶ？ いたくない？」

千穂は涙目で訴えかけてくるアラス・ラムスの頭を撫でる。

「大丈夫よ。ばばは、アラス・ラムスちゃんに会えて嬉しいだけだから」

「な、泣いてねえし！」

そのとき突然、真奥は憤然と立ち上がって言い放った。

「だ、誰が泣いてるんだっての！ わ、分かってたし！ お、俺はこいつの親父だぞ！ ガブ

リエルや天兵連隊の連中が逃げたの、そういうことだって分かってたし！」

今時小学生でもなかなかしないような強がりを吐くと、

「わぶっ」

真奥はアラス・ラムスを乱暴に抱き上げた。

「きよ、今日だってちゃんとアラス・ラムスの分の飯用意してあんだかなー！ おい！ 芦屋、

鈴乃！ 飯だ！ 飯にすっぞー！」

そして送り火だと焚いていた焚火の始末すらせずに階段を駆け上っていつてしまう。

「……強がりもあそこまで行くとは大したものね。でもご飯で、あの部屋で食べるのかしら？」

「何か、ご飯だけはしばらく鈴乃さんのおうちで食べるらしいですよ？ 夜寝るときは、夏だ

からかえって涼しいとか意地張ってましたけど」

「あいつらしいわね」

惠美は苦笑して、ヴィラ・ローザ笹塚の二階を見上げる。

自分の知る「真奥」らしい反応を見て、惠美は、どこか安堵した部分があるのを認めざるを得なかった。

進化聖剣・片翼に関わる謎はますます深まるばかりだし、真奥やガブリエルの言う。大魔王サタン。とやらがそれにどう関わってくるのかも分からない。

上では、早くも声屋達が口々に驚き騒ぐ声が聞こえてくる。

「それにしても……こんな事態になって、通報とかされないのかしら」

「そう言えば……でも、結構じろじろは見られてるらしいですけど、元が古いですしね……警察に來られても困りますし、いいんじゃないですが、それはそれで」

「それもそうね、どうせしばらくアラス・ラムスは私の方で引き取らざるを得ないわけだし、私が心配することじゃないか」

「まーまー！　ちーねーちやー！　ごはんー！　ごはんー！」

「おい、アラス・ラムスー！　危ないぞー！　ままみたいに落ちるぞー！」

二階の階段上にアラス・ラムスが駆け出てきて惠美と千穂を呼ぶ。後から出てきた真奥が後ろから抱き止める。

「おい、食ってけよ。鈴乃が作ったもんだから、変なことしてねえから」

「……………どうします？」

「やむにやまれず母親になっちゃったからね、食生活は、きちんと見守らないと」

そう言々と恵美は、注意深く階段を上がってゆく。

千穂が苦笑しながらついてくる気配がする。どうやら、強がりを思い切り見抜かれているようだ。

ガブリエルの捨て台詞の意味は今もって分からない。だが、勇者たる自分は、きっと世界中のこんな夕食時の平和を守るためなら、決して間違った道には迷わない。

今この時だけは、そう思うことができた。



Tokyo Big Egg Town





※

「あの赤子と、エミリアの聖剣が融合した!?」

「そう、そうなんだよー! もう本当に最悪だよー」

「それは大変だったね。ところでそんなことより、そろそろ僕の女神にお誘いかけてみようと思っただけど、どう思う?」

「あー、ちょっとでもお前から身になる話が聞けると思った僕がバカでしたよ!」

「そう怒るなよ。でも僕も墮天の邪眼光がダメなら完全にお手上げだから、手伝えることなんて何もないと思うぞ」

「ほんと役立たずだねお前!」

「でも、イエソドの、アラス・ラムスと、進化聖剣・片翼が融合するの、マズくないか?」  
「だから困ってんでしょ!? だから悩んでるんでしょ!? だから相談しに来てんでしょ! あ  
のさ、お前ももうちょっと危機感持てよ! 人間の女にうつつ抜かしてる場合じゃないの!  
ああもう! あのときあの女の子に甘い顔するんじゃない!」

「女に弱いのはお互い様だなあ、何かお前に妙に親近感湧いてきた」

「やべえ、こいつ殴りてえ!!」

「そうかつかするなよ。どうだ、美しいと思わないか？ 彼女がかってトレーパーの広告になったときの写真だ。ワッフォーオークションで五千円もしたんだぞ」

「殴る！」

「ぐはっ!!」

「だから危機感を持てつつってんのに!!」

「この価値が分かんとは……まったく……だが、別にエミリアは、分かっている。アラス・ラムス」と進化聖剣・片翼を融合させたわけではないんだろう？」

「多分ね！ それが何!？」

深夜、閉店したセンタッキーフライドチキン幡ヶ谷駅前店の二階で、冷めたポテトと手羽先をつまみながら、大天使サリエルは寛れているガブリエルに向かって、言った。

「ならば、もう片方の翼を押さえれば、最悪の事態は免れるんじゃないか？」

「……まあね。でもそっちは本当にどこにあるか……」

「ふっー 朴念仁のお前には分からないだろうな、ちよつと男と女の愛について勉強すればいいと思うよ？」

「……………」

「黙ってグーを作るなグーを！ ちよつと冷静に考えれば分かるだろー！」

「誰!? 悪いけどさっぱりだよー それに偉そうなこと言うけど、お前が恋愛成就させたな

なんて話聞いたことないんだけど？」

「ふふふ、金では今この時、我が女神を陥すための予行演習にすぎ……あぶっ!!」

予告なしで、ガブリエルはバーでサリエルを平手打ちした。

「毎回お前に関する苦情処理をさせられてた僕の身にもなれ」

「わ、悪かったー 悪かったー 明日も営業あるんだから顔はやめろ!」

「何が営業だよ……。少しは立場自覚しろ。聖剣奪還は僕の失策を補う任務だから、最終的な責任は僕にかかってくるとはいえ、任務未達成の理由が人間の女に入れ込んでるなんてバレたら、タダじゃ済まないぞ? あいつと同じ立場になりたいわけ?」

呆れたようなガブリエルの言葉に、片頬を腫らしたサリエルは鼻を鳴らして答える。

「神や金世界をも敵に回す覚悟なければ、愛を貰くことなどできはしないさ!」

「どこまで本気で言ってるんだか……で? 男と女の愛について勉強すれば分かるもう片方の持ち主ってのは、どこの誰!?」

「そもそもイエソドのセフィラを持ち出したのは、誰だ? それを考えれば、おのずと分かるようなもんだろうに」

サリエルは不敵な笑みを浮かべながら、顔をかばって言った。

「片方の翼を娘に預けてるんだ。そしたらもう片方を預ける相手なんか決まってるだろう」

サリエルは、食べ終わった手羽先の骨をびこびこと振りながら、言った。

「フルド・ユステイーナ。エミリアの父親だよ」

## 作者、あとがく — AND YOU —

一人で乗る観覧車は、思ったよりも広いです。

写真にも一人で写りましたが、出来上がった写真には知らないおっさんが一人写っていました。誰ですかこれ。作者ですか分かりたくありません。

もしあなたが都内某所の観覧車に乗るとき、ゴンドラの中で赤いメガネをかけたサンマがぴちぴち跳ね回っていたら、それはきっと作者の残留思念です。一緒に、空の旅を楽しみましょう。

今回の魔王と勇者を巡るドタバタは、「育児」をテーマに展開されております。

なので、本書をお読みくださった読者の皆様に、お知らせとお願いがございします。

本書執筆にあたり、多くの育児本を読んだり、育児に携わった方々に取材をさせて頂き、ネットの育児Q & Aサイトも見えて回りました。

そのとき初めて、育児は世代間でも、個人間でも、是とする部分に大きな違いがあることを知りました。

食事の内容、補助器具の使用、医薬品の利用など、あらゆる分野で世代地域個人で様々な意

見があり、育児経験の無い、ソロで観覧車に乗っちゃうような独り身の男性である私が言うのもなんですが、育児にベターはあってもベストは無いと強く感じました。

なので、本書内で取り扱っている育児に関わるシーンは、世の中の子供の数だけ存在する育児方法のほんの一例にすぎません。

まさか本書を育児指南書として利用される方はいらっしゃらないとは思いますが、乳幼児をお連れの皆様、特に食べ物飲み物は、お子様お一人お一人に合ったものを適宜に判断してご利用ください。

また本書には、ドラッグストアでの日焼け止めの購入に否定的見解を示すシーンがありますが、薬剤師の方の適切な指導の下に購入、使用された場合などはその限りではありません。熱中症対策に於いても、素人応急処置だけでは取まらない場合も多々ございます。

お子様の心身の健康のために、状況に適したご判断で医薬品の利用、救護活動を行っていただきますよう、何卒お願い申し上げます。

そして今回の物語は、今まで育児に全く縁の無かった奴らが、必死に頑張って、ときに脱力して、また頑張りがちながら生きていくお話です。

読者の皆様のご厚意と、関係各位のご尽力により、ここに「はたらく魔王さま！」第三巻をお届けすることができました。

今回珍しく、作中でキヤラが暴言を吐いていないためにお詫びしなければならぬ相手がないのが幸いです。

また作家生活一年目のわずか三巻目にしてコミカライズのオファーまで頂き、恐悦至極と申し上げる他ありません。

コミックの世界ですます儼しい生活を送る我らが魔王と勇者たちを、温かく見守っていたければ幸いです。

それでは、また次巻でお会い致しましょう。

はたらく魔王さま！ 3巻目にして初のあとがきページなる場を  
いただきました。 〇29とかいておにくと申します。

夢にもありませんでしたが、魔王さまついにコミカライズです。

担当さんからお伺いした時はそれほもうびっくりで  
同時にとても嬉しかったのを覚えております。

例の方の手でキャラクターに命が吹き込まれるなんて  
楽しみで仕方ないー！！ 誠報に期待です。

ところで新キャラもぞくぞく登場していいますが、  
大家さん一向に成ってきませんねー！

今度和ヶ原さんに聞い詰めてみようとおもいます。 笑

ではでは、また来春でお会いしましょう。





『はたらく魔王さま! 3』  
巻末特別企画

履歴書集



ふりかき			
氏 名 アラス・ラムス 代筆・真美			
年	月	日	性別
ふりかき	真美	さくら	一歳
住 居 地 東京都渋谷区笹塚X-X-X			
ウラ・ロ・ザ笹塚201号室			
代筆・真美			
備 考 電子使明細書電話を買い与えた方がよいのでしうか by 真美			

代筆  
千鶴

年	月	学歴・経歴
		目指せ東大! by 真美
		あはたが富江 夢が大きいのが小さいのが 何かに似ている by 真美
←	10	バツとててててててててててててててて by 千鶴
	↑ 11	↑ 11 by 千鶴
	↑ 12	↑ 12 by 千鶴
		別にいいからいいからいいから by 真美
		お世も聞いてたいいわ by 真美

資格	五七切、富のタイトル by 千鶴 ← 資格...? by 鈴乃	
特技・趣味	可愛なこと by 千鶴	
希望職種	父を助けて by 鈴乃 ← 色々おもしろ by 真美	
本人希望欄	一家団圓 by 鈴乃	
連絡先	住居地の 市街	住居地の 氏名 真美真美 近江真美 by 鈴乃

↑ by うさぎはら  
貴様はそれについて何も思うところは無いのか by 真美

むーいひひ by 千鶴  
〜さくら by 真美

アラス・バグ 代名 真契

年 月

学年

資格

特技・趣味

希望職種

本人希望欄

通称・別名

所属団体の  
名称所属者の  
氏名

これが

# 世界初公開!!

## 墮天使の秘密基地だ!!

(押し入れ)

戸棚に内蔵でシヤングルで  
購入した小型扇風機

戸棚に内蔵で買ったLED  
熱くないし天板から吊っている。

んんん  
んんん  
んんん

お菓子と  
PCパーツ

ニート墮天使の  
定位置

グチャグチャ  
コンコン

ノートPC

魔王城の寝具と衣類。  
最近何故かお菓子のカスがよく落ちている。

いい加減  
にしる  
添削!

両サイドを開ける  
ことで風が通る。

起れる戸棚



●和ヶ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま!」(電撃文庫)

「はたらく魔王さま!2」(同)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。



あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19  
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「和ヶ原聡司先生」係

「029 先生」係





電文文庫

# はたらく魔王さま!3

和ヶ原聡司

発行 二〇一一年十月十日 初版発行

発行所 高野 潔

株式会社アスキー・メディアワークス

〒一〇一八五八四 東京都千代田区富士見一八十九

電話〇三三五二一六八三九九（編集）

http://www.akb.jp/

発売元

株式会社角川グループパブリッシング

〒一〇一八一七七 東京都千代田区富士見二十三十三

電話〇三三三三三八一八六〇五（営業）

製作者

株式会社映印製

製本

株式会社ビルディング・グラフィックセンター

本書のコピー・スキャン、電子データ化等の無断複製は、著作権法上その  
例外を除き禁止されています。なお、代行業者等に依頼して本書の電子データ  
化等を行うことは、私的利用の目的であっても認められておらず、  
著作権法に違反します。

本書の電子データ化は取り替えたします。購入された電子データを印刷して、  
株式会社アスキー・メディアワークスに無断複製等してはなりません。

印刷会社等において印刷を行う場合は、印刷料を別途お支払いください。

但し、本書にて本書を輸入されている場合は印刷料を別途お支払いしません。

本文はカバリーに掲載してあります。

## 電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで「小さな巨人」としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times, Changing Publishing) 時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日  
角川歴彦